
妖魔界

山本吉矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖魔界

【ZINE】

N1736F

【作者名】

山本吉矢

【あらすじ】

突然、異世界に飛ばされた一人の少女。彼女はこの世界を救わないと戻れなくなってしまった。武器も無しに知恵と勇気で危機を乗り越える事に。「友情」がテーマの異世界ファンタジー冒険です。

プロローグ

「そりか・・・今はそういう状況か・・・」
俺はその事実を聞いて愕然とした。

もう間もなくこの世界は滅びようとしていた。
おそらく・・・あいつが原因だろう。

「くつ・・・！」

どうにもならないのか！！

「ルドルフ様・・・唯一解決する方法があります」

「何だ？それは・・・」

「かなり危険な賭かもしませんけど・・・妖魔ハンターを呼ぶ事
です」

「なんだと！？」

馬鹿な・・・。

「それがどんな存在か・・・分かつて言つてるのか！？」

妖魔ハンター・・・。

それは俺達、妖魔にとつて天敵だ。

一度だけこの妖魔界に現れた事があるが、その時全滅一歩手前まで
追い込まれた事がある。

「そんな事をすれば、この世界を滅びるのが加速するだけだ！」

「お待ち下さい！実は・・・今の妖魔ハンターはこの妖魔界を滅ぼ
す訳ではありません」

「なんだと！？」

「今の妖魔ハンターは・・・この世界の事を考えてくれます！」
まさか・・・。

「確かに・・・にわかには信じられないかもしませんが・・・ドル
イドのオババがそう言つているのです」

「ドルイドのオババが！？」

オババの占いは百発百中だ。

そのオババがそう言つのなら・・・。

「分かつた・・・。呼んでみるか」

それでこの世界が救えるのなら・・・。

危険な存在であろうとも望みを託すのみ。

第1章 城

いつもと変わらない平和な日。

それはいつまでも続くと当たり前のようになっていた。

だけど、お姉ちゃんがお隣のお兄ちゃんと一緒に旅行に出かけた。

お姉ちゃんはいつも思いついたらすぐ行動しちゃうのよね。

かなり羨ましいと思う。

お姉ちゃんはいつでも前向きで、すぐ行動する。

私には無い部分。

ふう・・・。

いいのよ。

私はこれで。

あまり物事に首を突っ込みたくない。

こつしてのんびり歩くのも悪くないし。

いつものように買い物に出かける。

今日は何を買おうかな。

うん。

私はこういつのが合ってるのよ。

「見つけた！！」

え・・・？

何・・・！？

辺りを見渡す。

今・・・変な声が聞こえたような気が・・・。

「頼む！助けてくれ！」

やはり・・・声が聞こえる。

男の人のような・・・。

しかも・・・助けを呼ぶ声が。

でも・・・何処から？

「お願いだ！！」

え・・・?

「きやー！」

それはすぐ目の前にいた。

何・・・これ・・・！？

男の人気が立つて立つたけど・・・。

微妙に違う部分がある・・・。

それは・・・。

黒くてコウモリのような翼がある事。

「お願いだ！あんたの力が必要なんだー！」

そう言つたけど・・・まだ状況が理解出来ていない。

だって・・・信じられない存在が目の前にあるんだもの・・・。

なつ・・・何！？

「頼むーー！」

その男は私の腕をつかむと同時に、周りが光りに包まれた！

「な・・・何！？」

第1章 2話

「」は一体・・・?

辺りを見渡す。

まるで知らない所。

空は真っ暗で何処からか明かりが漏れているのか、一応何処になにがあるのかは分かる。

だから今私がいるのが平原だという事が分かる。
でも・・・今まで見たこと無い光景だわ。

これは夢・・・?

ほっぺをつねつてみる。

痛い！

夢・・・じゃないみたい。

改めて周りをじっくり見渡す。

あれ・・・?

さつきは氣づかなかつたけど。

遠くにお城が見える。

日本にあるようなお城じゃなくて、西洋とかにあるようなお城。
なんだらう・・・?

とりあえず行つてみよう。

しばらく歩くとそこにたどり着く。

門が開いているって事は入つてもいいのかな？

「すいませーん！！」

一応声をかける。

だけど・・・物音一つしない。

人がいないのかしら・・・。

ちょっと不安になる。

恐る恐る中に入る。

お城の中・・・もちろん始めて入るけど・・・。

「こういうもののなかしら。

誰もいなってのが不気味だけど。
さらに奥へと進む。

相変わらず誰もない。

ここは無人なかしら……。

二階へと続く階段が見える。

ふと。

そこに何か肖像絵があるのが見えた。
大きな絵。

そこには一人の女性が描かれている。
その女性は鎧に身を包み、剣を持つている。

なんだらう・・・?

とにかく・・・上つてみよう。

本当に誰もいないのかしら・・・。

あれ・・・?

たいまつに火がついている。
人がいるのかな・・・。

「すいませーん」

声をかけつつ、そこに入る。

その一番奥に大きな椅子があつた。

そこに誰かいるみたい。

「あっ、すいません。勝手に上がり込んじゃつて・・・
「構わない」

静かに答える。

「あの・・・。すいませんけど・・・」
「何処ですか?ちょっと迷つてしまつて」

「迷つたんじゃない。君は呼び出されたんだ」
え・・・?

「あっ!・・・あんたは!」

それは、さつき私の前に現れた男!

「何故？私を
君は選ばれたからだ？」

え
・
・
・
選
ば
れ
た
・
・
・
！
？

第1章 3話

「まずは何処から話そうか・・・」

「そうね・・・。まずはここは何処なの?」

率直な意見だつた。

何せ見たことも無いような場所。

何処か分からないと話しも進まない。

「そうだな・・・。信じられない話しかもしれないが・・・。ここは妖魔界だ」

「・・・・へ? ようまかい? ? ? ?」

何それ?

「この世界はいろんな世界がある。神々が住む世界の神界、死者達が訪れる冥界、そして君達が住む人間界と俺達が住む妖魔界だ」

何それ・・・?

「ふざけてんの?」

「君だつてもう分かつてははずだ。ここが君達の住む世界とは違う事を」

・・・それは・・・何となくだけ分かつていた。

何せ太陽も月も無いのに周りが分かるような明るさがある事。

この事で何か妙な感じはあつたけど・・・。

それでも何やら信じられないような・・・。

「だいたい俺だつて人間じゃない」

そういうと立ち上がる。

「ふん!」

そう叫ぶと・・・。

背中から黒い翼が飛び出る。

「ええええ!!」

そして・・・そのまま宙に浮く。

「どうだ?俺が人間に見えるか?」

確かに・・・翼以外は普通の男に見えるけど・・・。
これは確かに普通の人間とは言えない。

地面に着地して翼を収める。

「俺の名前はルドルフ。君にこの妖魔界を救つてもらいたいんだ」「ちょっと待つて。あんたが人間じゃない事もここが私の住む世界となんとなく違つて事も、まあ認めるわ。だからってなんで私がそういう事を?」

突然そんな大事を言われたつて。

「確かに突然な事だ。だが・・・君にしか出来ない

「だーかーらー!何故私が!?」

「それを言われると弱いんだが・・・。ドルイドのオババがそう呑つたからとしか・・・」

え・・・?

「ドルイドのオババ・・・?」

「ああ。これまでいろんな占いをしてきて、その命中率は完全。外した事が無いほどだ」

「つまり・・・その占い師が私が救つてくれるつて・・・だから呼んだと?」

「そういう事だ」

なんて事・・・。

「いくらなんでも、たかが占いで呼ばないでよ!ー!ー!」

こっちの事も考えてよ。

「悪い・・・。この世界を救つまでは帰す訳にはいかない

「それって脅し?」

「『』の妖魔界を救う為だ。そう取つてもらつても仕方ない
くつ・・・。

待つて。

「そのドルイドのオババって何処にいるの?」

「この近くに住んでいるが・・・何故それを?」

「私も聞いてみるの。自分で確認しないと気が済まないし

第1章 4話

私はルドルフにドルイドのオババの居場所を教えてもらつた。
ルドルフが付いて来るとか言い出したけど、断つた。

何せ突然そんな事言われてもまだ信用する訳にはいかない。

それに一人で考えたい事もあるし……。

だつてここが私達の住んでる世界とは違うとか言つても、まだ夢の
ような話しだし……。

確かに……確かにルドルフは人間では無かつたわよ。

でも……。
ここが全く違う世界だなんて……まだ受け入れるには情報も少な
い。

うかつに信じる訳にはいかない。

それには……話しに出ていたオババに会つのが一番でしょう。
その人が本当に占い師で、本当にその占いが当たるといふのなら……
。

私自身でそれを確認するのが一番。

ふう……。

こうして見ると私もお姉ちゃん似た性格してるなあと思つ。
なんでも自分の力で解決したくなるもん。

ガサガサ……。

何か……物音がする。

何……?

物音のした方を見る。

「きやーーー！」

……！

悲鳴！？

すると……小さな妖精みたいな子が物音がした方から飛び出でき
た。

その妖精には体に糸みたいのが巻き付いて走っている。

そして・・・。

その後ろから化け物が追い掛けで来ている。

大きさは私の腰ぐらいの小ささ。

顔がとても醜く肌も薄黒い。

誰がどう見たって人間じゃないのは確か。

その化け物が鋭い爪を向きだしにして、妖精を追い掛けている。

助けなきや！

「待ちなさい！..！」

第1章 5話

「待ちなさい！」

思わず叫んじゃつたけど・・・。

ハツキリ言つて叫んでから後悔してしまつた。

そりやあ・・・確かに見過ごす事は出来ないけど。

相手は1匹とはいえ、鋭い爪を武器にしている。

それに対して私はどう？

まったくの素手で何の武器も持つてない。

そりやあ・・・お姉ちゃんみたいに素手でも戦える人なら話は別で
しょうけど・・・。

私は何か武術を習つてる訳でも無い。

何にも無い状態で戦える訳では無い。

どうしよ・・・。

そうだ！

何か・・・武器になりそうな物・・・。

「ギャー！！」

どうやら私に獲物を変えたみたい・・・。

どうしよ・・・。

とりあえず・・・。

逃げるが勝ち！――

逃げる・・・逃げる・・・逃げる！――

後ろを見る・・・。

うつ・・・追い掛けてくる。

しかも・・・どんどんその距離が短くなつて来ている。
あっちの方が足が速いんだわ。

このままじゃ追いつかれる！
どうしよう・・・どうじみつ・・・。

あっ！

目の前に木が。

あれだわ！！

「えい！！」

ジャンプして木の枝に捕まる。
そのまま・・・木の上に登る。

ふう・・・。

下を見ると・・・恨めしそうな表情で化け物が見ている。
だけど登つてくる気配は無い。

どうやら木を登る事は出来ないみたいね。

それでも奴はずっと下にいる。

とりあえずの危機は去つたけど・・・。

あいつをどうにかしないと駄目ね。

でもどうしよう・・・。

むざむざ降りても、あの爪の餌食になるのは田に見えている。

何か策を考えないと・・・。

でもここは木の上だし、そんないした物は・・・。
ん？

木・・・？

そうだ！！

木の枝を折つて・・・。

よし！これで尖った武器が手に入つたわ。

あとは・・・。

・・・残酷だけど・・・やるしか無い！

「たあ！！」

化け物の上に飛び降りる。

もちろん、さつき手に入れた木の枝のとがつた方を下に向けて。

このまま・・・降りた時の衝撃で突き刺す！！

・・・瞬間、目を背ける。

だけど・・・化け物は倒れていた。

残酷かもしれないけれど。

いわしおきや、私やあの子が殺されていた。

ふう・・・。

「あの・・・ありがとうございます」

妖精さんがあ礼を言つてくれる。

「つうん。いいのよ。何か気づいたら声出しちゃったようなもんだから」

嘘は言つてない。

何せ後悔しちゃつたぐらいだし。

でも・・・それでも見捨てるぐらいなら勇気を振り絞つた方がいい。

「あの・・・私、佐藤葉子って言つたの。あなたは？」

「ヨーロですか？えつと・・・私はフェアリーとしか

フェアリーって・・・確か妖精って意味だったわよね。

どういう事なのかしら。

「あんまり・・・そういう風に名前を呼び合つてのが無いから

へえ・・・。

個別の名前が無いのかしら。

それにしても・・・。

この妖精を見ると、じいじが私のいる世界とは違つてハッキリ分か
る。

あの化け物もそうだけど。

絶対あんなの見た事ない。

「あつ、そうだ！ 聞きたいんだけど、ドルイドのオババって何処に
いるの？」

この子を助ける為に走り回つてしまつて、現在位置が分からなくな
つてしまっていた。

「え？あのオババに用ですか？」

「ええ。ちょっとね」

ある意味とても重要な事だし。

「それなら、私が案内します。助けて貰つたお礼に
「いいの？ ありがと」

ふふ。

なんか妙な展開になつて来ちゃつたわね。

・・・あれ？

そういえば・・・。

今頃気になつたけど。

何で私ここにいる人達の言葉が分かるのかしら？

あのルドルフって奴は完全に人間と同じ姿していたから気にならなかつたけど。

彼女はどう見たつて人間じやない。

大きさなんか私の手のひらぐらいの大きさしか無い。
さらに羽で飛んでいる。

幼い頃に聞いたような妖精の姿そのもの。

「そういえば・・・なんであの化け物に追い掛けられていたの？」
ふと思つた疑問を言った。

「だつて・・・あれゴブリンだもの」

「・・・ゴブリン？」

何それ？

「え？ 知らないの？」

私は素直に頷く。

「あのね。なんか・・・ルドルフって奴の言葉だと、私は人間界から連れて来られたんだつて」

「ええ！ ！ それじゃあ・・・ルドルフ様のお客様だったんですか！」

！」

え？ えええ？ ？ ？

「こ・・・これは・・・知らぬとはいえ、失礼の数々・・・」

「ちょ・・・ちょつと待つてよ。別にそんなんじやないから」というよりも・・・。

あいつつてそんなに偉い奴だつたんだ・・・。

フェアリーさんの案内で、ようやくドライドのオババのいる所に来れた。

全く分からぬ所だから、一旦田舎から外れるとどう戻つていいか分からぬもんね。

そういう意味では彼女がいて良かつたわ。

そこは洞窟のようになつていた。

「すいませーん」

私は声をかけつつ中に入る。

「待つておつたぞ」

中から声が聞こえる。

まさにオババという名前の印象の通り。年老いたような女性の声が聞こえた。

私は奥へと進む。

そこには・・・ローブを身にまとつた老婆がいた。顔はハツキリとは分からぬ。

もつともこの室内には明かりがほとんど無いから、見えないだけかもしれないけど。

「ヨーロ、おぬしが来る事は分かつていた」

・・・・・

私の名前を知つてる！？

つて・・・そう言えばルドルフに私を連れて来るようになつたのが、このオババだもんね。

それでも・・・名前を知つてるつて事はこのオババの占いの的中率は絶対だと言うのが分かる。

「何故おぬしが呼ばれたのかを聞きたいのじやな？」

「さうよ。この妖魔界を救つて欲しいって・・・どういう事！？」

このオババがそんな事占わなければ良かつたのに。

「すまんの。おぬしの・・・その能力がこの妖魔界には必要なのじ
や」

え・・・?

能力・・・!?

「何言つてゐる?私にはそんのは・・・」

「何を言つている・・・。おぬしがわしらと話せる事自体、おぬし
の能力なのじやぞ?」

「え・・・!?」

そう言えれば・・・。

それは不思議に思つていたけど・・・。

「この妖魔界に来た事によつて田覓めたのじや わい。おぬしはどん
な生き物でも会話が出来る能力をな
なるほど・・・。

もしそうならば納得出来る。

だいたいこの妖魔界の言語が私の世界と同じ言語なんて、そんな都
合のいい事がある訳ないとは思つていた。

そして・・・妖精に会つた事でここが私の世界では無い事も分かつ
た。

だからこそ不思議に思つていたけど・・・。

私の能力だつたんだ・・・。

「もう一つある。それがおぬしの最大の武器じや」

「最大の武器?」

「そうじや。剣を一本、出す事が出来るはずじや」

剣を・・・?

「それこそが妖魔キラー。わしら妖魔界に住む生き物にとつて天敵
とも言える武器なのじや」

「え・・・えええええええ――――――!??」

「ま・・・まさか！ オババ・・・彼女が・・・妖魔ハンター！？」
「そうじや」

フェアリーさんが言った妖魔ハンターって・・・何？

「あの・・・その妖魔ハンターって・・・？」

「その昔・・・もうだいぶ昔になるじゃろう。この妖魔界に一人の人間が現れてな。そいつがたった一本の剣でこの妖魔界を壊滅的なまでに倒してしまったという伝説があるのじや」

え・・・。

「ちょっと待つてよ。もし・・・もしよ、私がその武器を持つてると仮説して、なんでその私がこの妖魔界を救うの？ 逆に滅ぼしちゃうんじやないの？」

「あのルドルフも最初はそう言つておつたの！」

「そりやあ・・・普通はそう思うでしょうね・・・。

「じゃが・・・わしはおぬしのその性格に賭けてみる事にしたのじや」

「え・・・？ 私の性格？」

「そうじや。おぬしはその妖魔キラーを持つてるとしじや。この妖魔界の住人を全て滅ぼすと考へるか？」

「そ・・・それは・・・。

・・・確かに・・・そんな事をする理由が無い。

さつき見た化け物のように、やむを得ない場合は仕方無いとは思つけど。

好き！」のんでそんな事はしたくない。

だいたい・・・全てつて事はこのオババや・・・フェアリーさんも含むつて事になる。

私は他の住人はともかく、このフェアリーさんは滅ぼすなんて出来ない。

「そこでじゃ……。そのおぬしの力を使って……倒して欲しい奴がいるのじゃ」

「倒して欲しい奴?」

「そうじゃ……。そいつの名前はクロウ」

「クロウ……」

「そいつはこの妖魔界に理性を失わせる欲望の塊のようなやつなのじゃ」

そんなのがいるなんて……。

「残念じゃが……この妖魔界に奴に対抗出来る奴はおらん。あいつの力は妖魔界の住人の心を欲望に傾かせる力がある。このまま放置していたはこの妖魔界は奴の欲望に巻き込まれるじゃうつなるほど……。」

なるほど……。

「つまり……そいつも妖魔界の住人である事は間違いないのね?」

「そういう事じゃ。それで……おぬしの持つてる妖魔キラーならば、クロウをも倒す事が出来るじゃうつと……そして……おぬしは妖魔界の住人ではない」

そこで私が呼ばれたと……。

なるほどね。

だいたいの話しさは読めたわ。

それにも……。

私がそんな凄い事をね……。

「身勝手な話しかもしれぬ。じゃが……おぬしに助けてもらひ以外に手だてが無いのじゃ」

うつ……。

まいったなあ……。

私、こういうのに弱いのよねえ……。

だからこそ、さつき咄嗟にフェアリーさんを助けちゃつたりするんだし。

「分かったわ。私がそんな力を持つてて、それを必要とするなら……

・やってみるわ」

「ああ・・・。ありがたい事です、じゅ・・・」

「まずはクロウに向かう前に”巨人の目”に向かつて見るのがいいじゃろ？」

「え？ 何？ その”巨人の目”って？」

「”巨人の目”って言うのはね」

オババの代わりにフェアリーさんが答える。

「この妖魔界の大地には巨人が眠っているという伝説があつて・・・。 その伝説の通り、この妖魔界には各地に巨人の形が残つてゐる。 その一つとされてるのが”巨人の目”そこへ行けばどんな真実も見えるって話しよ」

なるほど・・・。

「クロウはどこかに隠れておる。 残念じやがわしの力を持つてしても、 奴の場所を調べる事は出来ぬ・・・」

「へえー・・・。

クロウは妖魔界の住人では、 倒す事が出来ないほどの力の持ち主だつて言つてたけど。

すでにオババの力を超えているのね。

「そこでじゃ。”巨人の目”的を借りるしかないじゃろ？ あの”巨人の目”ならばクロウの居場所も見つける事が出来るじゃろ？ じゃが・・・そこまでの道のりは長く険しいぞ。 クロウもそこに誰も踏み入れる事の無いように、 奴の手下がいくつか待ちかまえてるしのう・・・」

それはそれは・・・。

そりやあ・・・そいつの立場だつたら、 自分の場所を知らせる事になる存在に向かわせる訳にはいかないものね。

「つて事は・・・。 まずクロウつて奴はその”巨人の目”を壊す事は出来ないつて事ね。 破壊するのが一番の妨害だもの」

「さすがに奴もそこまでは出来ぬだろう」

「そしてもう一つ。クロウもその力を認めてるって事ね」

「そうでなきゃ邪魔するなんて考えないもの。

「そういう事じゃ

よーし・・・。

「そういう事なら・・・。そこまで誰か案内してくれないかしら？」

私はその場所を知らないし・・・」

流石に一人で行けるほど、私はこの妖魔界の地形が分かる訳では無い。

当然・・・危険を承知で付いて来る人を見つけないと。

「それなら・・・私が案内します！」

「フェアリーさん・・・」

そんな・・・。

「分かつてるの？かなり危険よ。さっきの化け物の比じやないかも
しれないのよ？」

腕に覚えがあるってなら話しさ別かもしねいけど・・・。

「いいんです！私・・・命を助けてもらつたお礼をしたいんですけど…」

フェアリーさん・・・。

「私・・・この妖魔界の生き物は全部知つてるんです。特徴や弱点
も全て・・・だから、力になれると思うんですけど…」

「どうじや？ここまで言つのじやから・・・」

確かに・・・。

目を見ると決意が固まつてるのが分かる。

ここまで来るとテロでも動かないってのは、お姉ちゃんでつくづく
分かつている。

「分かったわ

それに・・・。

特徴や弱点を知つてると言つのはかなりの強みだわ。

彼女には戦う力は無いから、代わりに私が戦えばいい事だし。

“巨人の目”に行くまでに色々目印の目的地があるので、そこを経由して行けば行きやすいです。いきなり“巨人の目”に行こうとしても迷うだけですし

なるほどね。

確かに・・・私達の世界と違つて目印になりそうなめぼしい物は何も無い。

建物はルドルフがいたお城を除いて全く見えないし、山だの川だのといった地形も見られない。

いえ、ただ一つ高い山がそびえ立つていて

あれ以外はまるで何も無いって感じ。

これじゃあ・・・確かに迷いそうだわ。

「あれは？」

私は唯一見えた高い山を指さす。

「あれが第一の目標でもある“巨人の足”です」

あれが足・・・。

“巨人の足”を超えると次は“巨人のへそ”というくぼみが見えますので、そこに向かいそこに到着すると次に見える広い高原が“巨人のてのひら”そして湖である“巨人の口”へと行き小高い山である“巨人の鼻”へ、その側にある洞窟の奥に目的地である“巨人の目”があると言われてます

ふうん・・・。

確かに・・・長く険しそうな道のりね・・・。

だからと言つて見捨てて帰るという選択肢は私の頭の中には無い。私もお人好しだなあ・・・とは思うけど。

「そういえば・・・最初に追い掛けていた化け物つて・・・あれ何なの？」

ふと思つた疑問を聞く。

「あれがゴブリンです。あれもクロウの力で欲望にまみれていて、私食べられそうになりましたよ・・・」

それは・・・間一髪だったわね。

「それは災難だったわね。糸で絡まれて飛ぶ事も出来なかつたし「そう・・・。」

今フェアリーさんは私の顔の位置まで高く飛んでいる。

この位置なら・・・あのゴブリンの手に届くとは思えない。

「はい・・・本当にありがとうございます。」

本当に・・・良かつたわ。

「この妖魔界つて平和ですから、襲われるなんてまずないですしへえー・・・。」「ルドルフ様のお力のおかげだったんですけど・・・、最近はクロウの力の方が膨大になつてしまつて・・・」それで救世主が必要だつたという訳ね。よーし。

それじゃあ、とりあえずはあの足に向かつて行けばいいのね。

第1章 11話

「それにしても……」

私はこの妖魔界に来ていろんな疑問があつたけど……。
どうしてもこれだけは聞きたかった。

「夜なのに星が一つも無いのね」

空を見ても真っ暗で何も無い。

それなのに辺りが分かるぐらいの明かりがある。
これだけはどうしても不思議で仕方無かつた。

「え？ ヨルつて何ですか？ それにホシつて……？」

「ええ！」

夜や星を知らない……！？

つて事は……。

「もしかして……ずっとこのまま……？」

私は空を指さしてそう言ひ。

「ええ。 そうですよ」

まるで当たり前のようだ言ひ。

はあ……。

フェアリーちゃんの口は嘘を言つてゐるよつには見えない。
つまり……。

これがここでの”当たり前”なのね。

「ちょっとね……私の世界と違うって事を改めて認識したわ」
そう……。

私達が当たり前だと思っていた事が、ここでは違うのだ。

「そういえば人間界から連れて来られたんでしたね。 それだと色々
違うでしょ？」

「まあね……」

太陽も月も星も無いって事になる。

それなのに明かりがあるかのように周りが分かる。

どういう原理なのかまったく分からぬ。

でも・・・これがここでは当たり前なのね。

「そういうえば・・・あなたの事・・・フェアリーさんって言つてた
気がするけど・・・フェアリーさんじゃおかしいわね
「え? そうですか?」

「そうよ。

だつて・・・それじゃあ犬を犬さんって言つてゐるようなもんじゃな
い。

なんか・・・名前をつけてあげたいな・・・。
うーん・・・。

「そうだわ!

「フェアリーなんだから・・・フニアさんってどうかしら?」

「フェア?」

「そう。それがあなたの名前。これからはそう呼ぶわね
「はあ・・・」

「長い旅になるんだもの。仲良く行きましょウ」

「それでは・・・あなたヨーロ様で」

「様付けねえ・・・」

「だつて・・・ルドルフ様のお客様なんですよ。失礼の無いようこ
しないと」

「別に私は呼び捨てでもいいのに」

「そんな!! とんでもない!」

「まったく・・・」

そこまであのルドルフって奴は偉いのね。

もつとも・・・クロウが現れるまではこの妖魔界を平和に保つてき
たんだから、敬うつてのはなんとなく分かるけど。

ま・・・自分で好きに呼んでと言つた以上撤回は出来ないし・・・。
彼女がそれでいいのならいいわ。

第2章 足

私はまずは”巨人の足”と呼ばれる山へと向かっていた。

どうやらクロウのせいでこの巨人の名前が付いている地域は、欲望にまみれて妖魔界の住人を襲いかかっているみたい。

だから・・・すでにその危険地帯に足を踏み入れてはいる事になる。そうだわ・・・。

これも聞いておかないとけない重要な事。

「ねえ、フエア。あのゴブリンってのはどれくらいの強さなの?」

「え? ゴブリンですか? あれはここに住んでる中でも弱い部類なんです」

あれで弱い・・・。

つまり・・・。

これからはもっと強い奴らが待ってるって事ね。

なんか・・・すでに先が不安だわ。

本当に私がそんな凄い武器を持ってるのかしら・・・。
まあオババがそう言うのなら、持つてるんでしょうね。
まだ私はそんな能力を發揮した事無いんだけど。

・・・?

何か・・・走ってる音が聞こえて来た。

その音はだんだん近づいて来る。

なに・・・?

あつ・・・!?

その姿が見えた!

それは・・・。

角が生えている馬だつた。

どうも・・・何かに追い掛けられているみたい。

その馬の後ろを見ると・・・。

大きな鳥の姿が見えた。

どうやら……あれに追い掛けられてるみたいね。

どうしよう……。

「大変！ ユニコーンがワイバーンに襲われる……！」

え……？

「ユニコーン……？」

「とにかく！ 助けなきや……！」

フェアが叫んでいる。

そうね……。

どうすれば……。

「こっちよ……！」

私は叫ぶ。

その声が聞こえたのか、ユニコーンはこっちに向かつて来る。
さあて……どうやってあの巨大な鳥と戦おつか……。

「とにかくこっちへ……」

私は木々が生えていいる所へと走る。

その木の下の所で止まる。

これなら上から襲われる事は無い。

つまり・・・下を飛ぶしか無い。

とにかく・・・飛んでる相手に上空を取られたまま戦うのは不利な事この上ない。

こうして・・・同じ土俵で戦えばまだこっちに勝ち田があるわ。

あとの問題は・・・私には武器がない。

剣があるなんて言つてたけど・・・どうやって使うのかまだ分かってない。

それが最大の問題。

こうなつたら、やぶれかぶれだわ。

ワイバーンが木の下を飛んでこっちに向かってくる・

「ヨーロ様！」

「離れてて！ 危険よ！」

私はフェアを離れさせる。

さすがに・・・今から試みる事はかなり危険。

彼女を巻き込む訳にはいかない。

タイミングが全て。

来る・・・！

3・・・2・・・1・・・。

「はあ！」

飛びかかってくちばしに抱きつく形になる。

こうすれば・・・足にもくちばじにもやられる事は無い。

これで相手の攻撃を防ぐ！

だけど・・・さすがに暴れる。

くつ・・・。

私は振り解かれないように必死にしがみつく。
ちらりと下を見ると高く飛んでいた。

どうするつもり・・・?

すると・・・急降下を始めた。

このまま・・・落下的衝撃も加えるつもりね。
負けるもんか!!

上下左右あらゆる方向へとワイバーンは暴れでいる。
・・・待つて。

ワイバーンは地面に向かつて急降下してるので?
よーし・・・それを逆利用してやるわ!

私はそのまましがみつきながら作戦を実行しようとする。
おそらく・・・地面すれすれでまた高く飛びつもりなんだわ。
よーし・・・。

地面がだんだん近づいて来る!!
このまま・・・。

今だわ!

そのままワイバーンの鼻の穴も塞ぐ。
地面まで距離が縮んで来る!
まだワイバーンは暴れてるけど・・・」つちも必死なのよー.
やたらめつたら暴れている。
くつ・・・。

地面に衝突する!!

私は思いつきりしがみつく!

「くつ・・・!!」

どうやら・・・そのまま地面にぶつかったみたい・・・。

「ヨー ヨ様!! 大丈夫ですか?」

フェアがやつて来る。

「ええ・・・なんとか・・・ね」

さすがに・・・衝撃で体のあちこちが痛い。

「すまない・・・俺を助ける為とはいえ」

ゴーラーンが近づいてそう言つ。

「いいのよ。無事でなにより」

ゴーラーンはじっと私を見ている。

そして・・・。

角を私に触れさせる。

え・・・？

その次の瞬間だつた。

痛みが・・・引いている。

「え・・・？なんとも・・・ない？」

「良かつた」

どういう事・・・？

「ヨーラ様、ゴーラーンの角には治癒能力があるんですよ」

「え？それじゃあ・・・あなたが？」

「助けてもらつたんだ。これぐらいは当たり前だ」

第2章 3話

それにしても・・・まだ旅は始まつたばかりなのに、いきなりとんでもない目に合つたわね・・・。

「すいません。ルドルフ様の言葉を、もつときちんと聞いていれば良かつたんですが・・・」

「・・・？どういう事？」

「はい。ルドルフ様が・・・この辺りは危険だからお城へと逃げるようになると」

そうね・・・。

この巨人の範囲は危険だつて話しだものね。

「ですが・・・最初は無視していたんです。そんなはずは無いと・・・ですが、すぐにこの辺りは危険な場所と化してしまつた・・・。想像も出来ない事態が起きていたようで」

なるほど・・・。

私の世界ではまだ魔物がいたり魔法の力があつたりと、平和にはほど遠いけど。

突然平和が壊されるなんて・・・想像も出来ない事だものね。

だいたい・・・私だつて突然妖魔界に呼ばれるなんて、想像も出来るはずもないもの。

そういう意味では私はユニコーンの言つ話は分かる。

「でもこれで危険だつて分かつたでしょ？早く城に行つた方がいいわよ」

「え？あなた達はいつたい何処へ？」

「私はこれから”巨人の目”へと行く所よ

「それは危険です！！」

「それを承知で行くつて言つてるの」

そう・・・行かなければならない。

「ヨーロ様はオババの占いで、この妖魔界を救う存在なんです。で

すから・・・あそこへ行かなければならぬのです

「オババの・・・」

そういう事。

前途多難な感じだけど・・・。
進まなきやいけないもの。

「そういう事なら・・・俺も付いて行つていいですか?」

「え?何言つてるの!?あなたさつき自分で危険だつて言つたばかりじやない!?」

「それはそうですが・・・。あなたのような純粋な存在が危険な所に行ぐだなんて・・・。俺には耐えられない」

「ちょ・・・ちょつと・・・」

純粋・・・!?

私が・・・?

あの親や姉の血を引いてる私が?

ちょっと純粋つて言葉からは遠い気がする。

「ヨーロ様、ヨーローンは純血な乙女を見たらその側を離れないつて聞きます。おそらくそのせいでしょう

う~ん・・・。

「つまり・・・ヨーローンの特性つてやつ?」

「そうですね」

なるほどね・・・。

「かなり危険よ?もしかしたら・・・途中で死んじゃうかもしけないのよ?」

「それでもあなたを守れるのなら・・・俺は本望だ」

「ふう・・・。

「分かったわ。そこまで言つのならもう止めないからね

まだ山にはつかない。

結構近くには来てはいるんだけど……。

「ヨーロ様、疲れましたか？」

ユニークが聞いて来る。

あつ、ユニークつてのはユニコーンに付けた名前なんだけどね。

「ちょっとね……。こんなに長距離歩くって事無いから」

普段、そんなに運動してる訳でもないし。

こんな事ならお姉ちゃんを見習つて何か翻つておけば良かつたかな。
もつともこんな日に合ひつなんて思いもしなかったから、仕方ないん
だけど。

私は自分の性格を分かっていたから、逆にあまり人と関わる事はし
なかつた。

絶対面倒事に巻き込まれるもの。

その心配通りだつた。

今・・・まさに面倒に巻き込まれている。

しかも途中で投げだそつとも思つてない所がやつかい。

これも性分ね・・・。

「疲れてるなら俺の背に乗つてくれればいいのに」

「何言つてるのよ。そしたらユニークが疲れちゃうじゃない

いぐり馬のよつなユニークとはいへ、その背中に誰かを乗せるといつ
事は無い。

それが急に乗せるとなると・・・それなりに疲れるでしょ」

「俺は構わない。ヨーロ様のためならば

もう・・・。

そつ言わると余計乗れないじゃない。

「ヨーロ様！－何か見えます！－」

フェアが後ろを見ながら叫んでいる。

その方向を見ると・・・何やら大群がこっちに向かって来ているような・・・。

「あれって・・・かなり危険じゃない?」

「・・・ヨーロ様の言う通りですね」

私達は安全そうな所へと走つて逃げる。

「ヨーロ様! どうも・・・私達を狙つてるみたいですよ
え・・・?」

ふと後ろを振り返ると・・・

確かに・・・大群がこっちに向かってる。

どういう事・・・?

「あっ・・・あれば・・・! フンババです!」

「フンババ・・・?」

「はい。田は劣つてるんですが、嗅覚で獲物をかぎ分けるんです」

嗅覚・・・。

つまり・・・私達の匂いを追つて來てるって訳ね。

見ると・・・確かに田で追つてる感じじゃない。

姿形は牛のようだけど・・・その角は鋭くとがっている。

その目や角の雰囲気で牛では無いと分かる。

まずいわね・・・。

風が吹いてる訳でも無いので、風下に逃げるという戦法も使えない。
どうすれば・・・。

第2章 5話

くつ・・・。

このままじゃ・・・追いつかれるのは時間の問題だわ。

1匹とかだつたらまだなんとか出来るかもしれないけど・・・。
あんなに大群・・・まず無理だわ。

何とか・・・逃げきらないと・・・。

「ヨーロ様ー背中に乗つてーーー。」

仕方無いわ・・・。

私はヨーロの背中に乗る。

「そのまま・・・きちんと捕まつて!」

そう言つと、もの凄いスピードで駆け出す!
す・・・・・凄い。

どんどん距離が離れて行く・・・。

なるほど・・・ヨーロは馬と似たような姿形だものね。

「でもどうします?」のままでは山から遠ざかってしまう

あつ・・・。

それはまずいわ。

・・・となると・・・。

あの大群になんとかしないといけないって事ね。
何か無いのかしら・・・。

あれに対抗出来るような物が・・・。

とりあえず匂いをなんとかしないと・・・。

・・・・!?

匂い・・・!

「そうだわーー!」

私はポケットを探る。

あつた。

まさか・・・身だしなみの為に持つていたのが役に立つなんて思い

もしなかつたわ。

「ヨニコとフェアは遠くに逃げていて。これからあいつらの鼻を役立たずにはせるから」

「どうするんです?」

「思いつきり強力な匂いを出すのよ。だからあなた達は離れて欲しいの。味方にも被害が出たらまずいでしょ?」

私はそう言つと、それを握りしめヨニコの背中から降りる。

「勝算はあるんですね?」

「間違いないわ」

だからこそ、ヨニコとフェアには離れて欲しい。

それに・・・私はある程度傷を負つても後でヨニコに治してもうれる。

だから・・・多少危険でもこれは私がやるしか無い。

フェアは・・・体が小さいし体力もそれなりしか無い。

万が一死んでしまつたら嫌だし。

よーし・・・。

私は気合を入れる。

・・・來た!

フンババは私に向かってまっすぐ来る!
行くわよ・・・。

ある程度まで引き寄せた・・・。

私はそれを辺りにまき散らす!

そう・・・。

女の子だつたら持つてるような物。

香水よ!

フンババは思い通り、香水の匂いにやられていく。

私もこれは凄い少量でしか使つた事ないけど・・・。

これほど大量に使つたのは始めてだわ。

でも私は鼻をつまめる。

だけどフンババは鼻をつまむ事も出来ない。

鼻を頼りにしてる奴らにとつては強力な武器だわ。

よーし・・・。

この隙に私は大群の向こうへと駆け抜ける。

後ろを向くと・・・鼻が混乱したのか同士討ちを始めている。

「ふう・・・」

ふう・・・。

ようやく山へとたどり着いた。

「えつと・・・。これを見るの?」

「ええ。登らないと次の目的地が見えませんから
そんな事じゃないかと思つていたけど・・・。
仕方ないわね・・・。

この山はまさしく足の「じ」とく高くそびえ立つてゐる。
しかも「丁寧」に5つある。

一番山の横幅が広いのが親指ね。
そして一番小さいのが小指といつ具合ね。
まさに足の「じ」とく。

足だと分かるのはそれほど高くないという所。
それにしても・・・。いつもやつてみると本当に足みたい。
本当にここに巨人が眠つてゐるみたいね。
さてと・・・。何事もなく登れるといいけど・・・。
しばらく登つてると・・・どうやら安全に登るつてのは諦めた方が
いいと思うような光景があつた。
そこには・・・2メートルぐらいの高さの人間型の生き物で足も手
もある。

人間と違つるのは肌が緑色だという事と顔が明らかに人間の顔では無
い。

なんというのか・・・モアイ像っぽい感じ。

そいつがそびえ立つてゐる。

待ちかまえている感じね。

「あれは・・・トロルですね」

「トロル・・・?」

「ええ。見ての通り巨大な体で動きは鈍いんですけど、その怪力が

自慢なんです「

なるほど……。

見たままって事ね。

じつとじつを見ていこる。

気づいてはいるけど……襲いかかってはこないみたいね。

もつとも……すんなり通してくれるとは思えないけど……。

それで……どうすればいいのかしら……。

「うなつたら戦法は一つしか無いわ。

動きが鈍い事を仕様して、素早さでかき回す！

そう思い私は駆け出す！

「あっ、ヨーロ様！！」

私はフェアやユニークを置いて一人で走る。

やはり・・・こうこいつのは私の役目だわ。

トロルに近づく！

「ぐあー！！」

手に持っている巨大な棍棒を振り上げる。

絶対にあれに当たっちゃ駄目だわ。

まず一撃でやられる。

だから・・・走って動き回らないと。

ドオン！

うわっ！！

すぐ側で棍棒が振り下ろされた。

やつぱり・・・凄い威力。

あれは・・・正直食らいたくないわ。

「ヨーロ様！！」

フェア達がやつて来る。

来るまえになんとか片付けないと・・・。

戦うのは私一人だけでいい。

フェアやヨーロに危ない目に会わせる訳にはいかない。

「ぐつ・・・」

トロルが私に目標を定めようとしている。

だけど・・・そんな動きじや私を捕らえる事は出来ないわよ。

「ぐぐ・・・」

トロルが私を睨み付ける。

・・・ん？

どりするつもり？

「ぐわっ！」

なっ！

突然棍棒を持つて無い方の手で私を掴んだ。
まずい！！

意外と動きが速かった。

いえ。

武器の無い左手の方を使ってくるなんて、当たり前の事をすっかり
忘れていたわ。

「くっ・・・離して！！」

暴れるけど・・・さすがに力が自慢なだけはある。
まったく動かない。

やばい・・・。

「ぐあっ！！」

そのまま地面へと叩きつけられる…。

「あやっ！！」

くっ・・・まずい・・・。

棍棒が振り上げられる。

止めを刺すつもりね・・・。

なんとか・・・。

私は力を振り絞つて体を動かす。
ドスン！

凄まじい音がすぐ側で聞こえた。

なんとか・・・避けたけど次はもうこうはいかない。
体が思うように動かない・・・。

「ヨーロ様！――」

フェアとユニコがもうすぐ側にまで来ている。
どうすれば・・・。

・・・・!

そうだ。

時間稼ぎかもしれないけど・・・。

私は地面にあつた砂を掘む。

「はっ――」

目に向かつてそれを投げる。

「ぐわっ――」

やつた！

目に入ったわ。

これで・・・。

「たあ――」

足を蹴る！

急に目が見えなくなつた所で、足が不安定になつた所でトロルは倒れ込む。

今のうちに・・・。

「ヨーロ様！――」

すでに私の側には、フェアとユニコが来ていた。

「ありがたいわ。乗せて！」

私はヨークの背中にに乗るとそのまま山の頂上の方へと登った。

ふと後ろを振り返る。

トロルが追い掛けで来ている。

しつこいわね・・・。

ん?

あれは・・・かなり大きな岩・・・。

そうだわ。

「止まって!」

「どうするんです? ヨーク様

「これを使うのよ」

そう言つと、大きな岩に手をかける。
くつ・・・やつぱり動かない・・・。

「手伝います

ヨークも押す。

すると・・・岩がゆっくりと動いた。

そのまま・・・下へと転がり落ちる。

当然、トロルの所へとまっすぐ向かっている。
そのまま・・・岩の下敷きになってしまった。
「これでトロルの心配はしなくていいわね」

なんとか・・・頂上が見えて来た。

とりあえず・・・あそこに行けば次の目的地が分かる・・・。

・・・あれ？

誰かいるみたい。

誰だろう・・・？

そこには・・・人間そつくりの人がいた。

・・・人間そつくりの人ってのも変な言い方だけど。

でも、これまで出会った妖魔と違い、ルドルフみたいに人間の顔までも見える。

「あの・・・すいません」

私は声をかける。

その人物はこっちに気がつく。

「なんだ？おまえは・・・？」

「私は葉子。ルドルフに呼ばれてこの妖魔界を救いに来たんだけど・・・」

「ほう・・・おまえが？」

「ええ。あなたは？」

「俺か・・・？クロウ様に仕える四天王の一人、ラカスタだ」

クロウ・・・！」

私は一步下がる。

クロウに仕えてるって事は・・・私の敵って事になる。

「悪い事は言わない。ここで引き返せ。そうすれば少なくともお前は死ぬ事はない」

くつ・・・。

確かに・・・今まで出会った相手とは違い、かなりの知識もある。まともにやりあえれば死ぬ可能性がかなり高い。

そのうえ・・・私はまだ武器を使う事が出来ない。

どうやつたらその能力を使う事が出来るのか・・・今でも分からない。

こんな状態で・・・四天王といつかなりの実力者と戦うなんて無謀もいい所。

「どうするんです?ヨー「様」

私としては引き返したい所だけど・・・。
でも・・・引き返してどうなるっていつの?

この妖魔界を見捨てる事なんて出来ない。

という事は・・・どのみちこのラカスターといつ奴も倒さないといけない事には変わらない。
どうする・・・?
・・・。

「分かったわ。引き返す」
私はそう言つと山を下る。

「いいんですか?ヨー「様」・・・」

「何も一度と来ないとは言つてないわ。今は一旦引き返す。あいつに勝てる手段が無い今、行つても無駄死によ
そう・・・。

今は一旦下りるだけ。

また再び・・・何か対抗策を考えてからまた来るだけの事よ。

『ラカスタか
「はつ・・・クロウ様』

遠くからクロウ様の声が聞こえる。
滅多に連絡はして来ないのだが・・・。

『この妖魔界を救おうとか言つてる無粹者が表れた』
「はい・・・。先ほど私の所にきました』

『何！？』

「ですが小娘です。はたしてあんな小娘がその無粹者かどつかは分
かりませんが・・・」

『だが油断はするな。その娘が本当に救う存在ならば・・・あの武
器を持つては必ずだ』

「妖魔キラーですか・・・？だがあの娘は素直に下山していきまし
た。本当に持つてゐなら戦おうとするはずですが？」
そう・・・。

あんな凄い武器を持つてゐたら使ひはづだ。
あれを使われては俺でも危ない。

伝説の武器。

妖魔キラー。

その昔、この妖魔界を滅ぼさうとした危険な武器。
その時は一人の英雄によつて守られたと聞くが。

『念には念を入れた方がいいな・・・』

「分かりました。奴らに始末させるよ」
もし違うならそれでもいい。

万が一あの小娘が妖魔キラーを持つよつた事になるのなら・・・。

先に潰しておいた方がいいだろう。

俺はハタカーンの連中に連絡を取る。

その代表が俺の前に現れる。

「なんでしょう・・・？」

「この山を下山した小娘と妖精とゴーリーンの連中がいる。そいつらを捕まえてお前らの好きにするがいい」

「・・・分かりました」

ここからは俺の命令ならば何でも聞く。

そう・・・。

ここには人質がいるからな。
逆らえるはずもない。

これでの娘は終わりだ。

それにも・・・。

この妖魔界を救おうなどと考えてゐるのがいるとはな・・・。

馬鹿な奴だ。

クロウ様を倒せる訳が無い。

なにせクロウ様は、邪魔な理性をとこうのを解放してくれる素晴らしいお方。

この世はそのうち混沌の世界と化す。

強い者が弱い者を支配する世界へと。

なんて素晴らしい事だろう。

それにはあの娘は邪魔だ。

第3章 剣

さあて・・・。
どうじよひ・・・。

私の剣を使うのは当分考えない方がいいわ。
なにせ・・・どう使っていいのか分からぬもの。

「どうするんです・・・? ヨー「様・・・」

「やうね・・・。一旦お城に戻った方がいいんじゃない?」

そう・・・。

このまま先には進めない。

一旦戻つて・・・何か武器を手に入れない。

最初は妖魔キラー無しでもなんとかなると楽観視してたけど。
四天王なんてのが出て来た今、そもそも言ひてられない。

今なら引き返すのも簡単だし。

「とにかく、武器を手に入れてからまた来ればいいわ。このままあ
いつと戦うつてのはいくらなんでも無謀だし・・・」

「そうですか・・・。あの・・・剣は出せないんですね?」

「・・・ええ。何せ私は能力の使い方なんて知らないもの。こうし
てあなた達と話せるのもどうやってるのか分からぬぐらいだし」
さて・・・どうしましょつか・・・。

「とにかく、一旦お城に帰りましょひ」

私は山を降りる。

待つてなさい、すぐに戻つて来るんだから。

ガサ・・・。

何やら物音が聞こえた。

ガサガサ・・・。

何かが近づいて来る・・・?

しかも・・・複数。

私は辺りを見渡す。

「ヨーコ様！！」

「フェア！ユニークー気をつけて！！」

何・・・！？

・・・！！

突然！！

上から網が降つて来た！？

「しまつた！！」

気づいた時には遅かつた。

「くつ・・・」

捕らえられてしまつた・・・。

第3章 2話

・・・あれ？

ふと気づいたら・・・私は檻の中に閉じこめられていた。
どうも気を失っていたみたい。

ユニコとフェアは何処・・・?

辺りを見渡す。

ユニコはすぐに見つかった。

すぐ隣の別の檻の中に閉じこめられていた。
でも・・・フェアは？

「ユニコ！」

私は叫ぶ。

「・・・ヨー「様」

「大丈夫？」

「はい。俺は大丈夫です。ヨー「様」は？」

「私も大丈夫だけど・・・フェアは？」

「さあ・・・。俺も見あたらなくて・・・」

やつぱり・・・。

フェアだけ姿が見えない。

一体何処へ行つたのかしら・・・。

無事だといいんだけど・・・。

「こいつが例の少女か・・・」

！？

・・・何かがこっちに来る。

それは頭が犬のような頭で首から下は人間の姿をしていた。
また・・・凄いのを見ちゃったわね。

その生き物が私の檻の前に来る。

「・・・私をどうするつもり？」

「悪いな・・・。処刑せざるを得ない」

・・・・・

「なんで！？」

「それは・・・おまえがクロウに逆らう存在だから・・・だ
・・・？」

何か違和感を感じた。

そう・・・。

この人達は望んでやつてる訳じやない。

無理矢理・・・この選択をせざるを得ない・・・そんな感じ。
どういう事？

だつて・・・本当にクロウに従つてゐなれど、さつきの四天王のラカス
タミみたいに様付けするはず。

それに・・・表情が嫌々な感じがした。

たとえ人間の顔じやなくとも、それぐらいは分かる。

・・・何か理由があるわね。

やつの命令を聞かなければならぬ理由が。
その証拠に。

彼らは欲望にまみれて無い。

とても理性的だわ。

それを聞き出した方がいいかも。

第3章 3話

「分かつた・・・。私が処刑されるとあなた達が助かるのね？」
私はすばり言つた。

こういう事は直球で言つた方がいいと思つから。
予想通り。

彼らの表情が変わる。

「すまない・・・」

「別に責めてないわよ。それよりも・・・」いつたいどうこう風にな
なた達が助かるのか聞かせてくれない？どうせ死んじゃうんだから、
その理由ぐらい聞かせてよ」

「・・・君には関係無い」

「関係ない！？どういう事よ！－私はその理由のせいで死んじゃう
のよ！－どう関係無いって言うのよ！－！」

私は思わず声を荒げた。

「ヨーロ様・・・」

ヨーロも心配する。

「どうせ奴らに何か脅されてるんでしょ？はたして約束を守つたか
らと言つて、あっちが約束を守るかしら・・・」

みんなは押し黙る。

「いい？クロウの欲望にやられたらそんな事言えなくなるのよ！？自
分の思いのままに・・・」の平和な場所は無くなるのよ！？
そう・・・。

見える範囲だけでもここが平和だというのが分かる。

ここの中間に巨大な炎が燃えさかり、その周囲に家らしき建物が見
える。

そして・・・無防備に子供が遊んでいる。

ここが平和でなくてなんだと言つた。

「分かつてるの？邪魔者がいなくなつた奴らがどんな事をするのか・

‥。私はこれまで数体ぐらいしか妖魔界の住人に会つてないけど‥、欲望にまみれたのがどんな状態なのか‥‥それを体験してるわ

「だが‥‥それでもこいつするしかないのだ‥‥」

「だから‥‥‥! なんで! ?」

私はもう一度叫ぶ。

なんだか分からぬけど‥‥‥こいつ理不尽は許せないわ。

「奴らに‥‥‥村の若い連中をみんな人質にされてるからだ‥‥‥。若い連中がいなくては村は存続出来ない」

‥‥‥。

確かに‥‥‥子供はいるけど‥‥‥ちょうどいい年齢‥‥‥つまり私と同じぐらいのは見えない。

そんな理由があるなんて‥‥‥。

「それなら‥‥‥その人質を取り返せば‥‥‥」

「それは無理だ!! ラカスターの部下でもあるラカスター・ソルジャーがある‥‥‥。あいつには勝てない‥‥‥」

「それでも‥‥‥。この村の平和を取り戻すにはそれしかない。私をそこに連れて行ってくれない?」

「何! ?」

そう‥‥‥。

これしかない。

「私が人質を取り戻す! そうすれば私を処刑する必要ないでしょ?」

「?」

「‥‥‥死ぬぞ?」

「何もしなくても処刑されるんでしょ? だつたら‥‥‥何かやつてる方がマシだわ」

このまま檻の中で処刑を待つぐらいなら。

この村のために戦つて死ぬ方がマシ。

「少女よ‥‥‥処刑する為のを逃れる為にか?」

「私の為じゃないわよ。この村のためよ! !」

私は目をまっすぐに見据えて言つ。

そう。

自分が処刑されるのが嫌だからという選択じゃない。
このまま黙つてもこの村はクロウの力で平和は乱れる。
それを見過ごす訳にはいかない。

第3章 4話

とりあえず私だけ檻から出された。

「ユニークは万が一、私が逃げ出した時の人質という事だろ？」

「その代わり・・・もし私が死んだらユニークは解放してあげて。ユニークは私が巻き込んだようなもんだし。第一クロウは私が邪魔なだけであってユニークが邪魔な訳じやないわ」

そう・・・。

もしここで私が倒れるような事があつても、ユニークを巻き添えにする訳にはいかない。

「分かった・・・それは約束しよう」

よし。

私はその人質のいる所まで案内される。

「・・・ここから先にいる」

細い洞窟の所まで案内される。

この奥にいるのね。

松明で奥の方まで見える。

今の所、誰もいないように見えるけど・・・。

途中までしか見えないからなんとも言えないわ。

「分かった。もし私がやられたら勝手にここに来たって事にしておいて。もし私が見つかったらそう言つし」

ここの人達に迷惑はかけられない。

何せ、私が勝手にやつてる事だし。

頷いたのを見ると、私はそのまま洞窟の奥まで進む。

・・・しばらく進む。

「ユニーク様」

・・・!?

小さいフェアの声が聞こえた。

「フュア?どこにいるの?」

「ヨーロ様の服のポケットです」

覗くと、確かにそこにいた。

「良かった・・・。フェアも無事だつたのね」

「はい。それで・・・一部始終を聞かせてもらいました」

それにしてもこんな所に隠れていたなんて。

「それにしても・・・ラカスター・ソルジャーと戦うなんて、かなり無謀な事を・・・」

「仕方ないじゃない。このままじゃあ、あの村は壊滅しちゃうのよ？それを黙つてる訳にはいかないもの」

「ヨーロ様・・・自分を捕らえた連中の心配をするなんて・・・まあ・・・私もかなりのお人好しだと思つてゐるわよ。

でもこれが私の性分だもの。

「ところで・・・そのラカスター・ソルジャーってどんなの？」

「はい・・・。ラカスター・ソルジャーは普段は石像のような姿で動く事も無いのですが、一定の所まで近づくと動き出します」

なるほど・・・。

「問題は・・・生半可な武器では傷をつける事も出来ない事です。見た目は普通の石材のように見えるのですが、魔法で加工された物なんですよ」

「なんですかー！？」

それって・・・。

今まで私がやつてたような方法じゃ無理つて事じゃない？

「唯一の弱点は水をかける事です。水をかけるとその魔法の力が解けて粉になってしまふんです」

水ね・・・。

「つて・・・それじゃあ今から水を取りに行けば・・・」

「それは無理です。あそこ住むハタカーンの人達は水を使う事は無いんです。だから・・・あの村を探つても水は出て来ないと想います」

そ・・・そんな・・・。

水が無いなんて・・・。

「だからあそこにラカスター・ソルジャーを置いているんです。その唯一の弱点が無いんですから」

・・・そういう事ね。

さて・・・一体どうすればいいのかしら・・・。

一番奥に鉄格子が見える。

その中にはたくさんのハタカーンの若者が見える。

その鉄格子のすぐ側には2体の石像が見える。

あれがラカスタ・ソルジャーね。

さて・・・。

唯一の弱点である水が取れないと分かった今、どうやってあれと戦うべきか・・・。

何せ、あの位置だと鉄格子を外そうとするとき自然と石像に近寄ってしまう。

つまり・・・どう頑張っても戦うしか選択肢がない。
その辺の武器を使っても効かないし・・・。

でも・・・このまま諦める訳にもいかないし・・・。
待つて・・・。

何も無駄に戦う必要無いんじゃない?

そうだわ!

「ねえ、フェア。提案があるんだけど

「・・・はい?」

「あのラカスタ・ソルジャーは私が引き寄せらるから。その間にフェアはあの扉を開けてくれない?」

「・・・!! それは危険です!!」

「危険は承知」

何せ倒せないなら、無理に倒す必要はない。
あの人質を解放すればいいだけの話。

これしか無い。

「お願い。フェアにしか出来ない事だから」

私はそう言つと石像に近づく。

すると・・・ゆっくりとだけど動き出した。

「さあ！来なさい！！」

田がこつちを見ている。

よーし・・・。

「いひちよー」

少しずつ鉄格子から離れる。

こうしないとフェアや中に入っている人達にも反応してしまって、それでは何の為に私が引き寄せているのか分からぬ。

2体とも引き寄せないと・・・。

ラカスター・ソルジャーは腰に差してあつた剣を抜く。
冷や汗が出る。

何せこつちは何の武器も持つてない。

お姉ちゃんみたいに素手で戦える訳でも無い。

かなりの不利。

だけど・・・これしかない。

2体ともこつちに来た！

お願い・・・フェア。

後は任せたわよ！

ガキイン！

ラカスター・ソルジャーの剣が私のすぐ側をかすめる。

ハツキリ言って命がけもいい所。

だけど、それは今に始まつた事じゃない。

だから・・・彼らを救う為にこういう事になつてもいいと思っている。これが1体だけならまだしも、2体ともというのだからかなり大変。ちらりと向こうを見る。

フェアがハタカーンの若者を逃がしている。

よしよし・・・。

このままいけば彼らを救う事も出来るわ。

「ヨーロ様！全員逃がしました！」

フェアの声が聞こえる。

よし！

これでなんとか助かつたわね。

これであとは・・・。

あつ・・・！

しまつた！

足を滑らせて転んでしまつた。

まずい！！

「ヨーロ様！－」

フェアが来る。

「来ないで！！」

ここで私が死んでも・・・フェアだけは巻き添えにする訳にはいかない。

私はフェアを来ないよと叫んだ。

いいのよ・・・これで・・・。

ヨーロも助かるし・・・。

「危ない！！」

え・・・！？

誰かが助けてくれた。

私はその人物を見る。

それはハタカーンの若者の一人だつた。

「何やつてるの！？助けてくれたのはお礼を言つけど・・・危険だから下がつて！！」

そう・・・。

まさに今のは危機一髪だつた。

いくらなんでも助けようとした人に助けられるなんて・・・。

「いいから聞いて。俺は病で・・・もう死ぬ運命なんだ・・・だ

から・・・」

「病ですって？それなら私の仲間にユニコーンがいるから、彼の力を使えば」

私がそう言つと、彼は首を横に振る。

「ユニコーンは・・・純粋な少女にしかその力は使えないんだ・・・

「そんな・・・。

「だから・・・どうせ死ぬならあなたの為に死にたい」

「そんな・・・。

「なんとか出来ないの・・・。

「あなたは俺達を助ける為に命がけで救つてくれました。みんなを助けてくれたお礼です」

違う！

違う違う！！

「それでもーー死ぬなんてーー！」

ズウン！！

はつ・・・！！

ラカスター・ソルジャーがこっちにやってくる。
口論してゐる場合じゃなかつたわ。

でも・・・私はどうすれば・・・。

来る・・・・・！

「とにかく・・・下がつて・・・！」

若者を抱えて飛び下がる。

なんとか・・・攻撃を避けたけど・・・。

「馬鹿な真似は止めて・・・。いくら病で死ぬ運命だとしても・・・。
最後まで家族の元で楽しく生きた方がいいわ」

そう・・・こんな所で死ぬなんて良くない。

「俺は決めたんです！あなたのようないくら病で死ぬ運命だとしても・・・。
の女性が命賭けてるのに・・・俺だつて何かしたいんですね！・！」

私を振り解いた。

そして・・・ラカスタ・ソルジャーの方へ向かって行く。

「駄目ーー！！」

・・・

それはまるでスローモーションのように見えた。

ラカスタ・ソルジャーの剣がハタカーンの若者の所に振り下ろされた・・・！

だけど・・・若者はそれに怯える事なくそのまま突進していた。

そして・・・その体は真つ二つになっていた。

くつ・・・。

「ぐあああああーー！」

・・・！？

ラカスタ・ソルジャーの1体が苦しみながら崩れ落ちる。

これは・・・？

ハタカーンの若者の体から水が吹き出していた。

まさか・・・。

彼らの体に流れているのは・・・血じゃなくて水！？

・・・くつーー！

私は走る！－

そして・・・若者の体を受け止める。

その体からは水がどんどん流れている。

私はその水を手に取る。

ごめんなさい・・・。

救つてあげれなくて・・・。

「はっ！－」

私はその水をもう一體のラカスター・ソルジャーにぶちまける！－

すると・・・。

そのもう一體のラカスター・ソルジャーも粉となつて崩れ落ちた。

・・・。

「ごめんなさい・・・。ごめんなさい・・・」

「まさか・・・ハタカーンの体に水が流れていったなんて・・・」
フェアの声が聞こえる。

そう・・・。

その意外な真実のおかげで2体のラカスター・ソルジャーは崩れる事になつたけど・・・。

「ごめんなさい・・・」

私は・・・なんて無力なんだろう。

私が・・・妖魔キラーを使えるのなら！！

こんな悲惨な事にはならずに済んだのに・・・。

全て・・・私のせいだわ。

私が来たから・・・彼らは捕らわれる事になつた。

そして・・・その見張りにラカスター・ソルジャーを置く事になつた。私が来なければ・・・少なくとも彼は家族の中で死ぬという充実した生き方が出来たはずだったのに・・・。

ハタカーンの人達が集まつて来る。

「ごめんなさい・・・私のせいで・・・彼を死なしてしまつた・・・」

「そう自分で責めないでください・・・ヨーロッ様」
ユニークが来る。

「でも・・・！」

「そうだ。彼は病でもうすぐ死ぬ運命だつた・・・。彼はみんなの為に・・・そしてあなたの為に死んだのだ。とても勇敢な事だ」
そうじやない・・・。

そうじやないの・・・。

「私が！私が・・・妖魔キラーを使えれば・・・」

それなのに・・・。

まだ使う事が出来ない。

どうすればいいのか、まったく分からぬ。
そのせいで……。

「いいんです……。あなたの涙で……あなたの気持ちは十分分かります」

「くつ・・・。

「それに……一番の原因はクロウだ。あなたではない」

「・・・。

「そうですよ！ヨーロ様。ヨーロ様のせいではありません。元々クロウが妖魔界を混沌にさせようとしなければ、ヨーロ様が妖魔界に来る事も無かつた。彼ももっと違う死に方もあつた。悪いのはクロウです！！」

みんな・・・。

「・・・それでも・・・何か武器はいるわ・・・。」のまま何もな
いまま戦うには・・・非力過ぎる

「武器ですか・・・。何も無いんですけど・・・。」これから山に向かう途中に小屋が見えますが、そこにある武器には絶対触らないでください

「

「触らないで・・・？」

「一体どういう事・・・？」

「触つたら最後、骨になつてしまつといづれ、とんでもないのがあるのです」

「それはそれは・・・。

「分かったわ。教えてくれてありがとう」

「あれね」

ハタカーンから教えてもらつた所に小屋があった。
あそこにある武器には触らないで・・・か。
なんでも触ると骨つてしまふと聞いたけど。

私はあえてその間にかかりに来た。

そう。

逆にその武器を利用出来ないか考えていたけど・・・。

とりあえず・・・誰かいるのかしら?

「フュア、ユーロ、ユニーで待つだけだい」

万が一という事もある。

一人を置いて私は中に入る。

そこにはたくさんの武器が揃つてている。

剣に槍に斧に・・・いくつもの種類の武器が所狭しと並んでいる。

凄い・・・。

「ふおつふおつふおつ・・・。ユニー何の用じや?」

あら。

誰かいたみたい。

そこにいたのは昔話に出でた老いの婆だつた。魔女のような姿をしている老婆だつた。

まるで人間みたいだけど・・・鼻が異様に高いし耳もとんがつている。

爪もかなり伸びているし・・・ちょっと同じ人間には見えない。

「いえ・・・ここに武器があるって話を聞いてちょっと見に来たの」

うん、嘘は言つてないわ。

真実も言つてないけど。

「ふおつふおつ・・・。こんなあるからねつくり見るといこい」

ふうん・・・。

畠にかかつたと思つてゐるのかしら？

とりあえず・・・。

改めてじつくりと見る。

今の所普通の武器のように見える。

ハタカーンの忠告が無ければ無造作に触る所だわ。

「どうじや？手に取つてみては？」

上手い誘導ね。

「でも・・・私何も持つてないんです。だから本当に見に来ただけで・・・」

「そんのはいいのじや。勝手に持つていいくといい
触ると骨になるから持ち出せないから言える四詞ね。

「勝手に・・・?なんで・・・?」

私はゆさぶつてみる。

いくらなんでも勝手に持つて行くなんて・・・ありえないし。

「なあに。こんなへんぴな所に来るのは珍しいから。」そのまま埋もれるぐらになら、誰かに使って貰う方がいいじやろ？

上手い言い訳ね・・・。

でも・・・これに触る訳にはいかない。

たぶん・・・この老婆は武器から吸い取ったエネルギーを糧に生きてるんだわ。

「ああまあ、遠慮せずに持つてみるとこい」

魔女もなんとか触らせようとしている。

だけど・・・私は逆になんとか魔女に触らせてみたと考へている。

そう・・・。

この魔女が触つたらどうなるか・・・。

たぶん、この武器は無差別にエネルギーを吸い取つてしまつと想ひ。

だからこそ、さつきから魔女も触らないようにしている。

この武器を作り魔力を貯えているんだと思つ。

「うーん・・・。でも何がいいのか分からぬし・・・」

わざと優柔不斷のふりをする。

「何でもいいじゃね。持つてみれば分かるかもしだれぬし・・・」

「そう言つのなら、何かお勧めはあるんですか?」

魔女に振つてみる。

うん、不自然じやないわ。

「お勧めか・・・、この剣なんかどうじや?」

指を指す。

あくまで触らないつもり。

「そりなんですか? それじゃあ取つてもいいません?」

私はあくまでも動かない。

「もう言わずにーー」

なつ・・・!-

魔女が私の手を取つて、強引に武器に近づける。

くつ・・・いつまでも触らうとしないから、強引な手に出たわね。
まずい・・・このまま触つたら・・・。

でも・・・魔女の力は意外と強い。
まるで振りほどけない。

「ちょ・・・ちょっと・・・!-」

「自分で持つてみるのが一番じゃ……。」

「の・・・・!」

なんとか振りほどくとするけど・・・。

まずい!!

「きやーーー!」

ついに・・・触つてしまつた!!

「ふおつふおつふおつーーー!」

魔女は勝ち誇る。

・・・?

「あれ?」

いつまでもたつても何とも無い。

魔女が勝ち誇つてる所から、どの武器に触つてもエネルギーを吸い取られるはずなんだけど・・・。

どういう事?

「なつ・・・馬鹿なー!?」

うろたえる。

今だわ!

「えいーーー!」

私は触つてしまつた武器を手に取り、魔女に向かつて投げる。

「きやーーー!」

魔女が叫んだと思つたら・・・どんどん骨になつていいく・・・。

これは一体・・・。

あつ!

もしかして・・・これ・・・。

妖魔界の住人にしか影響しないって事?

私は違う世界から来てるから、何ともないとか・・・。
とにかく・・・。

もう一度触つてみる。

うん、何ともない。
よーし。

私は剣を選んで腰に差す。

これは妖魔キラーとは違うと思うけど・・・。

これで強力な武器が手に入ったわ。

私はもう一度山へと戻つて来た。

ラカスタを倒す為に。

始めて来た時は四天王という事で躊躇してたけど、今は強力な武器を持つている。

私は許さない・・・。

こいつが・・・ハタカーンの若者を人質に取らなければ・・・。少なくとも・・・あの人は幸せに死ねたかもしないのに。

私を助ける為に・・・何よりもみんなを救うために死んでいった・・・。

「何!? 来たというのか!? あいつらめ・・・人質がどうなつてもいいというのか!?」

「・・・残念だけどね。その人質は私が解放したわよ」

「そのために・・・! ! !

「そのせいで・・・そのせいで!! 死んだ若者がいるのよー!!」「ふん。おまえを助けたんだ。どのみち全滅だ」

「こいつ!!

こういう奴こそ・・・絶対に許してはいけない!!

ここに来てからいくつか戦いをしてきたけど・・・。

憎しみを抱いたまま戦うのは始めてだわ。

「こいつは・・・私が倒す!!

「その前に・・・あんたが敗れるのよー!!」

私は剣を抜く。

「なつ・・・!! それは・・・!!」

「あんたも知ってるみたいね。何故か私には影響しないみたいだけどね」

剣を構える。

「こいつは・・・絶対倒す!!

「はっ！」

ラカスタは一瞬下がる。

そう・・・。

触つたら最後という事はラカスタも分かつて。立場は完全に逆転している。

もつとも・・・私は剣を使った事なんて無い。

剣に振り回されてる感じもする。

「ヨー・コ様・・・」

「フェアは下がつてて、触つたらあなたも骨になっちゃうんだから！」

そう。

この武器の唯一の弱点は味方であるフェアやヨーロにも影響してしまふ事。

だから、一人には離れていて欲しい。

「・・・たあ！！」

一気に走る！－

「くつ・・・」

ラカスタはなんとか離れようとする。

だけど・・・！！

こいつは絶対倒す－！

「はあああああ！－」

触れた！－

「ぐわああああああ！－」

・・・ついに。

ついにラカスタを倒した。

「ふう・・・」

「ヨー・コ様！－！剣が！－！」

フェアが叫ぶ。

見ると・・・剣はボロボロになつて崩れて行く。

「さすがに四天王のエネルギーには耐えきれなかつたみたいね」

今回は使ってみたけど、正直こんな危険な武器はあまり持ちたくないかった。

だから・・・これで良かったのかも。

「ヨーロ様・・・。取りに戻った方がいいのでは?」

「いちゃいち戻ってる暇ないわよ。それよりも・・・次の目的地はあそこね。

山の頂上から見えたのは以前フェアが言っていたくぼみが見えた。

「行くわよ」

山からくぼみに向かうまでに森を抜けなければならぬ。

私はその森へと足を踏み入れた。

これが・・・想像していたのとは違つた様子を見せていた。
獸道ぐらいはあるかなあ・・・とは思つていたけど。

まるで歩ける道が無い。

これは・・・。

私はまだしも、ユニークが大変そう・・・。

「大丈夫？ ユニーク？」

「・・・なんとか歩いてみせますが」

それしか無い訳だけど・・・。

「それにしても・・・本当に良かつたんですか？ ヨーロッ様」
まだフェアはその事を言つてる。

「いいのよ。いちいち戻つてたらきりがないじゃない」

そう。

例え今戻つて武器を手に入れたとしても、長くても次の四天王まで

しかもたない。

その毎に戻つていたらクロウに対抗策を打たれてしまう。

それでは意味が無い。

それに・・・。

だいたい私には妖魔キラーといつ強力な武器が使えるはず。

その力を使えるようにした方がよほどいい。

だからあれには頼らない。

もうあの事は忘れて・・・。

さつさと森を抜けなきや。

それにも・・・。

この森もどんでもないわね・・・。

あまり奥が見えない。

これまでようすに襲いかかってきても、逃げるのも困難だわ。
相手が見えないから側に来るまで分からないし・・・。

「ねえ、フェア。この森にはどんな人達がいるの？」

「そうですね・・・。でもここには生き物よりも植物を注意した方
がいいですね」

「・・・植物？」

「どういう事？」

「はい。おそらくクロウによつて欲望にやられていると思ひますの
で・・・」

「・・・？」

「つまり・・・植物も襲つてくるわけ？」

「はい。この妖魔界では植物にも意志があるんです」

「へえー・・・。

つて感心してゐる場合じやなかつた。

つまり・・・。

この植物だらけの森では周囲が敵だらけといつ事になる。
でも行かないといけないし・・・。

「分かつた・・・覚悟して進みましょう」

第4章 3話

出来るだけ慎重に前に進む。

この中で一番危険なのは私じゃなくてゴーノ。

そう・・・一番身動きが出来ないのがゴーノだから。

私はいざとなれば木の上に登る事も出来るけど、ゴーノせやつはこかない。

後ろには下がれるけど、そんなにスピードを上げて下がる事も出来ない。

左右に避けようにも、この木々の数のせいでぶつかってしまう。
だから・・・ゴーノを守るためにもなるべく慎重に進まないと・・・。

「アーノ様・・・そんなに慎重にならなくても・・・」

その他の本人であるゴーノが言つ。

「何言つてゐのよ。ソレではないつ襲われても文句言えないのよ?」

そう・・・。

私は別にいい。

だけど仲間であるフロアやゴーノは何とか守らないと・・・。

ガサガサ・・・。

・・・・!

草が動く音が聞こえる。

「待つて!」

私は制止させる。

ガサガサ・・・。

物音はこっちに近づいて来てるみたい。

何か来るわね・・・。

一体何が・・・?

ガサガサ・・・。

来る・・・!

「なつ！！」

私はその姿を見て驚いた。

そう・・・。

この森の中ではあり得ない生き物を見たから。

それは・・・魚だった！！

私は即座に突進だけは避けた。

ほとんど本能だった。

あまりにも・・・場違いなものを見てしまったから。

「今のは・・・一体・・・？」

私はフェアに聞く。

私の世界では絶対にありえない生き物を見てしまったから。

だつて！－！こには森よ？

なんで魚がここに！？

「今のはフォレスト・フィッシュングです。森に住む魚で今のよう

突進してその歯で獲物を食いちぎる生き物です」

・・・やっぱり森に住んでるんだ。

いつたいどういう原理なのか気になるけど・・・。

この妖魔界でいちいち悩んでも仕方ないかもしれないけど・・・。

とにかく！－！

ガサガサ・・・。

また今のがやつて来るみたい。

第4章 4話

ガサガサ・・・。

草をかき分ける音がどんどん近づいて来る！

「ユニコ！しゃがんでーー！」

また来た！！

ジャンプして・・・正確に私の所に来ている！

「はつーー！」

私はタイミング良く蹴りを放つ。

最初は驚いたけど・・・そういう生き物だと分かればそれは難しくない。

何せ相手は魚。

今までの相手と比べたら簡単だわ。

「ヨーロ様・・・大変ですーー！」

フェアが叫んでいる。

「何・・・？」

「フォレスト・フィッシングが・・・大量にこっちに来ますーー！」

なつ・・・！

大量に・・・？

「今のは単なる偵察だつたみたいで・・・群れでこっちに来ますーー！」

！

まずい！

1体1体ぐらいならまだしも・・・。

群れで一斉にこられたら・・・まずいーー！

どうしたらいい・・・？

こうなつたら・・・。

私はユニコの背中に乗る。

「走つてーー！」

こうなつたら・・・一力所を強行突破しか無い！

「ヨニコ・・・なるべく首は下げていて」

「・・・？それでヨニコ様は・・・？」

「耐える！」

それしか無い。

「ヨニコ様！－耐えるつて・・・－！」

上空でフュアが叫ぶ。

「私はいいのよ。最悪でもヨニコに治す事は出来る。でも・・・コ二コ自身はそういうにかないでしょ？」

そり・・・。

ヨニコの分も私がくらう覚悟。

「そんなの駄目です！－！」

「言い合ってゐる暇無いわ・・・。来るわよー！」

そり・・・。

もうすぐ側にまで来ていた。

これを選択する以外に方法が無い。

ガサ－！

魚が一斉にジャンプして私に襲いかかる－！

私は歯を食いしばる。

「くう・・・！」

想像以上に痛い－！

「この・・・離れなさい－！」

私は慌てて魚をはがす。

あちこちから血が出る。

さすがに・・・鋭い歯だわ。

第4章 5話

「どう・・・？まだ追い掛けで来てる？」

私は意識が飛びそうになるのをなんとか堪えながら言つ。
さすがに・・・出血が酷い。

「駄目です！まだ大量に追い掛けで来ます」

フェアが後ろを振り向きながら言つ。

とりあえず安全な所まで逃げないと・・・。
治す暇も無い。

今の所、ユニークにしがみついてるのがやつと。
そのユニークの体も私の血で所々赤くなっている。
まずいわ・・・。

なんとかしないと・・・。

このままじゃ私だけじゃなく、ユニークもやられる。
それだけは駄目・・・。

フェアとユニークは助けなきゃ・・・。

一番簡単な方法は、私を置き去りにさせる事。
そうすれば私は死ぬけど、二人は助かる。
でも・・・絶対二人は取らない選択。

となると・・・別の方法を考えなきゃ・・・。
「ヨーロ様！！追いつかれます！！」

どうすれば・・・。

「かかれ！！」

何！？

突然・・・誰かの声が聞こえた。

その直後、森の茂みから沢山の狼が飛び出した！！

「なつ・・・」

その狼はフォレスト・フィッシングを捕まえると、そのまま食べて
しまつている。

「これは・・・

フェアがつぶやく・・・。

「何なの？」

「彼らは・・・ワー・ウルフです

「ワー・ウルフ・・・？」

ウルフが狼つて所は私の世界と同じだけど・・・。

「彼らはその魔力でヒューマンと同じような姿になれるのです

また聞き慣れない単語が出て来たわね・・・。

「あの・・・悪いけどヒューマンって・・・？」

「あっ、すいません。ヒューマンというのはルドルフ様やヨーロ様のように一本の足で立ち一本の腕で物を持つような体を持つてゐる生き物です」

ふうん・・・。

つまり・・・人間みたいな姿形をここではヒューマンって言つてゐるのね。

という事は・・・。

この狼は私のような人間のような姿になれるって事ね。一匹の狼が私達の所へと来る。

「悪いな。エサを取らせてもらつた」

「構わないわ。こつちは食われる所だつたんだもの。助けられたわ・・・」

「・・・？凄い怪我をしているじゃないか」

「あつ！ そうだわ！」

フェアが叫ぶ。

「ユニコー！」

「分かつてゐる」

私を下ろして・・・角の力で怪我を治す。

・・・ふう。

かなり・・・やばかったわ・・・。

「ところで……」こへは何しに?」「

私達に近づいている一匹の狼がそう聞く。

どうも……この狼がこの群れのリーダーみたいね。

他の狼は少し離れた所で見守ってる感じ。

「巨人の目”に行く為の旅をしてるの」

「あそこへ……? また何故……?」

「ルドルフとドライドのオババに頼まれてね。クロウを倒す為にも

”巨人の目”に行く必要があるの」

「へえ……。あんたルドルフ様から頼まれるなんて……偉い

様?」

あれ?

このリーダー……。

なんか……女性っぽい感じがする。

狼の姿のままじゃどっちかよく分からぬけど……。

「そう偉いって訳じやないけど……何せ違う世界から呼ばれたし」

「それじゃあ……あんたが噂の救世主って奴かい?」

「どういう噂かは知らないけど……一応救世しに来たわ」

そこは間違つてはいない。

まだ救つてもいいのに救世主つてのも変な話かもしれないけど。

「久しぶりのご馳走を狩りに来たら、知らずに救世主を救つていた

なんてね。こりやあルドルフ様に誉められるかな」

やはり……。

この妖魔界をこれまで平和に保つてただけあって、ルドルフはかなり憧れの存在みたいね。

あれ?

そういえば……。

「あなた達……クロウの欲望の魔力にやられてないのね」

ここはあの山よりもクロウに近い場所。

あの山の周辺でも欲望にやられてるのがいたのに。

彼らはこれだけ集団でいるにも関わらず、きちんと統率が取れている。

「あつはつは。それはね。あたい達は始めから理性でなんて動いてないからさ」

「へ？」

「あたい達は最初から本能で生きてるんだ。今更欲望なんか関係ないのさ」

「へー・・・・。

「それに・・・あんた山にいたラカスタを倒したんだろ？」

「え？ なんでそれを・・・・」

「まだ倒してそんなに経つてないのに・・・・。

「やつぱり。なんか変な魔力は感じていたんだ。ラカスタを倒したおかげでこの辺りの魔力も薄れて来てるんだ」

「へー・・・・そなんだ。

「だから四天王を倒すだけでも、だいぶ違うんだ」

「これはいい事を聞いたわ。

「そうだ！ せつかくルドルフ様が呼んだ救世主に会つたんだ。宴でも開こう！」

「・・・え？」

「いいだろ？ 豪勢にしようじゃないか」

「でも・・・・。

「まあ・・・せつかくの申し込みだし。ずっと戦いばかりだから休息が必要ですよ」

「うん・・・・。

まあ、フェアがそう言つなり・・・・。

「分かつたわ」

その日の宴はまさに豪勢なものだつた。

救世主を祝うという事で、普段よりも凄いとか言ってたけど。ワーワー・ウルフ達はヒューマンの姿になつて広場の中央で踊り、そこでは炎が燃えさかっていた。

どうもヒューマンの姿になると火が怖くなくなるらしい。なんとも不思議な話だけど、ここでそんな事言つてたらきりがないわ。

もう、そういうもんだと受け入れるしか無い。

そして・・・豪勢な食べ物が用意された。

それらは私達の世界と変わりないような物。

ハツキリ言えば人間の食べ物と同じ。

お肉に野菜に果物に・・・。

一体どうやって採つた物なのかしら・・・。

・・・。

あんまり考えない方がいいかもしれない。

何せここは私の世界とは違う。

つまり、私達の世界とは違う採り方をしてる可能性はある。

その現場は見ない方が身のためだわ。

「さあ！どんどん食べていいんだよ！…」

リーダーの彼女は豪快に食べながら言つ。

ここではあまり上品に食べる必要も無いしね・・・。

何せそういう目で見る人は一人もいない。

彼女と同じようにお肉も丸かじりで食べる。

・・・うん！美味しい！！

豚肉と同じような味。

これは豚肉を焼いた物だと思つていればいいわね。

フェアもユニコもそれぞれ好物を食べてゐるみたい。

「あつはつは。救世主と一緒に食事出来るなんて、夢のよひだねー。」
ふふ。

彼女は豪快な感じをするけど、嫌な感じはまったくしない。
裏表が無くて、とてもいい人なのね。

「さあ！これも飲んで！」

そう言って渡されたのは・・・お酒の匂いがする。
色は赤色であるでワインみたいだけど・・・。
どうしよう・・・。

私・・・お酒なんて飲んだ事無いんだけど・・・。

「何してんだい！主役のあんたが飲まなくてどうするんだーー。」
つまり・・・。

飲まなきやいけないって事ね・・・。
まいったわね・・・。

仕方ないわね。

ここは一気に！！

「おお！いい飲みっぷりだね！-!
うにゅ・・・。

なんか・・・風景がゆがんで・・・

第4章 8話

・・・あれ？

頭が痛い・・・。

あつ・・・そうか。

あのお酒を飲んだから・・・。

うう～。

これがいわゆる「口酔いつてやつ」なのね。
うう～、気持ち悪い・・・。

・・・あれ？

「え・・・ー？」

私はそこでよじやく氣づいた。

そう・・・。

私とワードー・ウルフのリーダーの彼女と一緒に二三と一緒で出来ていて牢屋の中に入っている事に。

「なつ・・・なんで！？」

私は力いっぱい扉を叩く。

「何してんだよ・・・」

リーダーが起きる。

「・・・あつ！？なんだこれ！？」

そう・・・。

不思議に思った事がある。

私達を捕まえたいのなら、なんで彼女も一緒にいるのか。

つまり・・・これはワードー・ウルフ全体で考えた事では無い。

たぶん・・・一部の反乱のせいだらう。

その証拠に見える範囲で、他にも捕まってるワードー・ウルフ達が見える。

牢屋の鉄格子から、私達を捕まえたと思つ反乱側のワードー・ウルフがやって来た。

「おこ！これはどうこう事だ！！」

「悪いとは思つたが・・・これからはクロウ様の時代なんだ
くつ・・・。

「何言つてんだ！！これからだと・・・クロウの時代なんて来る訳
ないだろ！！何せそのクロウを倒す為の救世主が現れたんだからな
！」

「・・・無駄よ。彼らは・・・クロウの魔力にやられている
そう・・・。

目の色が彼女と違う。

これこそが・・・クロウの魔力にやられた証。

今はまだ理性があるような感じだけど。

これがそのうち無くなる。

今までの経験でなんとか分かった話だけど・・・。

「そんな・・・」

リーダーの彼女はがっくりと肩を落とす。
そう・・・。

クロウの魔力が関係無いなんてとんでもない。
彼女達はその効果が無かつただけ。

その中にはやはり魔力に負けてしまった者もいる。

それが、今回のような事を起こしてしまった。

それにしても・・・。

私は再び牢屋の中に入るはめになるなんて。
でも・・・。

今回はハタカーンの人達のような手は使えない。

何せ彼らはクロウの魔力に負けて、自らやつてるのであつて脅迫さ
れてる訳では無い。
どうすれば・・・。

例によつてフェアがいない。

こういう時、体の小さい彼女は有利かもしけない。おそらく隙を見てどこかへ隠れているのでしよう。

一体どこへ・・・?

ガサガサ・・・。

・・・・!

草をかき分ける音。

何か最近も聞いたような音。

そう・・・。

フォレスト・フィッシングが来る音。

その物音は大量にあちこちから聞こえて来る。

当然、私達を見張っているワーム・ウルフ達もそれに困惑する。

これは・・・。

その姿が見えた!!

間違ひ無い!

魚の姿。

フォレスト・フィッシングだわ。

その群れがここへとやつて来た。かなり混乱している。

「ヨーロ様!」

フェアがやつて來た。

その手には鍵を持っている。

この混乱を利用してこつそり持ち出したんだわ。

「助かつたわ。フェア」

フェアが牢屋の鍵を開ける。

「いいんです。私が下戸なのが助かりました」
なるほど。

フェアはお酒を飲まなかつたから助かつたのね。

そういえば・・・コニコも飲んでいたわね。

お酒を飲むユニークーンって不思議な光景かもしれないけど。

とにかく・・・。

「脱出するわよ！」

私はワー・ウルフのリーダーの彼女を連れて、なんとか逃げ出す。どうもフォレスト・フィッシングもワー・ウルフ達にしか標準を決めてないらしく、私達の所まで来ない。

私はさらに捕まえられていた他のワー・ウルフ達も助ける。そして・・・。

全員で離れた所へと逃げ出した。

ふう・・・。

それにもしても一時期は私を狙つていたフォレスト・フィッシングに、逆に助けられるなんて皮肉は話ね。

あいつらがやつて来なければ・・・。

おそらく私は殺されていたかも。

「それにしても・・・クロウの魔力に負けるつて・・・おつかないんだな」

「そうね・・・あなた達はなまじ知恵があつたからこいついう事になつたんでしょうね」

そうでなければすでに同士討ちや統率の取れない勝手な行動とか行つていたでしょうね。

「ねえ。ルドルフ様のお城へ避難しては？」

フェアが言つ。

「あそこへ行けば、クロウの魔力から守つてくれます」

なるほど。

それはいい案だわ。

「そうね。あなた達は今から行つた方がいいわ。あまり長い間留まつてると危ない」

「・・・悪いな。本当は助けられたお礼でもしたいのに・・・」

「いいのよ。私を助けてくれたでしょ？そのお礼にあなた達を助けたと思つてくれればいいわ」

それに・・・。

なんか彼女の性格だと付いて来るとか言い出しかねない。

フェアやユニークだつて十分巻き込んでると言つのに。

それに彼女は守るべく群れの人達がいる。

群れのリーダーとして群れを守る事を優先した方がいい。

「ここでお別れね。クロウを倒したら城に戻るから。その時には一緒にお祝いしましょ」

「ああ・・・」

そろそろ目標となるくぼみにも近い。
そのくぼみに行けば次の目標が見える。

そこへ行けば次の目的地である”巨人のてのひら”が見える。
だいぶ最終目的地に近づいて来てるわね。

「ヨー ヨ様。ふとした疑問なんですが。何故ここまで私達を守りう
とするのですか？」

え？

「そんなの当たり前じゃない」

そう。

私の中では、別に特別な事では無い。

仲間を、そして友達を守る事は当たり前。

「だって、私がこうして無事に来れてるのはあなた達のおかげじゃ
ない」

二人がいなければ、とっくの昔に死んでるでしょうね。

そういう意味では、私が一人を守るのは当たり前。

例え、この身を犠牲にしてでも。

「あつ」

ふと思い出した。

その原因が。

そう言えば、その昔あった出来事。

私がまだ幼かった頃。

たぶん、まだ幼稚園ぐらいの時。

とても仲の良かつたグループがあつた。

その時に、グループの一一番年上のお姉さんがいた。

みんな当然慕っていた。

とても素晴らしい人だった。

そう。

だつたのだ。

彼女はある事故に巻き込まれて死んでしまった。

それがとても悲しかつた。

その時に、親しい人がいなくなるという事の意味を知つた。
友達や仲間がいなくなる。

それは子供心にも、非常に悲しい出来事だつた。

「たぶん。その時に仲間の重要さを知つたんだと思う
だからこそ、私は仲間を大切にしないといけない。
もうあんな悲しい出来事は嫌だから。

でも。

それがあまりにも強すぎて。

逆に友達を作るのが怖くなつてしまつた。

失う事の恐さ、悲しさをもう一度味わいたくないため。
だけど。

今回でまた仲間が出来た。
この妖魔界を救うために。

第5章 穴

ここが”巨人のへそ”と呼ばれるくぼみ……。

あの山から見た時はその正体も分からなかつたけど。
ここまで近くに来れば分かる。

もの凄く巨大な穴がそこにはあつた。

下は見えないほど深い。

その穴の端には大きな螺旋階段が見える。

どうもこれで下へ下がれるみたい。

もつとも私は降りるつもりは無い。

次の目的地”巨人のてのひら”である高原が見える。
ちょっと高台になつてゐるね。

「ヨーロ様……」

怯えながらフェアが来る。

一体どうしたのかしら……？

フェアが指さしている。

そこには……人間のような生き物がいた。
他のヒューマノイドかしら……？
いや……。

それはとても生き物とは言えなかつた。

肉が崩れ落ちて目がある所には目が見えなかつた。
なんというのか……。

私達の世界にもこつとう化け物はいる。
ゾンビという生きる屍という存在。

それと似たような存在なんでしょうね……。

それがじりじりとこつちに近づいて來ている。
フェアは怖がつて私にしがみついている。

こういう彼女を見るのは始めてだわ。

それにしても……。

出来る事なら触りたくない。

何か・・・武器になるような物は無いのかしら。
ふと・・・。

その生きる屍の口が開く。

「ぐあああああ！」

なつ・・・！

突然力が抜けた。

私は地面に倒れる。

フェアも地面に横たわってるのが見える。

何・・・？

意識はある。

別に痺れてる訳でも無い。

単に力が抜け落ちた・・・そんな感じ。

さつきの叫び声の力・・・？

たぶんそうだわ。

それぐらいしか原因が無い。

そんな力を持つてるなんて・・・。

じりじりと近づいて来ている。

くつ・・・どうすれば・・・！？

・・・？

突然。

そいつは私達から離れて行つた。

どういう事・・・？

徐々に力が戻つて来る。

あのまま何か攻撃してくると思つてたのに・・・。

「あれ？ ユニコは？」

そう。

側にいたはずのユニコの姿が見えない。

「あつ！ ヨーロ様！！ あそこには！」

穴の方を指さす。

そこには・・・。

力が抜けてぐつたりとしたゴーットを運ぶ生きる屍達の姿が見える。
まずい！！

「追いかけなきゃーー！」

私は螺旋階段の方へと走る。

「くつ・・・」

そこには数多くの生きる屍達が見える。

「あいつら・・・。そうだわ！ あいつらはアガラットです・・・」

「アガラット・・・？」

「はい。アンデットの一 種で、あの叫び声を聞くとエネルギーを吸い取られるんです」

なるほど・・・。

だからさつき力が抜けたのね。

「すいません・・・。私・・・ああいつアンデットが苦手だったもので・・・」

気持ちは分かる。

私だって・・・出来るなら関わり合いになりたくない。
でも・・・。

ユニークが連れて行かれてる今、なんとかしないと・・・。
一 匹や二 匹ぐらいなら、何か策も考えられるけど・・・。

今日の前にある数は軽く20匹を超える。

ハツキリ言つて武器も無い私に、なんとか出来る数じゃない。
ユニークが穴の奥の方へと消えて行つた。

そこで・・・ようやくアガラットの奴らも姿を消す。

「ユニーク様・・・」

不安そうに見つめる。

そう・・・。

何も怖いのはフェアだけじゃない。

私だって怖い。

この奥にはああいう奴らが大量にいる事だつてありうる。

それに対抗する力なんて無い。

でも・・・。

このままユニークを見殺しなんてしたくない！

「フェア・・・。降りて行くわよ」

私は決意を固めた。

ユニークを助ける為に。

「ヨーロ様・・・」

「嫌ならここで待つてもいいのよ。どうせ・・・・ユニークを助けたら戻つて来るんだし」

「いいえ！！私はヨーロ様と共に・・・・」

体が震えている。

よほど怖いのは分かつてゐる。

私だつて出来る事なら行きたくない。

私だつて女の子。

本能的にああいうのは受け付けない。

でも・・・。

ユニークを助けないと。

私はゆっくりと螺旋階段に足を乗せた。

待つてね・・・・ユニーク。

ゆっくりと降りて行く。

やがて・・・一番下が見えた。

地面がある。

そこに・・・ぐつたりと倒れたユニークの姿も見える。

問題は・・・

その周りに沢山のゾンビだった。

さっき私を襲っていたアガラットとは違う。
何処へ消えたのかしら・・・。
どう考へても罷ね。

何せユニークには何もされてる様子が無い。

縄で縛つてないし、檻に入ってる訳でも無い。

ただ・・・横になつて眠つている感じ。

でも問題は・・・この大群のゾンビ。

武器の無い私にとって、これをなんとかするのも難しい話。
ユニークは無事そうだけど・・・。

そうだわ！

「ねえ、フェア。ユニークが無事かどうか確かめてくれる?」
そう。

まずユニークがただ眠つてるかどうかを確かめないと。

「分かりました・・・」

フェアがゆっくりと降りて行く。

こうこう時飛べるつて便利ね。
ユニークの側に降りる。

まだゾンビ達は気づいていない。

もつとも・・・気づいたとしてもフェアは飛んで逃げればいいだけ。
だけど。

やがてフェアが戻つて来る。

「ヨー・ロ様、どうやら力が抜けているみたいですね」

なるほど……。

どうもアガラットの能力でやられてるみたい。こうなるとやっかいだわ。

しばらくはヨー・ロは立ち上がる力も無いって事ね。

どうすれば……。

・・・・?

誰か・・・ヨー・ロの側にやつて来る。

私は慌てて身を隠す。

ちらりと見たけど・・・黒い布みたいのを被つていて顔は見えなかつた。

人間のように一本足で立つてる感じだつたけど・・・。

全身が布で覆われているので中身は分からぬ。

でもあいつもゾンビとかの仲間に違ひないわ。

「おまえが仲間のヨー・ローンか・・・。どういう気分だ?」

・・・仲間!?

どうこう事・・・。

やはり・・・私を狙つて?

「つるやい・殺すならさつさと殺せ!!--」

ヨー・ロ・・・。

「ヨー・ロ様を危険にさせんぐらになら、死を選ぶ!!--」

「そやはいくか。そいつは必ずやつて来る。あいつはクロウ様にとつて邪魔者だからな」

くつ・・・。

やはりヨー・ロは私を釣るためのエサなんだわ。

そうなると・・・一体どうすれば・・・。

「それにあいつはラカスタをも破つたからな。同じ四天王としてあいつは危険だ」

なつ・・・。

あいつも四天王・・・。

これは・・・。

下手に降りない方がいいわ。

私は一旦穴の入り口である一番上まで戻っていた。

「どうしたんです? ユニコ様」

「決まってるでしょ。 あいつとどう戦つかを考えないと……ユニークを助けるのは無理だわ」

そう・・・。

あいつがこのゾンビ達のボスなんでしょう。

それはあいつが表れた時になんとなく分かっていた。

あいつが出て来た時、周りにいたゾンビ達が道を開けていた。だからこそ、あいつがゾンビやアガラットを操っているんだわ。つまり・・・逆に言えばあいつを倒せばゾンビ達の力も消える。そうすればユニークの力も元に戻る。

そこでここから脱出!

と・・・ここで問題なのはあいつを倒す方法。

何せこっちには何の武器も無い。

しかも多勢に無勢。

不利な事このうえない。

どうすればいいのかしら・・・。

「大丈夫でしょうか・・・。ユニークは・・・」

フェアが心配する。

「ユニコは大丈夫よ。あの口ぶりからして、ユニークは私を釣る為のエサなんだもの。そのエサを無くすような事はあいつだつてしまくないはずだわ」

そう・・・。

罠にかけるためのエサは元気な方がいいに決まっている。

だからユニコが危険になる事はまず無い。

だからこそ私はゆっくりと策を考える事も出来る。

「ねえ・・・。何か弱点は無いの?」

「ああ、こいつアソノテツト系は聖なる物に弱いんですが……ふーん……。

でもここに聖なる物なんて無い。

聖なる物……。

……あれ？

「ねえ……。ゴニコ自体が聖なる存在じゃない？」

確かにゴニコの角には傷や病を治す力があるはず。

「でも……。あれは清らかなる少女にしか効果が無いんですが……。

「待って……。

「ねえ。それを何とか利用出来ないかしりっ?」

そう。

それこそが今私達にある唯一の武器。

ゴニコは私を釣るエサであると同時に、あいつらを倒せる弱点の武器でもある。

かなり危険だけど……。

「…………ヨーロー様……それは危険です……」

「そんなのは百も承知よ」

そう。

危険なのは分かつてる。

かなり危ない賭けである事は間違いない。

でも……。

他に方法が無い。

この私が出来る事はいくつも無い。

その少ない出来る事の中で選んだ最善の方法。

それはフェアが心配するほどの危険な事。

これならゴニーヨを助ける事も出来るし、あいつらを倒す事も出来る。もつとも……。

私の考え方になるという保証は何処にもない。

かなり推測が入ってるのは間違いない。

この考え方自体が間違っていたその時は……。

まず間違いなく死んでしまう。

それでも構わない。

何せ……それしか方法が無いんだから。

私はゆっくりと螺旋階段を降りる。

失敗してたり間違っていた時の死は、すでに覚悟の上。

ゴニーヨを助け、さらに四天王を倒すには綱渡りのような危険な方法

でも取るしかない。

しばらく降りると地面が見えて來た。

その中央にはゴニーヨがぐつたりと倒れている。

そして……。

その周囲にゾンビ達が囮んでいる。

さつきと同じ光景ね。

ただ・・・四天王の姿は見えない。

何処へ行つたのかしら・・・?

でもいいわ。

いないなら、いないで都合がいい。
もう少し下へ降りる。

・・・ん?

例の黒い布を被つた・・・四天王の一人がやつて來た。
何か妙な感じね。

そう・・・。

なんでこの距離になると來るのかしら?

まるで・・・分かつてゐみたいに。

確かにユニークはエサで私を釣るための罠だといつのは分かる。

でも・・・。

なんで計つたかのよう、一定の距離まで降りるとユニークの所へと
來るのかしら・・・?

第5章 6話

間違いない。

絶対・・・あいつは何かを使って私が来てる事が分かるんだわ。
だからこりゃ、一定の距離になるとコニコニの側に来る。
つまり・・・。

私が来てる事を察してるから。

だけど・・・。

それなら何でこの螺旋階段を上がるって事をしないのかしら・・・?
確かにあそこにいれば確実に私を迎撃つ事は出来るけど。
もしかしたら・・・。

それほど正確に場所が分かつてる訳じやないのかしら?

だいたいの距離しか分からないから上がって来ない。
あまり遠すぎると逃げられてしまう。

逆に近づき過ぎると思わぬ反撃を受ける事もある。

だから・・・あそこから離れないんじやないかしら。

あいつにしてみれば、あそこにいれば必ず私が来るから・・・。

余裕で攻撃する事が出来る。

つまりはそういう事なんだわ。

それなら・・・。

私はある程度上に登る。

すると・・・。

奴はまた離れて行った。

この位置だと、もう私がいる事が分からないんだわ。
つまり・・・あいつはどこか遠くへまた離れて行った・・・。

そういう風に思ってるんだわ。

確かに・・・ちょっと高い距離。

でもここが気づかれないギリギリの距離。

よーし・・・。

私は覺悟を決めた。

行くわよ・・・・・!

「はっ！」

私は螺旋階段から飛び降りた！！
そう。

これが・・・私の考えた作戦。

素直に階段を使うと気づかれる恐れがあるけど。
これなら・・・一気にユニコの所へ近づける！！
地面が近づく・・・・・！

「きやつ！！」

思いつきり地面にぶつかった。
かなり・・・体が痛い・・・。

「・・・ヨーロ様！！」

「良かつた・・・ユニコ。まだ無事みたいね
力は抜けているけど、表情は元気そうだわ。
私はユニコの角に触る。

だんだん痛みが引いて行く・・・。

「さあ・・・起きて」

私はユニコを抱える。

「でも・・・ヨーロ様・・・・・。周りが！-！」
そう。

いい加減にゾンビ達も気づいている。
どんどん私に迫ってきている。

だけど・・・。

私はユニコから離れない。

「心配ない・・・・・。私の考えが正しければ・・・問題ない」

ゾンビ達がゆっくりと近づいて来る。

だけど・・・。

私の考えに間違いが無ければ・・・。

このままユニコの角を持ったままでは解決出来る。

「ヨーロ様・・・」

ユニコが心配している。

確かに賭けよ。

それは私も認めるわ。

でも・・・。

これ以外に有効な手なんて何もないんだから仕方ない。ついにゾンビが私に触れる！

だけど！！

ゾンビの方が崩れて行つた。

やつた！！

読み通りだわ。

「ヨーロ様。これは一体・・・!?」

フェアも驚いている。

「簡単な話よ。こいつらは聖なる力に弱いんでしょ？そしてユニコの角の力は聖なる力、ただしその力は限定されてるけど・・・。私にはその力が効く。だからこそその角を触ったままの私には聖なる力が使える」

「・・・そうか！つまり・・・ヨーロ様が聖なる武器なのか！？」

ユニコの言つ通り。

だから私に触つたゾンビは崩れて行つた。

私の読みは当たつたわ。

「貴様！・・・いつの間に！？」

どうやら、今頃四天王の一人が来たみたい。

「あつ！ヨーロ様……」いつは……リッチですよ……アンデットの中でも最高クラスに強い存在です！！」

これがリッチ……。

確かに……かなり強い存在。

それが……今、目の前にいる。

私は緊張する。

だけど……こいつもアンデットに変わりない。
つまり……。

ユニークの力に弱いって事。

もつともゾンビみたいに簡単に触つてくれるとは限らないけど。

「いつの間について……。そりゃあ階段使って無いもん。当たり前でしょ？」

そう。

私は途中から飛び降りている。

だから、一気にユニークの所に来ている。
意表をつくにはこれしか方法が無かつたわ。

「階段を使ってないだと・・・！」

「そうよ。途中から飛び降りたんだもん。あんたに見つからないには最善の方法でしょ？」

奇襲をかけるには絶好の方法だったわ。

「無茶をする奴だな」

「でも・・・ユニークを助けるにはこれが一番だもの」

馬鹿正直に階段を降りてゾンビをかき分けて・・・なんて方法を使える訳が無い。

途中でやられるに決まってるわ。

「それにしても・・・上手く行ったからいいものの。もし失敗していれば・・・」

ユニークが心配する。

もちろん、そのリスクは分かつていた。

「信じていたわよ。ユニークの力を」

そう。

ユニークの癒しの力を信じていなければ出来ない行動。

信じていたからこそ、危険な方法を取つただけの事。

「くつ・・・お前がクロウ様を脅かす存在だと聞いてはいたが・・・。確かにやつかいな相手だな」

れて・・・。

ここまでは私の考え方通り。

最大の問題はこいつ・・・。

四天王の一人、リッチ。

こいつは一筋縄ではない。

こっちの武器は弱点もある、ユニークの聖なる力のみ。

かと言つてこのままの状態でなんとか出来るとは思えない。どうすれば・・・。

「やはり・・・。」ここで死んでもいいの――！」

どうする！？

リッチの手から冷たい冷氣みたいのが出る。
うう・・・。

もしゴーロの角に触つていなければ・・・。

どうなるか確かめたくないわね。

「くつくつ。そのままずっと待つてただけでいいのか？」

・・・?

どうこう事？

ここに来て急に勝ち誇るなんて・・・。

「こいつを捕まえた！！

あっ！！

リッチの手には・・・。

フェアがいた・・・。

「フェア！！」

私は思わず走る！

「勝った！！

あっ・・・！！

リッチはフェアを離し・・・。

その手が私を掴む。
しまった！！

第5章 9話

「ヨーロ様！」

フェアの叫び声が聞こえる。

フェアにしてみれば、自分のせいでこうなってしまったのだから仕方ないかもしれないけど・・・。

私はフェアを助ける事しか頭に無かつた。

だから・・・。

リツチに捕まつてよじやくその事態に気がついたぐらい。

「あああああ・・・」

だんだん・・・力が抜ける・・・。

アガラットの時の比じやない。

もつと根本的なもの・・・。

そつ・・・。

まるで生きる気力そのものを吸い取つてゐみたいに・・・。
まさか・・・。

ここで・・・私の旅が終わるなんて・・・。

「これでこの妖魔界は終わりだ！！我々が支配するーー！」

悔しいけど・・・。

こいつの言つ通り・・・。

私はここで・・・。

「ヨーロ様！！」

ヨーロの声が聞こえる・・・。

唯一気になると言えば・・・。

フェアやヨーロの事。

彼らはきちんと無事に帰れるのかしら・・・。

・・・ドス！！

・・・？

何か・・・音が聞こえた。

かろうじて残つてゐる力でその方向を見ると・・・。

私の服を少し破つて・・・そのままリッチを貫いている物が見える・・・。

やけに見慣れたような・・・。

これは・・・?

・・・!-

ユニコの角だわ!!

「なつ・・・!!」

リッチは目を見開いてユニコの角を見ている。

「ヨーロ様の生氣を吸い取る事に力を使つてゐる今、俺の癒しの力を受けたらどうなる・・・?」

「し・・・しまつた!!」

なつ・・・!?

その次の瞬間。

リッチは・・・蒸発するように消えていった・・・。

「大丈夫ですか? ヨーロ様・・・」

フェアが来る。

うううう・・・。

まだ多少頭が痛い氣もするけど・・・。

体に異常は無いみたい。

ユニコの角が当たつてるので、癒しの力で治つてゐるというのもある。

「・・・どうも、ユニコに助けられたみたいね」

「いいえ。俺はヨーロ様に助けられたんです。それも命の危険を知りながら・・・だからこそ俺も一か八かの賭けをさせてもらつた」

という事は・・・。

「まさか・・・。リッチを倒せると思つて無かつた・・・?」

そう言つと、ユニコは頷く。

まったく・・・。

「ヨーロ様を助けられる事は分かつてましたが、まさか倒せるとは思つていなかつた。それに・・・主に似て無謀なんですよ」

でもまあ・・・。

そのおかげで助かつたんだし。

これで四天王の一人目も倒せたんだし。

とりあえず・・・。

上に登りましょう。

リツチが倒れた事により、アンテット達の力は無くなつている。
あちこち死体が見えるけど、動く気配も無い。
これでいいのよね。

死んでも勝手に悪い事に使われていたんだから。
このまま・・・静かに眠るのが本来の姿。
本当はきちんと埋葬したいんだけど・・・。
あまりにも数が多くすぎる。

それに・・・。

中には骸骨も見える。

それにバラバラに飛び散つててるもある。

「『めんなさい』

私は謝る事しか出来ない。

「ヨーロ様・・・」

私に出来る事は少ない・・・。

改めてそう思う。

どうして私なんだろ?・・・。

お姉ちゃんだったら・・・。

そう思う時がある。

お姉ちゃんなら何の武器も無くても戦える。
何せ幼い頃から格闘を習つっていた。

でも私は・・・。

何の戦う訓練もしていない。

巻き込まれる形で妖魔界に来てしまつたけど・・・。

今はフェアとヨーロの為にも、この妖魔界を救いたいと思つ。
そして・・・。

欲望のために平和を乱すクロウを許す訳にはいかない。

「あつ、ヨーロ様。ようやく脱出出来ました」

本当にようやくな。

最初は通り過ぎようとしたけど・・・。
リッチのせいで中に入るはめになつたし。
さて・・・。

次の目的地があの高台ね。

「ヨーロ様。これからあそこへ行くとなると、途中で”砂煙の街”
に着く事になるでしょう」

「”砂煙の街”・・・？」

「どうよりも街・・・！」

「はい。妖魔界の中でも活氣のある街なんです」

「へえー・・・。

今までそういうの無かつたけど・・・。

「あつ・・・でもそういう所ってお金つて必要じゃないの?」

私はこの世界の貨幣なんて持つてないし。

今までの旅でもお金が出てきた事もないし。

「オカネって何です?別に何か特別な物なんていらないんですけど」

「へ・・・?

「・・・そういう根本的な所から違うって事?」

「うーん・・・。」

「いらなーって言つたならいいんだけど」

第6章 街

そこはすぐに分かつた。

とても大きな建物がいくつも見える。

砂煙の街って言つてたけど・・・。

今の所、砂煙がある気配は無い。

もしかして一定の時間で出るのかしら・・・?

私達は街へに入る。

そこには大勢の住人がいる。

いろんな・・・多彩な住人が。

この妖魔界にはこんなに沢山種族がいるのね。

あれ・・・?

ふと気づいた。

なんでここはこんなに平和なの?

ここはクロウの魔力が支配する地域。

欲望にやられた住人がいてもおかしくないのに・・・。

ここにはまるでその気配が無い。

おもいつきり平和な街そのもの。

これはどういう事・・・?

私はゆっくりと街の中心へと向かう。

本当に・・・いろんな姿の住人がいる事を除けば、私のいた街とそ
う変わらないぐらいの平和。

「あつ！ヨーロ様。見てください！！」

フェアが街の外側を指さす。

見ると・・・そこには砂煙が見える。

さつきは無かつたのに・・・。

でもこれまでしきこは”砂煙の街”になつた訳ね。

やはり一定の時間でああるのかしら・・・。

不思議な仕組みね。

とつあえず・・・。

「どこか泊まれる所ない・・・？いい加減疲れたわ」
思えば妖魔界に来てから、きちんと休んだ事って無いんじやない？
そう考へると、かなり無茶な旅ね。

ゴーフやフニアにもゆっくり休んでもらわないと。

「そうですね・・・。あそこがいいですよ」

フェアが案内する。

そこは小さな宿屋みたいな所。

結構造りは私達の世界と同じなのね。

扉を開ける。

「「めんぐださーー」

「あいよー」

奥から出てきたのは、ヒューマノイドの姿をしているおばさん約
うな人だった。

人間と違うのは、結構背が低い事と・・・あと女性なのに鬚が生え
ている事だった。

しかも・・・かなり立派な鬚。

口の周りが髭だらけだもん。

それがまた似合つてゐるから不思議。

「あら。誰かと思つたらフェアリーじゃないかい。久しづりだねえ
「お久しづり。泊まりたいんだけど部屋はあります？」

「もちろんー。いつでも歓迎だよー！」

フェアが教えてくれた。

このおばさんはドワーフのジンと言ひつ。

もちろんそうやって呼び合つのは、ごく限られた親しい間柄であつて他の人達は単にドワーフのおばちゃんとか呼んでるみたい。

「聞いたよ。あんたがこの妖魔界を救いに来てんだって？」

「えつと・・・何の因果かその為に呼ばれたみたい」

今までぐじけたり弱音を言つたりもしたけど・・・。

それでも旅を止める所まではいつてない。

「あの子があんなに信頼してるのは珍しいよ。あんたは優しいんだね・・・」

「いえ・・・だつて、私のせいで巻き込まれたんだもの。みんなを大事に思うのは当たり前だわ」

そう・・・。

本当なら私一人で行くはずだつたのに。ゴブリンから助けたのがきっかけでここまで連れて来てしまつた。しかも・・・私達に合わせて。

その気になれば飛んで逃げる事も出来る。

それをしなかつたのは・・・私達と旅をしたかつたからかも。

「それにしたつて命がけで守つたりはなかなか出来ないよ。誰だって自分の命の方が大事なんだから」

「確かに・・・そういうのは多いです。でも・・・私のせいで危険な目に合つてるんだもの。例え私が死ぬような事になつても・・・二人を助けたいのは当然」

この気持ちは変わらない。

私一人だったら、絶対ここまで来れない。

フェアやユニコがいたからこそ・・・私はここまで来れる事が出来た。

それは一人のおかげ・・・。

それでも！

本来は二人は危険な目に合つ事なく、お城の中で安全に守られるはずだった。

それが私に関わったせいです・・・。

だからこそ、二人を命を賭けて守り抜かないと。

「なるほどね・・・。ルドルフ様が言つだけあるね。命がけで仲間を守れるなんて、そんなに簡単に言える台詞じゃないんだよ」

それは・・・。

たぶん私の性分。

この私の性格は分かつていたからこそ、これまで冒険に出ようつなんて思わなかつた。

私のせいで巻き込まれたんだから、その私が責任を持つのは当然。だからこそ、平和な私の街にいたのに。

今更愚痴言つても仕方ないけど。

「とにかく！今日はゆっくりと休んでおくれー！」

ふふつ。

それに異存は無いわ。

次の日の朝。

これだけは聞いておきたかつた事がある。

それは・・・。

「どうして・・・。」ここは平和なの?」

そう。

クロウの力で混乱してもおかしくないのに・・・。

「ああ・・・。それはね。ここにはルドルフ様の右腕的存在のドラゴン様がいらっしゃるからだよ」

・・・え!?

ドラゴン!!

ジンの口から出たのは意外な名前だった。

その名前は私も知ってる。

巨大なトカゲのような姿をしているが、翼を持つている。

その圧倒的な力と、口から炎を吐いたりする能力のせいで魔物の中でもトップクラスの強さを誇る。

また空を飛べるので上空を取れるという強みもある。

そのせいか、ドラゴンを退治出来るほど的人はそうはない。

良く物語なんかで、その名前は知つてたけど。

そのドラゴンがここにいる・・・。

しかも、ルドルフの右腕的存在って事は・・・少なくとも味方つて事ね。

「ねえ・・・。そのドラゴンって・・・すぐに会えたりするの?」

ちょっと興味を覚えた。

一度は見てみたいじゃない?

「そうねえ・・・。あたし達はそんなに簡単に会える存在じゃないけど・・・、あんたら大丈夫なんじゃない?」

「それは・・・ルドルフのお客様だから・・・?」

「そうだよ！あのルドルフ様が呼んだお人だ
そうなのかなあ・・・。
でも・・・駄目で元々。

行ってみようかな・・・？

「それじゃあ、その場所を教えてください！」
ドラゴンに会えるなんて、そう滅多にないし。
しかも攻撃される恐れはまず無い。

安全に会えるなんて、それこそ一生に一度あるか無いかよ。
私はフェアとユニークを起こしに行つた。

第6章 4話

私とフェアとユーノはジンに教えて貰つた巨大な建物へとたどり着いていた。

ここにドラゴンがいるらしい。

確かに・・・ドラゴンがいるには相応しいほどの巨大な建物。こんな大きな建物は始めて見るかもしれない。ルドルフがいた城より大きいんじゃない?

私はその中へと入る。

今の所、誰かいるような気配は無い。

この街の人達は気軽に入りつたりしないのかしら? もつとも・・・。

私もこういう機会じゃなかつたら入ろうとは思わないけど。何せ相手はドラゴン。

緊張し過ぎてるわよ。

やがて大きな扉が見える。

その両脇には同じくらいの巨大な石像が見える。

・・・ちょっとラカスター・ソルジャーを思い出してしまった。もちろんあれはラカスターの魔力が無いと動かないんだけど。

「誰だ?」

・・・・!

声が聞こえた。

ドラゴン・・・?

「すいません! 私・・・ルドルフに呼ばれて妖魔界に来た葉子と言います!あの・・・一度お会いしたいと思いまして」

私は素直に言つ。

「そうか・・・お前があのヨーノか・・・いいだろう」

そう言う声が聞こえると、石像が動いた。

その石像が、扉を開ける。

これも「ドーラゴン」の魔力なのかしら・・・?

私達はゆっくりと中へと入る。

その中には・・・「ドーラゴン」がいた。

始めて見るけど・・・。

「よくここまでたどり着けたな。まずは讃めなくてはな」

「いえ・・・。ほとんど無我夢中で・・・運が良かつたんです」

それはある。

いくつもの偶然が私をここまで連れて來たんだと。

一步間違えてたら死んでもおかしくない。

「それにも・・・この街はあなたの力で平和になつてゐるんですね・・・」

「ルドルフ様の命令でな。城へとたどり着けない者達の為になるほど・・・。

確かにこの妖魔界は広い。

となると・・・。

「もしかして・・・」「うこうう街がいくつかあるんですか?」

「そうだな。ここから”巨人の田”へと行く道には無いが、他にもいくつかある」

なるほどね。

「特にここは重要なだから。俺がここへと来ている

重要・・・?」

「あなたが来るからな・・・」

え・・・!?

「それじゃ・・・私のために?」

「そうだ。ルドルフ様が・・・あなたが来る為に休める所を作つた方がいいと思つてな」

「へえー・・・。

氣を使つてもういちやつたわね。

「そりいえば……」

これも聞いておきたい事だつた。

「妖魔キラーって……何なの？」

そう……。

未だに使う事に出来ない、私の武器。
その妖魔キラーが何なのか……。

それを知つておく必要はあるわ。

何せ……絶対に使う武器。

その予備知識はあつた方がいいわ。

「そうか……まだ使えないのか……」

ドラゴンは察してゐみたい。

私は黙つて頷く。

「こ」の私も一度しか見た事無いが……、形は普通の剣にしか見え
ない。だが、それで切られると我ら妖魔界の住人は形も無く消え去
つてしまふんだ

それはまた……。

「……と、言つ事は……当然あなたドラゴンやルドルフ、まし
てや仲間であるフュアやユニークもそうなるつて事……ね？」

「そういう事だ」

つまり……諸刃の剣つて事ね。

それは……あんまり使いたくない武器ね。

「ふむ……。その表情を見ると、お前は確かに妖魔界を救う素質
はあるようだな」

「……？どういう事？」

「知つてるだろ？以前妖魔キラーを持った人間が妖魔界を滅ぼそ
うとした事を」

「そういえば……。

だからこそ、私がそんな武器を使えるなんて、未だに信じられない。

妖魔界の住人を滅ぼしちゃうんだなんて・・・。

「だが・・・おまえはその武器を振り回すよつでは無いな」

「当たり前じやない。そんな危ない武器・・・。まず使いたくも無いわよ・・・」

「でも、お前は使わざるを得ない。何故ならクロウを倒すには妖魔キラーしか無い」

「うつ・・・。

それを言われると弱い。

クロウは倒しておきたい存在。

だけどそれには妖魔キラーしか無い。

ハツキリ言って今までのような戦い方で勝てるとも思つてない。

かなりの覚悟が必要ね・・・。

「この街の地下へ行つてみると」

「地下・・・？」

「どういう事・・・？」

「危険な所だが・・・お前には必要な場所だ」

必要な場所・・・？

「ドラゴン様もこう言つてる事ですし・・・行つてみては？」

フェアもこう言つてるし・・・。

必要な場所といつ言葉も引つかぬ。

ドラゴンはもう話す事も無いのか、目を閉じてしまった。
寝てるのかしら・・・？

仕方ないわね。

私は地下へと降りて行つた。

ここはまるで生活の気配が無い。
当然かもしれない。

ここは地上の街とは全然雰囲気が違つ。
松明で一応明るさはあるけど。

なんというのか・・・。

雰囲気的に暗い感じ。

さて・・・。

注意しないといけないのが、ドラゴンの言つていた“危険な所”
という意味。

何か敵が現れる・・・って事はまず無いと思いたいけど・・・。
他に危険の要素があるとしたなら。
それは罠。

こういつダンジョンには罠があつてもおかしくない。
でも私は罠を解除出来る技術なんて無い。
つまり・・・。

危険な罠を承知で進むしか無い。

「いい？私が先に進むから・・・。ゴニーノは後から来て」
そう・・・。

必然的にこういう方法しか無い。

私が罠にかかつても、ゴニーノの癒しの力で治せる。

それに賭けるしか無い。

そうでなければ、このダンジョンの奥へだなんて行けるとは思つて
ない。

身を犠牲にしてでもフュアとゴニーノは守る。

その基本的思想は変わつてない。

だからこそ――！

私は先頭に立ち、恐れる事なく前へと進む。はたして危険とは何があるのか・・・。

しばらく進むとその存在が分かった気がした。細い通路に・・・いくつものロープが見える。足下を邪魔するように張つてあり、その両端は左右の壁の向こう側へと消えている。

もちろん・・・これに触れたり切つたりしたなら、何か罠が作動する。

それぐらいは私でも分かる。

問題は・・・

どんな罠があるか。

こればかりは引いてみるしかない・・・!!

私は前へと進む・・・。

「待つて！ヨー」「様！！」

フェアが叫ぶ。

「どうしたの・・・？」

「あそこに・・・レバーが見えます

あつ・・・本当。

通路の向こう側・・・ロープの罠の先に見える。

あれも罠なのかしら・・・。

「私・・・行つて来ます！」

「フェア！！」

止めるより先に行つてしまつた。

「気をつけて！それも罠かもしれないわよ！――

フェアがゆっくりとレバーを下げる。

一体何が起ころのか……。

ゴゴゴゴゴ……。

何か音が聞こえる。

一体何……！？

周りを見渡す。

小さく揺れが起きている。

何か……。

何かが近づいてるような……気が……。

それは突然見えた！！

水だわ！！

大量の水が……まるで津波によろにやつて来た！！

それは私の背後から……。

つまり……ダンジョンの入り口の方から奥へ向かって

「なつ！！」

何かする余裕も無かつた。

気づいた時にはすでに水に飲まれていた。

「くつ……。フェア！！ユニコ！！」

私は二人を叫ぶ。

私はなんとか……浮かぶ事は出来るけど、残りの一人は……？

「私はここに！！」

フェアが飛んで来る。

良かつたまずはフェアは無事ね。

流石にフェアは飛べるので、水に飲まれる事は無いみたいだけど……。

ユニコは……？

「ユニコ……！」

私は叫ぶ。

ユニークの姿が見えない。

一体何処に・・・！？

Г ПІ | Г — — — !

水に流されながらも叫ぶ。

「二、三は泳げるのかしら。」

姿がまったく見えない。

もしかして・・・泳げないのかしら・・・。

「なんとか探す。」

た
け
と

流れが急過ぎて、身動きが出来ない。

海林が氣遣さず、奥重き出来事に
なんとかユーノを探したいのに！

「ヨーロ様！」

フニアの声が聞こえる。

突然。

空中は放り出された

水が突然切れ

たが突然やむ一まことに

どうなつたの…?

かなりやばい！！

結構高い所まで浮き上がっていたみたい。

下がかなり遠い。

「ヨーロ様！！」

フェアが私を掴む。
だけど・・・。

フェアの力じゃあ私を浮かすなんて出来る訳がない。

それどころか・・・下へ落下するスピードを緩める事すら出来ない。

くっ・・・・！

ぶつかる！！

私はなんとか背中から落ちるよう立てる。

「くあう！！」

うう・・・・。

かなりの衝撃・・・・。

血が流れる・・・・。

「ヨーロ様・・・・」

フェアがやつて来る。

うう・・・・。

ヨーロは・・・・？

ヨーロの姿が見えない・・・・。

治してもらわないと・・・これは結構危ない・・・・。

骨も折れてるし・・・、体を動かす事すら出来ない。

「ヨーロ様・・・・ヨーロ様！！」

フェアが体を揺らす。

「すいません！！私が・・・私のせいです！」

「いいのよ・・・。フェアがいなければ私はここまで来れなかつた
んだもの」

私はフェアを責める事はしなかった。
運が悪かつたのよ。

そう。

それだけ。

だから別にフェアが悪い訳では無い。

ただ・・・唯一の心残りと言えば・・・。

ユニーク。

ユニークの姿が見えない。

まだあの水の中なんだろうか・・・。

フェアだけじゃなくて、ユニークも無事の姿を見たかった・・・。
ゆっくりと目が閉まる。

力が抜けていく・・・。

「ヨーク様！－駄目！－目を閉じたら・・・－！」

死ぬ時つて・・・意外とこうこう時なんだろう。

割とあつけなく。

大冒険の果てに・・・という訳では無く、あっさりと死んじゃうものなのね。

「ヨーク様！－！」

第6章 9話

「・・・・・」

「・・・・・？」

「・・・・・様！」

「あれ・・・・・？」

なんか・・・・・声が聞こえる・・・・・。

とてもよく聞いてる声。

天使や鬼の声なんかじゃない。

なんだろ・・・・・。

「ヨーロ様！－！」

はっ！－！

その叫び声で起きあがる。

「良かつた・・・・・生きていきましたあ・・・・・」

わんわん泣きながらフェアが抱きついて来る。

・・・・・あれ？

私のすぐ側にはユニコもいる。

ユニコがいる・・・・・。

「ユニコ！あなた・・・・・」

「大丈夫でしたか？遅くなつてすいません・・・・・」

「いいのよ・・・・・。ユニコが無事なら」

そう・・・・・。

私はてつきり水に溺れてしまつたと思つていたから。
どうやつて助かつたのとか、そんな事はどうでもいい。
だつて・・・・・無事に生きているんですけどもの。

「それでも・・・・あと少しでも遅かつたら・・・・・ヨーロ様は・・・・・」

私は首を横に振る。

「私はいいの。例え私が死ぬ事があつたとしても・・・・・一人が無事

ならそれで

私は生きているという実感よりも、ユニークが無事で良かつたといつ
思いの方が上だった。

ゆっくりと立ち上がる。

あれ？

そこで始めて気づいた。

そこに宝箱が置いてある事に。

台座においてあり、何やら特別な雰囲気がする。

何だろ・・・あれ・・・。

私はそれにゆっくりと近づく。

二人は見守る。

宝箱を開ける。

そこには・・・。

小さな指輪があつた。

まるで飾り気のない、ただの指輪。

指輪の大きさに合わせたような小さい宝石が一つのみ。

その宝石も・・・ダイヤモンドと比べるまでもなく、それほど綺麗
な輝きでは無い。

なんだらう・・・?

とりあえず・・・。

これを持って帰ろう。

第6章 10話

「それにしても・・・」

私はヨーロに顔を向ける。

「よく無事だつたわね」

そう。

全然姿が見えなかつたもの。
てつり溺れたのかと思つたわ。

「すいません。だいぶヨーロ様から後ろでしたが、きちんと泳いで
いました」

見えない所まで離れてたのね。

でも・・・。

無事でなにより。

「あとは・・・ヨーロ様の所に来るまでに、水の勢いが弱つてい
たので・・・なんとか無事に着地出来ました」

私の時はもの凄い勢いだつたのに・・・。

知らないうちに、とんでもない事が起きてたのね。

さてと・・・。

私はドラゴンの所へと戻つて来た。

「おお。無事だつたか？」

「一時期死にそうだつたけどね」

本当。

ヨーロの治療が遅かつたら危なかつたわ。

「それで・・・これ何なの？」

私はダンジョンで見つけた指輪を見せる。

このドラゴンが付けるには小さすぎるような氣もするけど・・・。

「そりか・・・やはり触る事が出来るか・・・」

・・・?

触る事が出来る・・・?

「どういう意味・・・？」

「それはアーティファクトでな。限られた者でないと触る事も出来ないのだ」

え・・・！？

アーティファクト？

「そうだ、それはその昔・・・神が作った道具。もの凄い力が込められているが、道具に選ばれた者でないと逆に呪いがかかってしまう」

・・・なんか、とんでもない品物ね。

単なる安物の指輪にしか見えないけど・・・。

「はめてみなさい」

私は恐る恐る指にはめてみる。

・・・まるで私のために作られたかのように、ピッタリとはまった。確かに指輪つて・・・その人の指の太さに合わせて作らないといけないはず。

どういう事・・・？

それじゃ・・・本当にこれ・・・。

「それはきっと、これから旅に役に立つだろ？」

「ちょっと・・・待つて！どうやって使うの？」

そう。

使い方なんてさっぱり分からぬ。

「残念ながら・・・俺にも分からない。何せそれは選ばれた者にしか使えない。俺がそれを使つた所は見た事無いんで見当もつかないそんな・・・。

「だが・・・お前なら必ずそれを使いこなせるはずだ。何せそれはお前専用の道具なんだからな」

私専用の・・・。

ここが”巨人のてのひら”なのね。

緩やかな坂道を延々と登り、その高さは10メートル近くはあるだろうか。

結構高いわね。

さてと・・・。

さつさと次に行かない、またとんでもない目に合ひそう・・・。
この道のりの困難さを、今更思い知るはめになるなんて・・・。
でも今は”巨人のてのひら”。

ここまで来れば最終目的地も近い。

あとは”巨人の口”を見つけないと・・・。

「どこにあるの?」

そう。

何処にも次の目的地が見えない。

「ここからでは見えないんです。もっと先の方へと行かないと
その先とは・・・。

かなり遠くに4つの谷がかろうじて見える。
・・・本当にてのひらの上に乗つてる見たい。

今の所、敵の姿は見えないわよね・・・。
なかなか油断の出来ない所だから。

私達はその先の方へと進む。

・・・よし。

今の所は順調。

このまま行けば今回は楽に行けそうね。

「ゴーゴ様! !

フェアが叫ぶ。

・・・今気づいた。

とんでもない連中に囲まれていた事を。

これは・・・。

「これは//ミックです！！」

体は機械で出来ていて蜘蛛のように8本の脚がある。色々大きさはまちまちだけど。

大きさは大きいのでも1・5メートルぐらいにのもの。しかも・・・。

1体2体なんて数えられる数じゃない。無数にある。

「なぜ・・・//ミック達がここに・・・!?彼らは虫箱に住んでいるのに！！」

それは私が知りたいぐらいよ。

しかも、こいつらは私達を狙ってるみたい。

「……どうします？ 三一郎様……」
いくらなんでも数が多いさ。

「無理矢理突破するしか無いわー！」
いちいち相手する力も無いし。
ここは突破して逃げるに限るわ。
私はユーロの背に乗る。

「……あっ！ あれ……」

フェアがこれから突破しようとした先を見て驚いた。

……私もそれを見て啞然となつた。
なにせ……。

そこにはあまりにも巨大なミミックの姿があつたからだ。

「これは……。ミミックは大きいので1・5メートルぐらいしか
ないはずです……！」
なのに……。

私の目の前にあるのは6～7メートルはあるつかという巨体だった。
しかも……。

その巨大なミミックのお腹から、またいくつものミミックが生まれ
てくるらしく、どんどん落ちて来る。

「なつ……。これは……。」

こんなのが目の前にいるなんて……。

「一旦……退却！ ！」

引き返すのが利口よ。

だけど……。

ミミック達は追い掛けて来る。

かなり速い！！

まずい！！

どうすればいいの……。

「三一様……」

はつ……

それはかなり絶体絶命な状況だった。

ミミック達とは逆の方向にはこっちも機械の魔物。四角い形の体に4つの車輪がついている。

その体にはとげやら刃物やら物騒な物がついている。

「これは……ジャキヤーンです！これもダンジョンの奥で出てくるようなものなのに！」

しかも……。

それが無数。

そう……いつも無数に囮まれている。

前門のミミック後門のジャキヤーンとなってしまった。
そして……。

そのジャキヤーンもいつもに向かって動き出した。
どうしよう……。

逃げ道がどこにも無い……！

どつひにもいけない。

前後左右敵だらけ。

突破出来るほどの隙間も無い。

びっしりと埋まっている。

「くつ・・・」

これまで何度も決めた覚悟を私は感じた。
ミミックとジャキヤーンが迫って来るーー

「・・・? パー「様!」

フェアが叫ぶ。

これは・・・?

う。

・・・どつこつ事?

呆然と見守る。

まるで私達なんていいかのように、争いが起きている。

私はびくりと動く。

すると!

ミミックとジャキヤーンが私の方を向く。

え・・・?

まさか・・・。

そのまま止まる。

すると再びミミック達とジャキヤーン達が争いつ。もしかして・・・。

ここから・・・。

「パー「様・・・?」

フェアが心配してのぞき込む。

フェアは空を飛んでいるせいか、ここからにも反応していないみたい。

つまり・・・。

こいつらは動く物に反応しているに過ぎないんだわ。

しかも低い位置で動く物を。

さっきは私が動いていたから、それに反応して追い掛けていたんだわ。

だけど今は微動だにしていい。

このままずっと止まつていれば・・・。

「・・・!! ヲーハ様!! 巨大な///シクがー!!」

あつ・・・!!

そうだわ。

これがあつたんだわ。

どうしよう・・・。

どんびん迫つてくる。

当然・・・。

この巨大な///シクも動きに反応しているんだわ。

だけど・・・。

このままジャキヤーン達に攻撃したとしても・・・。

巻き添えを食ひ可能性が高い。

なにせ・・・。

まっすぐこっちに向かつて来ている。

これはかなりますい。

かと言つて今動いてもやられるし・・・。

来る・・・。

来る！－！

どうじよつ・・・。

とうあえず・・・ギリギリまでは待とつ。

ユニークもじつと待つていろ。

どうやら私の考えてる事を察してゐみたい。

ユニークなら私と一緒に死ぬぐらこの覚悟はしてゐかもしけないけど・

・・・。

巨大なユニークの脚が振り上げられる。

来る・・・！

「・・・！」

目を閉じる！

おそれく・・・かなり近くなのは間違いない！－！

何か・・・光つた気がするけど・・・なんだろ？

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・あれ？

目を開ける。

ユニーク達とジャキャーン達の動きが止まつていてる。

よく見ると・・・。

さび付いている。

・・・え？

どうこう事？

まるで・・・数百年間も放置していたかのよつた感じ。

「ユニーク様。これは一体・・・？」

私だつて分からぬ。

さつきまで動き回つていたのに。

「・・・あつ！」

心当たりが一つだけあった。

そう。

あの街で見つけた指輪。

ドラゴンがアーティファクトだと言っていた、私専用の魔法の道具。
この効果だと考えれば……。

説明はつく。

アーティファクトの力はもの凄い能力があるってドラゴンも言つて
たし。

何せ神様が作つたと言われるぐらいの物。

つまり・・・。

ミミック達とジャキヤーン達をいきにさび付かせたのは、この指
輪の力なんだわ。

「この指輪・・・凄い・・・」

「それじゃあ・・・やはりそれはアーティファクト・・・」

そう考えるしかない。

だって・・・今までにだって何度も生命の危機はあったけど・・・。
こんな事一度たりとも無かつた。

つまりフェアやコニーの力じゃない。

そうなると・・・。

この指輪の力を考えるのが当然。
なんにしても・・・。

「助かったわ・・・」

第7章 5話

さて・・・。

なんとか危機も乗り越えたし・・・。

先へと進みましよう。

「ふはーーよう寝たわ

え?

何?今の声・・・。

辺りを見渡す。

生き物の気配は無いみたいだけど・・・。

「なんや、騒がしかつたが・・・」

え!?

鉄の固まりが動いてる!?

また新たな敵!?

「フェア!これは・・・?」

「私も知らないです・・・。初めて見ます」「

なんですって?

「お?あんたらなんや。こんな所に・・・。この辺りはわいのよつな機械の生き物が住む地域やのに、珍しい事もあるもんやな

・・・・・・・・

どうも・・・裏いかかる様子では無いみたい。

「えつと・・・、実は”巨人の田”に行く為にここを通つてるだけなんですけど・・・。」

「そこへ・・・?」

「そうよ。だつて・・・この妖魔界を救いたいんだから

それにしても・・・。

この人・・・人つて言つていいのか疑問だけど・・・。
いわゆる、ロボットのような形をしている。

つまり、人間の形。

ただ、大きさが異様に小さい。

私の腰ぐらいの大きさしか無い。

・・・あと、どうでもいいけど、なんで大阪弁なのかしら。

実は個人的に凄く気になる。

「ほー。どうや? わいをボディーガードとして連れてくれへんか?」

「え! ? 正気? 危険な旅だからそのまま寝ていた方がいいわよ」

一体何を言い出すの。

「正気や。わいはその昔、戦闘用として作られたんや。すっかり機能を停止していたんやけど、なんや久しぶりに機動したんで、戦いたいんや!!」

戦闘用ロボットねえ・・・

また変わった仲間が増えたわね。
そうね・・・。

仲間になるというのなら、やはり名前が必要ね。
聞いたらMGP-101721という型式ナンバーが出て来た。
いくらなんでも、毎回そんな長いのを言えない。

・・・と言つより、よく覚えたわね私・・・。

やつぱりこには・・・。

「名前は”ロボ”よね。定番だけど」
「ロボかい。まあ、わいはなんでもええんやけども」
うーん・・・。

いい名前だと思つんだけど。

「そういうえば、昔はつて言つてたけど・・・。もしかして・・・昔

いた妖魔キラーを持つた人と戦つた事あるの？」

昔の戦闘用と言う事はありえる話。

「そいやな・・・。あれは最悪やつた。わいの得意の”核融合”が
無ければ全滅してたかもしれへんわ」
え・・・！？

「か・・・核融合！？」

な・・・なんで・・・そんな私の世界の・・・それも危険な物が！？

「ああ・・・。一応耐えられる構造やつたから助かつたんやけども・
・・、おかげで妖魔界に大きな穴は開くし、わいも機能を停止して
しまつたんや」

穴つて・・・。

アンデット達と戦つた、あの大きな穴の事がしら。

あれは大きな穴だったし、不自然なほど深かったし。

「しかし・・・ヨーコ様もその妖魔キラーを持つつて知つたら・・・
どう思うでしようか？」

フェアが小声で聞く。

確かに・・・。

その昔、妖魔界を救う為に妖魔キラーを持つ者と戦った口ボからすれば、私は天敵かもしない。

・・・・こうなると、私がまだ武器を使えない事が利点になるわね。

「・・・とにかく、私と一緒に時にはその”核融合”とやらは危険だから止めてね」

はたして私の世界と同じ核かどうかは分からぬ。

何せ常識が通用しない世界。

ただ、あの大好きな穴を作ったというのなら。

・・・とてもじゃないけど、見たくないわ。

「心配せんでも、わいは他にも武器は沢山持ってるし、一度と機能を停止したくないわい」

そう言つと、腕の部分から刃物が出て来る。

それはそれで危険だけど、助かるわ。

私は新たな仲間、ロボと共に進む。

とりあえずは一定の距離は離れている。
前を歩いて敵がいか調べてるみたい。

確かにクロウの魔力によつて理性を失つてゐるから、どこから敵が来るか分からぬ。

こうしてくれるとありがたいわ。

「あつ！ヨーロ様！」

フェアが指さす。

どうやら・・・何か表れたみたいね。
またもや敵みたいね。

見えて来たのは・・・。

巨大なローラーの上に石造りの箱みたいなのが乗つていて。
それが自動的に動いている。

「あれは・・・ジャガーノートです！！敵に回すとかなりやっかい
な相手なのに・・・」

またもや機械系のモンスターね。

え・・・！？

来る！！

もの凄いスピードで近づいて来る！！

「あれは魔法で動いているんです！！おそらく・・・クロウの魔力
かと・・・」

クロウの魔力はそんな事まで出来るのね。
私はとりあえずヨニコに飛び乗る。

あれは・・・私の動きじゃ避けきれないわ。
かなり速いスピードで迫つてくる。

「ロボ！！危ないわよ！..」

そう。

ロボはまるで動こうともしない。

彼がどんな実力なのか知らないけれど・・・。
いくらなんでもあれは速すぎるわ。

「心配あらへん」

え・・・?

自信満々に言つている。

一体・・・どうして事?

「はっ！」

ロボは右手を剣に変形させる。

そして・・・そのまま振り払った。

そして・・・。

ジャガーノートは真っ二つになっていた。

一撃で・・・!?

私はユニーから降りる。

この人・・・強い!!

これが自信の証拠なのね。

本当に戦闘用なのね。
動きが全然違う……。

「ふうー。やっぱり久しぶりに動くとちやうな~」
その昔、妖魔キラーをつた人と戦つたほど……。
右腕が元に戻る。

「ん?」

その時、ロボが違和感を感じたみたい。

「どうしたの?」

「あかん! 久しづりやつたから……。上手く戻らへん!」

あらり……。

確かに……。

何か……複雑にからみついてる感じ。
機械系はサッパリだけど……。

「いやー。これでは剣は使えへんわ」

「えつと……。それってどれくらい困る事なの?」

確かに、いきなり武器が使えないのは困るけど……。

彼は戦闘なんだから、他にも武器はありそう。

「何言うてんねん! これがわいの武器やないか。あとは”核融合”……

・・・

「だから! それは止めなさい! ……」

まいったわね……。

「他にも装備は確かにあるけど……、そのほとんどが右腕に集約
されてるんや。他の装備はたいした事あらへん……。これで戦闘
力は大幅に減つてしまつた……」「
えつと……。

それつてもしかして……。

これまで通り、苦労しながら戦わなくてはいけないって事……?

せつかく強い戦力が加わったと思つたのに・・・。

「はあ～」

思いつきりため息が出る。

やはり、そつそつ上手い話がある訳が無いって事ね。

「どうします？『一』様。彼はこれから旅を続けるのは危険だと
思いますが・・・」

確かにフェアの言つ通り。

大幅な戦力減になってしまった今。

彼はこのまま旅を続けるのは、かなり無理かもしけない。

「口ボ・・・。これからどうするの？」

それでも、私は聞く。

だつて・・・。

この中で一番力の無いのは私だから。

「こうなつて申し訳あらへんけど・・・。でもわいは戦闘用や！戦

いたいんや！」

なら・・・断る理由は無いわね。

ようやく巨人のひらの先端が見えてきた。
あそこへ行けば次の目的地が見える。

やつと・・・先が見えて来た。

それにも・・・。

また大変な仲間が増えたわね。

その昔妖魔キラーを持つた人と戦い、その決着を付けた戦闘用ロボット。

しかし、今はその戦力は大幅に減っている。
それも仕方ないとも思つてゐる。

何せ久しづりに機動したんだもんね。

前に戦つたのはだいぶ昔。

今でも現役に動いてる方が凄いくらい。
だから、戦力が落ちたからと言つて見放す事はしない。

正直言うと、それでも私よりは強い。

だつて・・・。

私はまだ武器を使えないでいる。

唯一の私の武器・・・。

それでも私は、それでいいとも思つてゐる。
何せ・・・。

その唯一の武器はとても危険な武器もある。
敵を倒すだけならまだしも・・・。

その効力は味方のフェアやユニコにも及ぶ。
それなら使えなくともいいとも思つてゐる。

私は私なりの方法で、ユニコやフェアを守れればいい。
これまでにも色んな事があつたけど・・・。
とりあえず、なんとかなつてる。
それならば・・・。

これからもなんとかする方がいいわ。

でも・・・。

私はまだ真の意味での強い覚悟・・・強い意志は無いかもしない。

妖魔界を救いたいという気持ちはあるけど・・・。

とにかくフニアとユニコを助けたいだけ。

後は・・・出会った人達のため。

まだまだ・・・強い意志という意味では無いかも知れない。

それで・・・。

本当に妖魔界を救えるのかな・・・

やつと巨人のてのひらの先へとたどり着いた。
そこに立つと……。

湖が見える。

あれは・・・?

「ヨー口様。あれが”巨人の口”です」
あれが・・・。

「・・・? 何やって?」

口ボが聞いて来る。

「あれが次の目標の”巨人の口”なのよ」

「そういや・・・。わいがいた時とはだいぶ地形が変わってるんや

な」

まあ・・・。だいぶ年数が過ぎてると思うしね。

「わいも”巨人の目”ぐらいは知つてはあるが・・・。正直、實際
に”巨人の目”を見た事は無いんや
え・・・?」

「見た事が・・・無い?」

「ああ・・・。あれはアーティファクトと言われておつて、凄い力
ちゅーのは分かつてるんやけど・・・。それが逆に怖いんや
怖い・・・?」

「ほら、わいは戦闘用ロボットやる? 魔法的な力とは相反するんや
へえー・・・。」

この妖魔界はほとんどが魔法的な事の方が多いとは思うんだけど・・
・。

この口ボの意識はちょっと違うのかしら。
だいたい・・・。

フェアの存在自体、魔法的だと思つんだけど。
うへん・・・。

「それに……あれは眞実を映しきるのも言われておる」

「映しきる……？」

「どういう……事？」

「わいも聞いた話なんやけどな……。知りたい事以上に教えてくれる……つて」

「知りたい事以上に……。

「ヨーロ様……」

フェアが心配してくる。

何か……不安になつてるみたいね。

「大丈夫よ。私はクロウの居場所を知る為にあそこに行くんだもの。

それ以上つて何があるのよ」

そう。

私の親が実は妖魔界出身とか……。

そんなどんでもない事実が出てくるとか……？

ありえないわ。

うわー・・・。

近くで見るとまた大きな湖ね。
向こう岸がまつたく見えない。

「あの・・・。これ渡らないと・・・黙田?」

私は念のために聞いて見る。

「渡らないと無理です。両端から歩いて行こうとしても、やがて急な崖があるので・・・。私やヨーロ様達はともかくヨーロは無理です」

そうなると・・・端を歩いて行こうって提案は無理ね。

「歩くのが無理なら・・・泳ぐって行つても距離がありすぎるわね
向こう岸が見えるならまだしも・・・。

水平線が見えるぐらい遠くにあるってのは諦めた方が早い。

「泳ぐのも止めた方がいいです。この湖にも色々住んでると思いますから

すから」「うつ・・・。

それは・・・泳いでる間にやられる可能性大ね。

そうなると・・・。

「イカダを作るしか無いわね」

フェアやユニコが船を作れるとは思えないし・・・。

第一私達が全員乗れるほどとなると一人とも無理。

「口ボは船つて作れる?」

「いや・・・。戦闘技術はたっぷりあるんやけど・・・やつこいつのは無理やな

船を作るつてなると、それこそ大工ぐらいう技術を学ばないと無理だものね。

そこまで期待はしてなかつたけど。

「それじゃあ、丸太をいくつか持つて来ないと

そこではつと気づいた。

確かに・・・いくつか木々は立っているけど。

そう都合よく丸太って・・・あるのかしら・・・。

しかも、全員が乗れるような大きさなんて。

「そういう事なら任せんかい」

口ボガそう言う。

・・・?

どういう事かしら?

見ると大きな木に近づいて行く。

どうするつもり?

「いくで〜！」

なつ・・・！

左腕から、ノコギリみたいのを出して來た。

あんなのまであるなんて・・・。

「これは戦闘に使うにはちょっと大変やけど・・・

確かに・・・。

でも・・・。

彼がいてくれて助かつたわ。

あとはツタを使って角材を縛つて・・・。

これで完成！

口ボも手伝ってくれたおかげで、イカダはあつと言つ間に出来上がつた。

オールも作つたし・・・。

いよいよ湖を横断する時が来た。
イカダを湖に浮かべて・・・。

私達はそれに乗る。

さすがに・・・全員が乗つても余裕ね。
これも口ボのおかげだわ。

いなかつたらどうやつて渡るか、かなり悩んでいた所よ。
なにせ、目の前の池はかなり大きいし。

私と口ボが共同でイカダを進める。

ユニコはイカダの中央で座つている。

ユニコをイカダを進めさせる事は出来ないし。
フェアは空中に浮いて辺りを見渡している。

もしこんな所を襲われたら・・・。

身動き出来る範囲は限られている。

しかも・・・。

このイカダそのものが壊されたら終わりだわ。
かなり危険な事なのは分かつてる。

でも・・・。

これ以外に方法が無い。

こればかりは口ボでも、どうしようも無いしね。

私達はゆっくりと進む。

湖はかなり静かね。

順調に行くかしら・・・。

・・・ん?

何か・・・。

オールが引っかかるつてる感じのよつた・・・。

「あや！！」

一気に引あやられた！・・・

私はそのまま湖の中に引き込まれる。

慌ててオールを離す。

・・・なつ！・・・

私は湖の中でその姿を見た。

巨大なタコの姿。

それが・・・田の前に・・・。

上がらなきや！・・・

必死に泳ぐ。

・・・あや！・・・

足が・・・取られた！・・・

まづい・・・！・・・

そのまま・・・タコに引きずりられて行く。
まづい・・・まづいわよ！・・・

第8章 3話

くつ・・・。

身動きが全く取れない。

そのまま・・・引きずられていぐ。

タコの口が開いている。

そのまま・・・食べようとしているみたい。

まずい・・・。

なんとかしないと。

しかし、足が絡まつていて脱出出来ない。

水の中だから、思つよつに動けないつてのもあるけど。

バシュ！

・・・？

何か・・・音がした。

あれ？

そこには・・・ロボがいた！

例のノコギリで必死になつて、タコの足を切つてゐる。

そのまま見ていたいけど。

あいにくと、私の息も限界に近づいてゐる。
ごめんなさい。

ロボを置いて、私は泳ぐ。

私はそのまま水上へと上がる。

「・・・ふはっ！！」

やつと息が出来た・・・。

しばらく待つ。

ロボは・・・？

あれ？

まさか・・・。

まだ攻撃してゐるのー？

「ミー、口様！！無事でしたか？」

フェアがやつて来る。

「でもロボが……」

そう……。

いくらなんでも水の中じゃ動きが取りづらい。

「もう一度潜つて見る……」

私は息を大きく吸つて、自ら潜る。

ロボがタコと戦つてる……

いくつも足が襲いかかつてゐ……

だけど……。

それには動じず、一生懸命足にノックギリを入れてゐる。

いくらなんでも無茶過ぎるわ。

私がなんとかしてあげたいけど。

でも武器が無い。

しかも今回は水中。

今までのようにはいかない。

ついにタコの足がロボの体に巻き付く……

危ない！！

助けたい！

だけど……。

「へへ……。ここが水の中ちゃーのがあなたの運のシキヤ」

そう言つと……。

目から電撃が放たれた！！

ええ！？

あんなのまであるの！？

しかもその電撃は。

こつちに感電する事も無かつた。

見た目は電撃つぽかつたけど。

レーザーか何かのかしら？

私達はなんとかイカダに戻つて來た。

ふう・・・。

ただ・・・。

ここで問題が發生。

オールが一本無くなつていたのだった。

たぶん・・・あの大ダコに壊されたんだと思つ。

まだ湖の半分も過ぎてないつていうのに・・・。

前途多難ね・・・。

どうしよう。

あれ・・・?

口ボが上がつて来ない・・・?

あつ！まさか・・・。

私はまた再び潜る！！

やつぱり。

口ボはさつさの位置からさりとて下へと沈んでいる。

間に合わせてみせる！！

「！？何してんねん！わいには上がる事はできへん。さつさと先に進

むんや。右腕の使えないわいなんて、無用の物なんやからーー！」

そんな事無い！！

絶対・・・助けて見せる！！

さらに私は下へと泳ぐ

よし！

追いついた！！

だけど・・・。

ここから上がる方が困難かも・・・。

だけど！—

左腕で口ボを抱えながら、必死に上がる！
くつ・・・。

さすがに・・・浮力が無いときついわね・・・。

「もうええねん。そのうち呼吸が無くなるでー!?」
嫌よ！

ここで見捨てるぐらいなら・・・。

私は・・・一緒に沈み道を選ぶ！
だから。

私は口ボを助ける。

仲間を見捨てるなんて事は絶対にしたくない！
さすがに・・・。

苦しくなつて来た・・・。

でも・・・。

水面まであと少し！
・・・・・。

「ふはっ！
「ふはっ！
ふう・・・。

なんとか・・・助け出したわ・・・。

「あ・・・あ・・・あ・・・」

間一髪つて所かしら。

でも・・・。

助かつて良かつた。

やつと湖の半分ぐらいまで進んだかな・・・。
向こう側がなんとか見える。

口ボがゆっくりとイカダを進める。

本当は思いつきり進めてもいいらしいけど・・・。
でも私はともかくフェアやユニークの事を考えると・・・。
あまり無茶は出来ない。

「なあ・・・。聞いてええか?」

口ボが口を開く。

「なあに?」

「さっき・・・。なんでわいを助けたんや?見捨てても仕方ない状況やつたのに・・・」

その答えなら、もう分かり切つている。
「仲間を見捨てるぐらいなら、死んだ方がマシだわ」
キツパリと言つた。

「なんでや!?死んだらそれで終わりやで!!」

「口ボ・・・。口ボには分からぬと思ひますけど・・・、これがヨーロ様なんです。だから・・・私たちも一緒に旅も出来るんですけどアが私の代わりに答える。

「確かに・・・俺が敵の罠にかかつた時も、命がけで助けてくれたし。だからこそ俺達もヨーロ様の力になりたい」
ユニーク・・・。

「ありがとう・・・二人とも」

私は改めて感謝をした。

正直、この一人がいなかつたら私はここまで来れなかつたから。
こつしてみると・・・。

お姉ちゃんが旅行に行くつて時に、一緒に行かなくて正解だつたかも・・・。

本当は一緒に行くのが嫌だった。

それはこの性分のせい。

どうにも、子供の頃から困ってる人をほっとけない・・・。

そのせいで色々と困難な目に合つてるんだけど。

だから行きたく無かつた。

もしあ姉ちゃんと一緒に行けば、とんでもない事になると思つていたから。

この妖魔界に来てその事を十分思い知つてゐるけど・・・。

でも今は来た事を後悔はしてないわ。

フェアやユニコという大切な仲間にも会えたし。

そして、ロボという仲間にも会えた。

それが唯一の救いかもしれない。

・・・」ひして見てみると。

私も成長してゐるかもしだれない。

それは・・・今は冒険をしている事を後悔していない事。

以前の私だったら、冒険そのものが嫌だつたのに。

今はフェアヒューロとロボの三人で、何処までも冒険したいと思つてゐる。

この三人のために・・・。

「・・・！」ミー「様！！」

え・・・？

突然、フェアの叫び声で思考を中断させる。

水中から、何かが浮かび上がって来た！

「な・・・何！？」

水上に上がつて来たのは・・・。

ドラゴンだつた！！

そ・・・そんな・・・。

「シー・ドラゴン！－」

フェアが叫ぶ。

ドラゴンって・・・。

また強そう。

しかも・・・。

丑つきからして、敵対的。

・・・はつきり言つてドラゴンなんて相手に出来るほどの強さじやないのよ・・・」ひちは。

まずい！！

逃げようにも、ひちはイカダに乗つて逃げれないし・・・。
戦うにも分が悪すぎる・・・。

「どうしようつ・・・！？」

こんな所じや選択肢が無さ過ぎる………

「わいに任せてや」

え・・・?

ロボの皿つきが……

全然違つ。

どういづ事……?

「わいは戦闘用や。ドリフコンなんて皿やないでーーー。」

そういうと……。

右手が変形した。

そして剣の形になる。

「え・・・!?

確か・・・。

右手は使えないはずじや……?

「はあ……」

ロボはドリフコンへと斬りかかる。

あいつという間にドリフコンは倒れたけど……。
なんで……?

ようやく向こう岸へとたどり着いた。

さすがにロボがいてくれたおかげで、かなり助かつたわ。
そして・・・。

次の目標でもある”巨人の鼻”が見える。

高い山。

まるで鼻のようこ、一っぽつこじとある。
さて・・・。

行かなくちゃ。

「待て」

それを制したのはロボだった。

「・・・何？」

何かあつたのかしら・・・。

「なんで・・・右腕が使える事に何も言わないんや・・・？」

確かに疑問には思つけど。

「別に。私たちは仲間でしょ？」

そう。

何か理由があつての事なんでしょう。

それを無理に聞く事はしない。

「待て。どうしても・・・これだけは言わんとあかんのや」

ロボ・・・。

「実は・・・。あんたが妖魔キラーの持ち主やつて事は、最初に会つた頃から知つとつた」

え！？

あの頃から・・・！」

なら・・・なんで・・・！？

「わいと戦つた奴はな・・・。それはそれは極悪な奴で・・・。妖魔キラーで妖魔界の奴らを消すのを何とも思つて無い奴やつた。わ

い

いは正確には妖魔界の住人やない。また違う異世界から呼ばれたんや。そいつと戦うために「

まさか・・・。

口ボも・・・異世界から来たなんて。

「せやから、わいには妖魔キラーは通じなかつた。それでもそいつは十分強かつた。だから”核融合”を使つてしまつたんや。わいの・

・・最後の奥の手を」

なるほど・・・。

「でも・・・次に出会つた奴は・・・なんと側に妖魔界の住人がおつた。しかも、信頼しきつて・・・。それどころかこの妖魔界を救うつて言うどるやないか。でも、わいはすぐには信じる事が出来へんかつた」

それは・・・そうかもしれない。

その・・・前の人悪行が酷いのなら。

「せやから・・・わいはあんたを試したんや。あんたは何処まで真剣にこの世界を救おうとしてるのか。何処まで仲間の為に頑張るのか・・・。今から言つけど・・・”巨人の口”で落ちたのはわざとや。浮かぶ事も簡単に出来た」

口ボ・・・。

「でも・・・あんたは本氣なんやな・・・。本氣で仲間を救おうとした」

「当たり前じやない。私は・・・みんながいなかつたらこ今まで来れなかつたもの」

「あんたなら・・・あんたなら、妖魔キラーを持つてもええと思つ。妖魔キラーを持つ者を倒す宿命を持つたわいが言つのも変やけどなううん・・・。

「全然変じやないわよ、口ボ」

第8章 8話

・・・え？

何やら・・・湖の方から聞こえて来るような・・・。

「な・・・何！？」

湖の中から・・・。

ワニの頭をしたヒューマノイドが表れた。

・・・なつ・・・何なの！？

「挟み撃ちにしようとしていたのにな・・・。」
「はそつちの作戦か？」

え・・・？

どういう事・・・？

「なあに。さつき沈んだ時に何がが見えたんで、サーチしてたんや」

「え・・・？え？え？え？え？？」

「俺は四天王の一人、ワニゲーター。最後の四天王と二人で襲う予定だつたのに・・・。あまりにも移動しないのでクロウ様から命令が下つてしまつたわ・・・」

「ちょっと待つて・・・。」

「それじゃあ・・・突然真実を言い出したのは・・・」

「ああ・・・。あれは本気や。本当のわいの気持ち。言つておかな
いとこれから先、あんた達の仲間やなんて言えへんしな。しかし・・
・痺れを切らしたのは、正直こつちの予想外やつた。」

・・・なんて人・・・。

分かつていたなんて・・・。

でも・・・。

今の台詞通り、確かに予想外かも・・・。

「さあて！まずはヨーロはんを騙した罪滅ぼしに、あんたを退治と
いきますか」

「ちょっと待つて！いくらロボが戦闘用だからと言つても、四天王といきなり戦うなんて……」

「ここのは私達と協力して……。

「ヨーロはん達はそこで見ておくんや。なあに、わいは間違つても負けるなんて事はあらへんで？」

「きさま・・・。たいした余裕だな」

うつ・・・。

確かに・・・。

もの凄い余裕・・・。

そりやあ、ロボが強いのは認めるけど・・・。

四天王もかなり強い・・・。

これまで、最初のラカスタは強力な剣のおかげ。

二人目のリッチも、弱点であるヨーロの聖なる力のおかげだった。つまり・・・。

弱点を付いてなんとか・・・。

それなのに・・・。

大丈夫なの？

第8章 9話

湖から出てきたワニゲーター。

口ボのおかげで挟み撃ちにならずに済んだけど……。

「この俺を引きずり出した事を後悔させてやるー。」

くつ・・・。

一体何を・・・。

「くらえ！！」

手を上げる。

え・・・？

何？

湖の水が・・・盛り上がってるー？

そして・・・。

まるでツタのように細く長い水がじゅうじゅう襲いかかって来るーー！

そんな・・・。

「きやーー！」

なんとか・・・避けた。

けど・・・。

凄い威力・・・。

地面がえぐられている。

もし直撃を受けた事を考へると、ぞつとするべりー。

なんとか避けられたけど。

それは口ボのおかげ。

つまり、私を狙っていないから。

口ボに感謝をしなきや・・・。

はつ・・・ー！

その口ボはー？

「え・・・？」

なんと。

いくつものえぐられた後があるけど、動いた形跡が見えない。

ワニゲーターが出てきた時から、ほとんど動いて無いんじゃない！？

それか、動いてはいるんだけど見えていないだけ！？

「貴様・・・！」

当然、ワニゲーターはロボをにらんでいる。

「こんな程度かいな？」

「おのれ・・・！」

すると・・・。

無数の水が襲いかかってくる！！

あれは・・・避けきれないわよ？

どうするの・・・？

「無駄や！！」

手から何か電気がほとばしる！！

「てえい！！」

そのまま地面にたたきつける！
すると！…

地面から土が吹き上がる！！
なつ・・・。

あんな方法で防御するなんて・・・。

正直、次元の違う戦いが行われている。
なるほど。

以前の妖魔キラーをもつた人と戦った事があるといつのも分かる。
これだけの力があつたなんて。

四天王の一人と対峙している口ボ。

私もこれまで四天王の二人と戦つてからその強さは分かつていて、このワニゲーターも口ボがいないと、どう戦つていいのか分かんないぐらい……。

でも……。

口ボは極めて涼しい顔で立っている。

たぶん……実力で勝つてしまつと思う。

それぐらい……口ボは強いと思う。

「こいつ……！」

ワニゲーターがさらに力を込める。

すると……！

湖の水が大きな津波となつて襲いかかつて来る！！！

なっ・・・！

これはいくらなんでも……。

「もういっちょいで……『土の壁』……」

え・・・！？

今度はさらに強い力でたたきつける……

もの凄く高い壁が出来上がつた！！！

ぶつかり合う！！！

「す・・・凄い！！」

なんか……レベルの違う戦いを見せられてる感じ。思わず呆然とする。

それはフェアとゴニコも同じで、啞然とした表情で見ている。

ハツキリ言つて、私じゃあどうしようもないレベルだわ。

「こいつ……！」

ワニゲーターが三つ叉の槍を取り出す。

「はっ……」

また凄いスピード！！

だけど！

ロボはほんの少し体を動かしただけでそれを避けた。
思わず目が点になる。

なんで・・・あのスピードをあんな動きで避けられるの？

「さて、そろそろ・・・」

攻撃する！！

・・・えつ！？

気がついた時には、すでに剣が抜かれていた。
出した瞬間が見えなかつたわよ・・・。

「しまいや

そうロボが言うと・・・。

ワニゲーターの体は真つ一つになつていた。
凄い・・・。

次の目標はここ、巨人の鼻。

まるで人の鼻のように高くそびえる山が一つ。
ここを登れば……。

いよいよ最終目的地である巨人の目が見える。
長く苦しい旅だったけど……。

ようやく最後が見えて来た。

だけど……。

ここに来てかなりの困難を経たりにしていた。

それは……。

この山は……。

雪山だつて事。

まだふもとはいいけど……。

頂上辺りは思いつきり白い雪が見える。

この山はどうも人間界の影響があるらしく。

年中雪で覆われているという。

これまで極端に暑くなったり寒かつたりといつ事は無かつたから良かつたのに……。

この服装で雪山を登れつていうのもかなり無謀なんだけど……。
「ためらつてるとか?」

口ボが聞く

「……そりやあためらつわよ。頂上が思いつきり白いじゃない……。
・。かなり寒いのは確実よ」

喜々として登るっては無理だわ。

「かと言つて、登らないという訳にもいかんや。ここに来て引き返す訳にもいかへんし」

それは言わぬくても分かつてゐる。

この妖魔界を救う為にここまで困難な道を来たのだから。

・・・でも正直あれはためらひわよ・・・。

何せこいつは何の防寒着も無い。

強い敵が待つてゐるというなり、まだ覚悟は出来るんだけど。
暑さ寒さといふのはね・・・。

しかもわざと湖の中に飛び込んで、それほど時間は経っていない。
つまり、服は濡れたまま。

このまま登れば、風邪を引くのは間違いなさやつ。
仕方ない。

「行くわよー。わざとこんな山越しましょ」
覚悟を決めるしか無いわ。

第9章 2話

私達はなんとか山を登る。

ハツキリ言えばかなり気が進まない。

何せなんの装備も無しに雪山を登れといつ方が無茶な話。

だけど・・・。

そんな事を言つたら、この妖魔界に来てから今まででもかなり無茶な事はしていたけど・・・。

はあ・・・。

仕方ない・・・。

私はゆっくりと登る。

この山は結構傾斜が厳しいので、あまり早くは登れない。

しかもこっちにはユニコがいるので、一直線に登るといつのは無理。斜め上に登る感じで登るしか無い。

ここは・・・かなりきついわね・・・。

それに・・・。

だんだん寒くなつて來たわ。

雪の降つてる範囲に近づいて來たのね。

・・・え?

突然突風が吹き荒れる!-

「きや!-」

フェアが私の体にぶつかる。

慌てて手で受け止める。

何・・・?

辺りを見渡す。

「・・・なつ!-」

それは突然だつた。

一気に辺りが雪で覆われる。

何・・・!?

吹雪が吹き荒れる！！

「寒つ！つてか・・・何で急に？」

そう。

さつきまで全然その気配も無かったのに・・・。

「おそらく雪山地帯に入つたんですよ」

フェアがそういうけど・・・。

まさか・・・。

「これはまた・・・」

ロボも驚いている。

そりやあそうよね。

ここでは私達の常識がまるで通用しない。

おそらく・・・。

これもここでは常識なんだわ。

まるで線を引いてるかのように、突然吹雪が吹き荒れる地帯になる。
さつきまで地面が見えていたのに、一歩入つただけで辺りが雪で覆
われている。

これが妖魔界なのよね・・・。

第9章 3話

かなり寒い……。
そりやあそうよね。

周りは雪に覆われて……、もの凄い吹雪が吹き荒れている。
そのうえこつちは普段着のまま。
寒くないって言うのは無理に決まってる感じ。
体が自然と震える。

凍え死にしそうなほど。

でも、こんな所で死ぬ訳にはいかない。
なんとか、頑張らなきや。
しかし、なかなか先に進めない。
うう……。
まずい……。

足が動かなくなつて来た……。

「大丈夫ですか？ヨーロ様……」
うづ……。

大丈夫とは言えない。

いつもは言えるんだけど……。
さすがに……寒すぎる……。

私だつて、我慢出来る事と出来ない事もあるのよ。

「ん？なんや？洞窟があるので？」
・・・え？

どうもロボが見つけたみたい。

「とりあえず……入つてみましょ」
このまま外を歩くのは無理だわ……。
うん。

そうしょ。づ。

なんとか洞窟の中に入る。

「ここは・・・」

かなり奥が深い。

先が見えない・・・。

このまま入つても大丈夫なのかしら・・・。

不安げに見守るのはフェア、もヨニマも同じ。
だけど・・・。

このまま外に戻るつてのは無理だし・・・。
この中がどうなつてののか知らないけど、ここを進む方がマシかも
しない。

私は意を決して中を進む。

当然・・・中へ進めば進むほど暗くなつて来る。

どうしよう・・・。

「わいに任せんかい」

えつ・・・?

口ボの目が光る!

・・・本当・・・便利だわ。

これで先も見えるわ。

奥へと進む。

そこには・・・。

また驚く光景があつた。

巨大な空洞が見え・・・。

そこは赤く光つてるような感じ。

その中に入つて見るとその正体が分かつた。

マグマだ。

巨大な穴があり、その中にマグマが流れてるのが見える。

うわ・・・。

さっきまで凍えるほど寒かったのに・・・。

ここは汗が止まらないほど暑い・・・。

そりやあそうよね。

こんな身近にマグマがあるんだもの。

・・・ 気温差ざれぐらーなのかしら・・・。

でも・・・。

寒いぐらいならまだここの方がマシだわ。

私達は穴を迂回してせりに先に進む。

「あれ・・・？」

私はさらに先にある物で驚いた。

そこには・・・。

いくつもの家や建物が見える。

ここに・・・誰か住んでいるの？

小さな街がそこにはある。

「こりや凄いな・・・。洞窟に街を作ってるなんて・・・」

ロボも驚く。

そりやあそうよね。

でもある意味安全かも・・・。

何せ外はあの吹雪。

進んでここに来るなんて、相当の覚悟が無いと無理だもの。
一体誰がここにいるのかしら・・・。

私はゆっくりと進む。

すると・・・。

そこに住んでる人達が私達に気づく。
こっちを見ている。

あれは・・・？

なんか・・・人間みたいだけど・・・。
あれもヒューマノイドの一種なのね。

「あれ・・・？あれって・・・エルフですよね？」

フェアが言う。

「エルフ・・・？」

「そうですよ。あれはエルフ。この妖魔界の中でも魔法の力が強い
人達です」

「えー・・・。

第9章 5話

「ここは何処なの？」

私はその辺りにいるエルフに声をかける。

「ここはノースの街です」

・・・。

鼻は確かにNoseって言つたんだ……。
まさかね・・・。

どうやらここは昔からある街のようね。
歴史が感じられる雰囲気だわ。

「ところで・・・ここって泊まる所つてあるのかしら？」

「ええ。あそこの辺りはそうですが

ここには他の旅人も来るのかしら。

泊まる所が密集してるなんて、ある意味便利だわ。
私はみんなの所へ一旦戻る。

「休める所が分かつたから、そこへ行きましょう」「
いい加減、この服も綺麗に洗濯したい所だし。
ここで休める所があるのは嬉しい事だわ。
私達は宿泊施設のある所へと入つて行く。
そこの一室へ・・・。

「わあ・・・。綺麗な部屋
結構豪華な宿屋って感じね。

こういう時、お金がいらないって便利ね。

それにも関わらず、どういう基準で泊める部屋を決めてるのかしら。
それとも、ここはみんなこんな感じ？

私達の世界でも、なかなかこれぐらいの所には泊まれないわよ。

「さて・・・わいはここでしばらく休ませてもううで
え？」

「ほら。ワーゲーターで久しぶりに力を使い切ったんや。いくら戦

闘用でも休憩は必要やで「

あつ・・・。

そういうばそうね。

まだ旅は続くんだし。

なにより・・・まだ四天王は一人残つてゐる。

クロウは私が戦つ運命だから、そこはロボには遠慮してもらひにしても。

まだまだロボの力は必要になる。

それなら、ここで休ませても構わないわね。

この街は安全そうだし・・・。

「さて！それじゃあ早速お風呂入つて服を洗濯しなきや！」

「・・・その間、私は街を探索して来ますね」

あら・・・。

フェアが珍しいのね。

さて・・・。

このノースの街を歩き回るうかな・・・。

こうして一人でのんびり飛び回るのは久しぶり。

ヨーロ様と冒険するようになつてからは無かつた事。

別に私はそれを後悔してるつもりは無い。

あの時・・・。

ゴブリンから私を助けてくれた時からずっと一緒に冒険して来た。ハツキリ言つて、私はこの妖魔界の人達の事を誰よりも知つてゐてだけしか取り柄が無い。

それなのに・・・。

ヨーロ様はそれでも、快く思つてくれる。

だからこそ・・・。

私でも何かお役に立てればと・・・色々お手伝いもしてきた。そして・・・。

今はこの街の探索。

初めて見る街であり、エルフ達の生活も見て回りたかった。それはなんといつても・・・。

この街の不思議。

ここは何故平和なのかしら・・・?

ほら、クロウの魔力によつて廃墟となつてもおかしく無いのに・・・。

エルフの魔力はクロウの力をも退けるのかしら・・・。

ドラゴンみたいな、絶対的な魔力があるつて感じには見えないけど。見る限りここはかなり平和で呑気な所・・・。和やかに暮らしている感じが見えるわ。

そういえば・・・。

私達もクロウの力に影響されてない。

これもヨーロ様の能力なのかしら？

あれ・・・?

何かが近づいて来ている。

なに・・・?

あれは・・・。

狼だわ！

それが1匹。

走つて来ている。

その狼がこっちに気づく。

知つてる人なのかな？

こっちに近づいて来る。

あれ・・・?

彼女は確か・・・。

フェアが連れて来たのは、思わぬ友人だつた。
それは・・・。

あのワー・ウルフのボスである彼女だつた。

「久しぶり！…どうしたの？」

そう・・・。

彼女たちは残つたワー・ウルフ達と共にルドルフの城へと行つてた
はずだけど・・・。

「へへっ・・・。ヨーロの事が気になつてね。抜け出して來たんだ」
あらら・・・。

私のために・・・こんな危険な所まで・・・。

「行く先は分かつていたからそれほど難しい事じやなかつたよ。」

巨人の口”までは匂いを嗅げたし

そういえば・・・。

彼女は狼だものね。

嗅覚はかなり鋭い。

バタン！！

突然扉が開かれる。

ユニークだわ。

どうしたのかしら・・・？

あんなに慌てて・・・。

「とりあえず扉に鍵を」

意味も分からず、とりあえず扉に鍵をかける。

「大変です！ヨーロ様！！」

「え？どうしたの・・・？ユニーク」

「外を見てください・・・。エルフ達がここを取り囲んでます！」

え・・・！？

私は窓からそつと外を見る。

これはどういう事・・・?

エルフ達が私達の泊まつてる建物をびっしりと埋めている。

しかも・・・。

手にはなにやら物騒な物が見える。

剣だのハンマーだの斧だの・・・。

何で・・・? ? ?

「何やら分からぬが・・・。逃げた方が良さそうだな」
確かに・・・。

あれはどう見ても私達を狙つてる。
表情を見ると・・・。

いつものあれだわ・・・。

クロウの魔力にやられている・・・。

理性を失った目・・・。

どういう事・・・?

突然・・・。うなるなんて・・・。

ドンドンドン！

扉が勢いよく叩かれる。

まずい・・・。

エルフ達が扉の向こうまでやって来た・・・。
どうしよう・・・。

ウルちゃんが窓を開ける。

「屋根に行こう。そこしか逃げ道は無い」

「ちょ・・・ちょつと待つてよ！ 私やフュアはいいけど・・・、コ
ーロやウルちゃん、ロボはどうなるの？」
そつ。

この三人は屋根に登るなんて出来ないわよ。

「私は大丈夫」

そう言つと、ウルちゃんは人間の姿に変わる。
そういうえば・・・。

彼女はこいついう能力もあつたんだわ。
だけど・・・。

コーロはこいつはいかない。

しかも・・・ロボはまだ目覚めない
かと言つてコーロとロボを置いて行く訳にもいかないし・・・。
どうすればいいのかしら・・・。

ガン！

扉の向こうで何か凄い物音がした！
おそらく・・・。

斧か何かで破壊しようとしているんだわ。

魔力が得意なエルフが物理的行為をするなんて・・・。
かなり理性を失っている。

それほど、クロウの魔力は凄いのね。

「のまほじや・・・。

そつ壇くは持たない。

なんとしても・・・ゴーリとロボを登らせる方法を考えないと・・・

。 「アーロ様・・・行つてください。俺は・・・ここで終わりです
「何を言つてゐるよ! 置いて行けると思つてゐるの! -」

そつ。

ゴーリとロボを置いて行くべらうなら・・・。

このまま一緒に殺される方がマシ。

私は何があつても仲間を見捨てるなんて出来ない! -!

「ロボ! -!

叫ぶけどロボは田覓めない・・・。

どうしたのかしら・・・。

「葉子! -!

ウルちゃんが叫んでいる。

でも・・・。

これまで何回も助けてくれたゴーリとロボを、どうして簡単に見捨てるなんて・・・出来ない。

・・・え?

私のはめている指輪が・・・光る!?

何・・・?

頭の中に・・・言葉が自然と浮かぶ・・・。

それはまるで・・・魔法の呪文。

もしかしたら・・・。

このアーティファクトがなんとかしてくれるとも・・・。

よーし・・・。

『『シール』! -!

すると・・・。

指輪から光線が出る。

それが・・・ゴーリとロボに当たる。

え・・・！？

なんと！？

ユーロとロボが光りに当たると・・・そのまま姿が消えてしまった・
・・。

どうこう事・・・！？

ユーロとロボは何処に・・・！？

第9章 9話

私は辺りを見渡すけど、どこにもいない。

一体何処へ？

「ヨーコー早く」

きやつ！

ウルちゃんが私を屋上へと引っ張る。ん？

なんだろう・・・。

また言葉が頭の中に響く。
よーし・・・。

「『アーパ』！！」

すると・・・。

また指輪から光りが表れる。
そして・・・。

その先から・・・。

ユニーとロボが出てきた。

「！－！ユニー！－！ロボ！」

私はユニーに抱きつく。

良かつた・・・無事だつた・・・。

「ねえ・・・。ユニー・・・大丈夫だつた？」

「あつ・・・はい。何か・・・急に眠つてしまつたような感覚で・・・
・。特に何にも感じて無かつたんですが」

そなんだ・・・。

でも・・・ユニーが無事で良かつた。

しかし・・・ロボはまだ目覚めない・・・。

いつたいどうしちゃつたのかしら。

これほどの事がありながら起きないなんて。

それにしても・・・。

この指輪・・・凄い・・・。

これが無ければユニーク達と心中する所だったわよ。

「ユニーク様! 止まつてゐる場合では無いですよーー!」

はっ!

そうだつた。

下は今だにエルフ達に囲まれていたんだつた。
しかも。

部屋の扉はすでに壊されていて、私の泊まつていた部屋にはすでに
エルフ達がいる。

ここに來るのも時間の問題。

仕方ないわ。

「ユニーク、ロボ。悪いけど、もつ一度入れるわよ」

「構いませんよ」

よーし・・・。

「『シール』! !」

再びユニークとロボを指輪の力で入れる。
よーし・・・。

「逃げるわよ」

私は建物の屋根を飛び回る。

はあ・・・はあ・・・はあ・・・。

「大丈夫?ヨー!」

ウルちゃんが心配してくる。

さすがに・・・彼女は身軽だから「ううのは慣れてるかもしだれな
いけど・・・。

私はハツキリ言つてきつい・・・。

息が切れて来る・・・。

「大丈夫です?」

フェアも心配して来る。

「何の・・・修行もしてない普通の女の子だった私が・・・そうそ
う出来ると思わないでよ」

疲れて足が止まる。

ただ走るぐらいいならいいんだけど・・・。

建物の屋根から屋根へと飛ぶ行為がきつい・・・。

何せ落ちたらかなりの大怪我をするのは間違いない高さだし・・・。

「・・・まずい!奴らも屋根を伝つて来た!」

ウルちゃんの言葉で後ろを振り向くと・・・。

エルフ達も屋根を登つて追い掛けて来ている。

でも・・・。

足が動かない・・・。

走るのは出来るけど・・・。

屋根から屋根へと飛ぶのは・・・無理っぽいかも。

かと言つて下は高いし、降りられたとしてもエルフで埋め尽くされ
ている。

街中のエルフを敵に回してしまつてるらしいわね。

ましいわ・・・。

「仕方ない・・・」

ウルちゃんがそう言つと、狼の形態に変わる。

「あたいに乗りな！」

「え？ 大丈夫なの？」

「それぐらい平氣さー！」

・・・よし！

ここはウルちゃんを信用しましょう。

私はウルちゃんの背中に乗る。

「しつかり捕まつてな！」

すると！！

もの凄い勢いで走り出す。

凄い・・・。

そのまま・・・華麗に飛ぶ。

流石に・・・彼女は身のこなしが軽いわ。

スピードはユーロの方が速いけど・・・。

こうこう屋根から屋根へと飛び回るという事は彼女の方が得意なの
ね。

第9章 11話

なんとか……。

街の端の方まで逃げれた。

これもウルちゃんのおかげだわ。

外へと続く洞窟が見える。

これはここへ来る時に通つた所とは反対側にあるから……。
先へ進むための道だと思つ。

後ろを振り向くと……。

エルフ達がこっちへと向かつてゐるのが見える。

まずいわ……。

仕方ない……。

「『アーパ！』」

私はユニークとロボを外へと出す。

そのまま私はユニークへと乗る。

「ロボ！乗つて」

これでよし！

やっぱり、指輪の中のままは確かに効率がいいけど……。

私としてはこうして一緒にいる方がいい。

これでさらに離さなきや！

「ヨーハはん、そのままちゃんとしがみついてや」

「ロボ！…

起きてたのね！

「大丈夫？」

「わいの事はええ。とにかく前をちゃんと見て……」

・・・?

変なロボ。

今、後ろを振り返る余裕なんて無いのに……。

・・・?

なんか・・・。

急に後ろの気配が無くなつた気が・・・。

「ロボ?」

後ろを振り返る。

え!?

ロボが・・・。

ゴーロから降りている。

どうして!?

「ゴーロー待つて!ロボが途中で降りてる!」

「ぐらりロボが強いからと言つても、あれだけの数と戦うのは無謀よ。

引き返して、ロボを助けなきや・・・」

「行くんや!わいの事はええ!」

「またそんな事を言つの!」

今度は何を考えてるの?

「もうわいの役田は終わりや・・・。ええか?わいの本郷の役田は終
妖魔キラーを持つ者を倒す事や。そういう意味ではわいの役田は終
わってるんや・・・」

え・・・?

「やう・・・。ヨーロはん、あんたのその優しさで・・・わいの機
能は停止しちよつとしてこる。せやけど・・・最後までヨーロはんの
役に立ちたいんや」

ちよ・・・ちよつと!

「ロボ!何を考えてるの!?」

「わいの旅はここで終わりや・・・」

な・・・何を言つて・・・。

「ホンマに最後まで冒険したかったんや。せやけど・・・もう体が
言つことを利かないんや・・・

「ロボ!」

「ヨーロはん・・・の妖魔界を・・・救つてや・・・

そんな・・・。

「ユーロはん…急いで出るんや…最後に…・・最後に」を破壊する

最後だなんて・・・そんな・・・。

「分かりました」

「ユーロ…」

突然ユーロは走り出す！

「待ちなさい！…ロボを…・ロボを助けなきや…・・・」

「こればかりはユーロ様の命令でも聞けません」

そんな・・・。

「ロボ――――――」

「ありがとな・・・ユーロはん・・・・”核融合”――」

第10章 目

つにここにまでやつて来た。

この旅の目的地。

巨人の目。

ここで・・・。

クロウの居場所を知る事が出来る。

そうすれば・・・。

クロウを倒す事も出来る。

私の妖魔キラーで。

それが・・・すぐ側にある。

かなり長くて険しい道のりだつたけど。

それも、もうすぐ終わりに向かえようとしている。

ここに来れたのは、みんなの協力があつてこそ。

フェア。

ユニー。

ウルちゃん。

そしてロボ。

誰一人欠けていたつて、ここに来る事は出来なかつた。

感謝を言つても言ひ尽くせないほどだわ。

それにしても。

近くまで来ると・・・かなり大きな物なのね。

あと・・・もう少しど・・・。

ロボ・・・。

私は改めて覚悟を決める。

そう。

今まで仲間のために死ぬ覚悟はあつた。

でも！

今は・・・逆に死ねなくなつてしまつた。

口ボのために・・・。

何が何でもこの妖魔界を救わないと・・・。

そりやあ、確かにこれまでも覚悟はあつたけど。
初めての仲間の犠牲が私の中で何かが変わった。
妖魔キラーを倒す運命を持った口ボ・・・。
その宿命は終わった。

でも私の運命と宿命は終わってない。

だからこそ。

口ボが夢見た、妖魔界の平和を私が実現しなくてはいけない。
口ボに代わって。

絶対にやりとげないといけない。

「ヨー口様！！」

フェアの声でふと思考を止める。

「どうしたの？フェア」

「何かが来ます！」

まったく・・・。

のんびりも出来ないわね。

向こうからやってきた。

田のすぐ側にまで彼は来た。

ヒューマノイドの姿で・・・鎧に身を包んでいる。

全身鎧姿で・・・まるで騎士のようでもある。

「俺こそが四天王の最後の一人、ヘレクロウス様だ!」

・・・律儀な自己紹介ありがとうござります。

「おまえが妖魔キラーを持つ者だな? 倒してくれるわ! ! !」

剣を抜く。

来る・・・!

私はそれをなんとか避ける。

さて・・・。

どうしよう・・・。

こうこう正當派ってのは初めて。

だからこそ、逆に戦い方が限定される。

鎧に身を固めているから、弱点らしき部分も分からないし・・・。

どう戦えばいいのか・・・。

口ボ・・・。

ううん!

もう口ボはない。

いつまでも仲間に頼つちゃ駄目。

私は妖魔キラーを使わなくちゃいけないんだから・・・。

「ヨーロ様! !

「フュアやヨーロは下がつてて! !

クロウと戦う前に、ここでは私は死なない覚悟をしなくちゃいけない。
もしかしたら・・・。

私は今まで仲間に甘えていたのかも知れない。
すぐに頼っていたかもしれないし。

でも・・・もう甘えちゃいけない。

「どうした！妖魔キラーとやらは使わないのか？」
くつ・・・。

そう簡単に使えるようなら苦労はしないわよ。

「何だ？使えないのか？」

「そうよ！」

私はあっさり認める。

どうせ誤魔化したってどうしようもないし・・・。

「そうか・・・。それなら・・・楽勝だな」

うつ・・・やっぱり？

「悪いが・・・死ね！！」

「どうした！ どうした！」

有利だと知ったとたんに、調子に乗って剣を振り回すヘレクロウス。
くつ・・・。

確かに・・・。

かなり不利。

まずこっちに武器が無いのはいつもの事なんだけど・・・。
相手が鎧に身を包んでるのは初めて。

しかも・・・。

かなり身軽に動いている。

普通、ああいう重たそうな鎧を付けてると動きが鈍るはずなんだけ
ど・・・。

彼にはそれがない。

弱点らしき部分がまるつきり分からぬ・・・。

何か無いのかしら・・・。

いつも私の戦い方はまず弱点を攻める所から始まる。
なにせ・・・思いつきりこっちが不利だから。
まともな戦い方してたんじや、こっちが死ぬだけだもの。
何か・・・何か弱点が・・・。

「ちょこまかと・・・、さつさとやられる……」

衝撃が伝わるほど勢いで剣を振り下ろす。
・・・かなり無茶を言つてゐるわね。

こつちはそう簡単にやられては困るつてーの!!

「『粘着地面』……」

え・・・？

突然・・・私の立てる地面の部分だけ柔らかくなる。
な・・・なんで・・・？

「魔法をかけてもらつた。これで終わりだ」

いつの間にか魔法も解けている。

体が普段通りに動く。

それに剣も手の中にある。

これは・・・。

こつちの有利に変わったわね。

「くつ・・・・」

ヘレクロウスが一旦下がる。

「卑怯だぞ！ 剣なんか出しゃがって！！」

「・・・あのねえ・・・。散々卑怯な手段を取った人が言つ台詞じやないわよ・・・」

本当に・・・。

今更それを言つ・・・?

「とにかく！ これで勝負は分からなくなつて来たわよ！」

そう・・・。

こつちには最強の武器。

妖魔キラーがある。

いくら鎧で身を包んでいるとはいえ。

皮膚に当たつただけでこつちの勝ちになる。

こうなると攻撃する所は限定されるけど。

避けるしか無かつた状態に比べれば、だいぶ有利になつて来たわ。

「それが妖魔キラーか・・・」

「そうよ。妖魔界の住人にとつて天敵とも言える武器よ」

あまりに強すぎるために仲間がいる所じや使いづらいけど・・・。

今みたいに仲間がいない所だと、逆に使いやすい。

私は剣を両手で握る。

さて・・・。

どこを攻撃すればいいのかしら・・・。

油断なくヘレクロウスを見る。

こいつの性格からして、まともに戦うてのは考へない方がいい。
また・・・何かを企んでいるかもしねれない。
だから・・・。

早めに決着を付けた方がいい。

そうしないと・・・また不利になりかねない。
よーし・・・。

狙うは・・・顔の部分！

あそこが一番隙間が広い。

当然よね。

目で見ないといけない部分もあるし、息をするための穴も無いとい
けない。

それだけ隙間がどうしても出来てしまつ。
だから・・・。

あそこが一番狙いやすい！

第10章 5話

私は剣を顔の位置まで上げる。

そのまま・・・水平に横に構える。

これで力を込めたまま突きを行う！

「くつくつく。残念ながらやられる訳にはいかない！――」
え・・・？

何をするつもり・・・？

「『防御付』！『攻撃付』『俊敏付』――」

え・・・？え・・・？え？え？え？

攻撃が避けられた！

な・・・何！？

「守備魔法をかけさせてもらつた。これで俺の有利だ」「なつ・・・。そんなの卑怯じゃない！！」

そんな・・・。

「さあ・・・。来るがいい！」

そんな事言つても・・・。

思いつきり有利なのよね・・・。

こういう時、ああいう風に自由自在に魔法が使えるって羨ましい・・・。

どうしようつ・・・。

「死ね！――」

一気にヘレクロウスが接近する！――

駄目！――

反応出来ない！――

その時・・・。

私の妖魔キラーが勝手に動いた。

ガキイン！

妖魔キラーが、相手の攻撃を防いだ。

「おのれ・・・」

ヘレクロウスが震えている。

どういう事?

もしかして・・・。

この妖魔キラーの能力?

さらに・・・。

妖魔キラーが光り輝く!!

次は何!?

・・・あつと言つ間に光りは収まつた。

何が起こつたの?

こつちはなんとも無いけど。

「なつ・・・!? 魔法が消えてる? せつかく有利になつたのに!..」

これもまた妖魔キラーの力なのかしら・・・。

良く分からぬけど・・・でも流れはこつちに来てい

よーし!

「もう終わりよ!ヘレクロウス!」

私は叫ぶと・・・。

剣を構えて走り出した!!

「はあああああーー！」

ついにーー！

剣がヘレクロウスの鎧の隙間を突いた！

「ぐつ・・・・ーー！」

決まったーー！

「やるなあ・・・。これならクロウも倒せそつだな・・・

え・・・？

なんで・・・？

ヘレクロウスがクロウを呼び捨てに？

四天王じゃないの？

クロウの部下なら・・・。

様付けしてるはずなのに・・・。

「あー、まいった。我が身を犠牲にして確かめて正解つて所だがな

へ・・・？

どういう事？

「実はな・・・。俺はあんまり奴の事を好きじゃなかつたんだ

ええー？」

「だがな・・・。俺も奴の魔力に縛られてしまつた。この妖魔界が好きだつたんだがなあ・・・」

この人・・・。

これまでの敵とは違う・・・。

「だから、この妖魔界を救う奴と戦つて・・・それで消えるなら本

望よ

ヘレクロウス・・・。

「だから・・・。少々姑息な手を使わせてもらつた。けどな・・・奴はもつと卑怯だぜ？気をつけな・・・まさか・・・。

クロウの魔力にやられながらも、ここまで自我を持つてゐるとは……。

ううん。

たぶん、最初は本当にやられていたんだと思つ。
だけど……この妖魔界を思う心が正気に戻したんだと思つ。
そしてその罪滅ぼしに……私と戦う事を決めた。
あえて卑怯な手段を使いながらも。

「頑張れよ」

そう言い残すと……。

ヘレクロウスは消えてしまった。

「……何だつたんですか？あれは……？」

呆然と見守つているフェア。

「あいつ……私に許してもらいたかったのね……。この妖魔界を混乱させた事を」

あつさり引いた所を見ると……。

クロウの完全な手下つて訳でも無かつた。

ここにもまた、悲劇に巻き込まれた人がいた。
と……とにかく。

これで……いよいよ巨人の目に進行する訳ね。

第10章 7話

口ボ・・・ついにここまでやつて来たわよ。
巨人の目。

まさに目のように丸く・・・かなり巨大。
ここに来ればクロウの居場所が分かる。
思えば・・・。

私はここに来る為に長く苦しい旅をしていたのね。
だけど・・・。
それも終わりを迎える。

ちょっと寂しい気もするけど・・・。
だけど！

この妖魔界を救う為。

私はやり遂げなくてはならない。

このまま・・・クロウを放置する訳にはいかないから。

私は・・・そつと目に手を触れる。

ちょっと冷たい・・・。

こうしてみると・・・。

巨大なガラス玉って感じ。

それほど綺麗でも無いけど・・・。

何か不思議な感じはする。

たぶん・・・魔法の力があるのかもしれない。

それとも・・・これもアーティファクト？

何でもいいわ・・・。

クロウの居場所を・・・教えて・・・。

自然と目を閉じる。

何か・・・聞こえるような・・・。

この目からなのかな・・・。

なんだろう・・・。

「葉子？」

え！？

目を開ける。

え・・・？

え？

ええ――――！？

ここは・・・！？

何で・・・？

どうして？？？

「どうしたの？葉子。ぼんやりしちゃって」

「お・・・お姉ちゃん・・・」

そつ・・・。

ここは・・・。

私の生まれ育つた家。

どういう事？

そつきまで・・・妖魔界にいたのに。

「大変！戻らなきや！！」

「戻る？何処に？」

「決まってるじゃない！―妖魔界によ―！」

何で戻つて来たのか分からぬけど・・・。

私は妖魔界に戻らなきや。

フェアを・・・ゴニーハを・・・ウルちゃんを・・・そしてみんなを助けなきや！―

「妖魔界？何言つてるの？」

あれ？

そういうえば・・・。

「お姉ちゃん・・・。そついえば旅行に行つてたんじや？」

そつ・・・。

家にいるつて・・・おかしくない？

それとも、もう帰つて来たのかしら

「ああ・・・あれね・・・うん。実は行くのを止めてたの

え?

どうこう事・・・?

違和感を感じたのは、お姉ちゃんの言葉がきつかけだった。
行くのを止めてた・・・?

この好奇心の塊のような人が・・?。

お姉ちゃんではあり得ない。

いくら止めても聞かずに、最後までやりきりちゃうような人なのよ
!?

それが・・・。

「さあ。久しぶりに一緒に外食でもしない?」

私の手を取るお姉ちゃん。

だけど・・・。

私はその手を振り払う。

「葉子・・・?」

「あなた・・・。お姉ちゃんじゃないわね!—」

違う!

ここは・・・私の世界じゃない!!

やはり・・・妖魔界のままなんだわ。

そうじやなきや・・・。

まだ妖魔界を救つてもいいのに戻るなんて・・・ありえない!

「な・・・何言つてゐるのよ・・・。私は・・・」

「違う!—一旦やると言つた事を途中で投げ出すなんて・・・お姉ち
ゃんじやない!—!

そづ・・・。

例えこの家にいるとしても。

旅行には行つてるはず。

「何を言つて・・・」

「そうよ!—だいたいお隣の健一さんはどうなったの?—なんで一緒じ
やないの?—」

「別にあいつなんていなくても・・・

これでハツキリと分かつた！

この人はお姉ちゃんじやない！――

生まれた頃からずっと一緒に、まるで姉弟か・・・友達には恋人や夫婦とまで言われるぐらい仲が良いのに。

それを・・・。

”いなくとも”なんて言葉は絶対に出ない！

「あなたはお姉ちゃんじやない！――」

ハツキリと言つ。

「そう・・・」

お姉ちゃんはがっくりと肩を落とす。

うん・・・。

これはお姉ちゃんじやない。

これは・・・お姉ちゃんの姿を借りた違う人！――

「私は・・・クロウを倒し妖魔界を救うまでは戻れない！！！」

「さすがね・・・、そこまで美喜子って人を信じてるだなんて『え・・・？』

それじゃあ・・・やつぱり・・・。

「それに・・・危険を分かつておきながら戻りたいだなんて・・・。

そこまでハツキリ言われたら仕方ないわ

すると・・・！

家の風景が一気に暗くなる。

そして・・・。

お姉ちゃんの姿も消える・・・。

「ごめんなさい。」この力を使うための試練だったの

そなんだ・・・。

その声の正体は……。

一人の女性だつた。

見た事ないけど……何かどこかで会つたような感じもする。変な感じ……。

翼の形のアクセサリーを兜に付け、胸鎧だけを付けている。剣は持つてないみたいだけど……。

左手に宝石みたいなのが見える。

何か神話で見たような感じもするけど。

それじゃあ……まさか！

「私はワルキュリア。この世界の神様です」

「この人が……この世界の神様……！」

「ごめんなさいね。あなたを異世界に呼ぶような事をして……」

「え？ ……それじゃあ……ワルキュリア様が……！？」

それは……初めて知つたわ。

「はい……私は私である混乱を収める為に手がいっぱいです。仕方なく妖魔キラーの能力を持つあなたを呼ぶ事にしてしまい……」

「別に……最初の頃はともかく、今は恨んでないわよ。今は自分の意志で妖魔界を救いたいって思つてるんだから」

「はい……それを確認するために今の幻覚を起こさせてもらいました」

ふーん……。

あれ？

「ちょっと待つてよ。私を呼んで起きながら試したつて」

「それも仕方ないのでです。このアーティファクトを作動させる為の必要な事なのですから」

なるほど……。

「それに私が直接呼んだ訳ではありません。もつとも私の作ったアイテムの効果で呼ばれたのだから、同じ事だと思いますが」そっか。

やはり、アーティファクトの効果で呼ばれたのね。

「とにかく・・・クロウの居場所は教えて貰えるんでしょう?」

そう・・・。

私はその為にここまで来たんだから。

そういうまどろっこしい事はどうでもいい。

「はい・・・。もちろんです。あなたの覚悟が知りたかっただけですから」

ワルキュリア様も人が悪いわ・・・。

「それでは・・・クロウの居場所を教えます!」

いよいよね・・・。

私は緊張する・・・。

「その場所は・・・」

これで・・・よしやく・・・。

この旅も終わるのね。

クロウを倒す時がやつて來た・・・。

ちよつと寂しいけど・・・。

やらなきゃいけない事。

そして・・・。

ゆっくりとワルキュリア様は私の前に映像を見せる。。

そこは・・・。

私にとつても意外な場所だつた・・・。

「ヨーロ様……？」
はっ！

フェアの言葉で気がついた。
どうやら元の巨人の目の前へと戻っているみたい。
今までの事がまるで夢のような感じ……。
でも……。

私はハツキリと覚えている。

クロウの居場所を。

「大丈夫ですか……？」
「ええ。大丈夫よ、フェア」

どうやら……。

他のみんなは何が起こったのか分かつてないみたいね。
「クロウの居場所を教えてもらつたの。ちゃんと……」

「そう……。それで……何処なんですか？」

私は辺りを見渡す。

みんなは不思議に思つてゐるけど……。
あつた！

私は無言で進む。

「ちょ……ちょっと……ヨーロ様……何処へ？」
「決まつてるでしよう？クロウの所よ」

そう……。

それはあまりにも意外だつたけど……。
ワルキュリア様の言葉だもの。

間違つてゐるはずがない。

私は意を決して進む。

「分かるんですか？誰の案内も無しに？」
「ええ」

私はキツパリと並ぶ。

そこは・・・。

巨人の目を越えてさらに奥へと行く。

そこには腰ほどの高さもある雑草が生えていた。

普通、こんな所を進んでも、その内方向が分からなくなる。
でも・・・。

そこには、一人が通れるだけの道があった。
良く見ないと絶対見落とすような所だけど。
そこを私は進む。

そして・・・。

進んだ先にあつたのは・・・。

私の求めた場所。

「えつ・・・！！」

フェアが驚いている。

いえ、驚いてるのはフェアだけじゃない。
ユーノもウルちゃんも驚いている。

そう・・・。

そこは私も良く知ってる場所だった。

そう・・・。

そこには・・・。

見慣れた・・・。

ルドルフのお城が見えていたのだった。

第11章 敵

「な・・・なんで！？」

フェアはしきりに驚いている。

それはそうだろう。

ここにきて、私達の常識である”世界は丸い”といつのが出てくるとは思わなかつたし。

だいたい”巨人”つていうのに引っかかるでしょうね。
この大地に巨人が眠つてゐるがごとく、真つ平らな所だと思つちやうだらうし。

「まさか！ルドルフ様がクロウ・・・！？」

フェアの言葉に・・・しかし私は首を横に振る。

違う。

ルドルフがクロウじゃない。

クロウは・・・違う人物。

私にはその心当たりがある。

私はそのまま・・・。

ある一点へと向かう。

そこは・・・私も来た事のある場所。
思えば・・・。

私はそこから旅が始まつたと言つても過言ぢやない。

全ての始まり・・・。

その場所へ・・・。

私は・・・そこへと入る。

「おや・・・。また久しぶりな顔じやの」

そう・・・。

そこは・・・。

「ドルイドのオババ・・・」

ゴーッがつぶやく。

「まさかとは思つたけどね。でもよくよく考えてみれば当然の話よね」

「なんじゃ・・・? いきなり・・・」

そう・・・。

私には確信があつた。

「どういう事ですか・・・? ヨーハ様・・・」

フェアが聞いて来る。

「つまり・・・。ドルイドのオババがクロウだつて事か」

そう・・・。

それしか考えられない。

みんなは驚いているけど・・・。

確かに・・・。

ありえないと思うかもしれない。けど・・・。

ドルイドのオババこそがクロウ。

そう考えれば・・・。

意図が分かる。

「まさか……巨人の目が……そう言ってたんですか？ ドルイドのオババがクロウだつて！」

フェアが叫ぶ。

「ううん……ルドルフの城の映像だけだつたわ。」

そう……。

それしか見え無かつた。

けど……。

私はその映像だけで十分分かつた。

まずルドルフがクロウでは無い。

これでも人を見る目は確かだもの。

あいつがクロウって事はありえない。

それなら……このドルイドのオババの方がありえる。

そして、私は今回の眞実にたどり着いた。

何故……こんな事になつたのか。

何故……私を呼んだのか。

そして……。

クロウの正体を……。

「だいたい……不思議じゃない？ なんで”巨人の目”からさら

に奥へ進んだら、ここへたどり着いたか」

これはみんなにとつても意外な事でしょう。

今まで巨人の目に行くには、それぞれ目標となる地形を辿らないと行けない、遠い所だと思っていた。

それはルドルフやフェアもそうだつた。

なのに……。

何のことはない。

ちょっと反対側に行くだけで、そこにたどり着けるなんて……誰が思うだろうか。

つまり・・・。

ここに来て、私達の世界の常識が妖魔界にも当てはまるという事。
そう・・・この妖魔界も丸いという事。

つまり、私達は必死になつてぐるっと回ったという事。
ただ・・・目標もなく巨人の目に行くのは難しい。

だから今まで他の人が巨人の目に行つた事が無かつたんだわ。
だけど・・・。

このドルイドのオババは違つた。

つまり・・・。

巨人の目へ行く近道を知つていた。

だからこそ・・・。

今まで占いが当たつていたんだわ。

あの巨人の目の力を使えば知りたい事が分かるものね。
だけど・・・。

今回だけは違つた。

そう・・・。

今回・・・私を呼んだ理由それは・・・。

「今回・・・私を呼んだのは・・・わざと遠回りの道のりを行か
せる事によつて・・・、その道中や四天王によつて確実に私を殺す
事だったのね」

そう・・・。

クロウは妖魔界の住人。

当然・・・私の妖魔キラーが弱点。

そんな存在を放つておける訳も無かつた。

そこで・・・今回の作戦を考えた。

それは・・・。

今まで隠していた巨人の目への行き方を利用した方法。この困難な道のりを、あえて行かせる事で私を殺す事。確かに・・・。

一步間違えれば私は死んでいた。

そうなればクロウの思う通りだった。

だけど・・・。

私は巨人の目までたどり着いてしまった・・・。

そして・・・。

そこでクロウの居場所を知る事により・・・。

この計画を見破る所までたどり着いた。

「もう誤魔化しても無駄よ。あなたがクロウで・・・今までの占いは”巨人の目”の力のおかげだつて事はバレてるんだから」

そう・・・。

ここにたどり着いた時点で・・・。

クロウの計画は崩れている。

「あなたの唯一の失敗はね・・・。あの”巨人の目”には続きがあるって事を知らなかつた事よ。あなたには私が死んだ映像が見えていたかもしれないけれど、私はこうしてここにたどり着いている!...ハツキリ言つて、何回死ぬような目に合つたか分からぬけれど・・・。

そのどちらかを見て安心して私を呼んだに違ひない。

でも、続きがあるという事を知らないために私は死ぬ事は無かつた。

「そうかい・・・。全てバレてるのか・・・。ワルキュリアめ・・・。俺が散々利用してやつた仕返しつてやつか

突然・・・声が変わる。

おばあちゃんの声でなく・・・若い男の声。
これこそが・・・クロウの声なのね。

「はっ！！」

突然！！

手から魔法が放たれる！！

私達は飛び下がる。

攻撃魔法！？

「みんな！逃げて！」

私達は慌てて洞窟を出る。

振り返るとクロウのいた洞窟は崩れ落ちている。
だけど・・・。

その奥からクロウが表れた。

やはり・・・。

読み通りだつたわ。

そして・・・。

ついに・・・。

ここまで来たのね。

クロウとの対決。

「よくドルイドのオババを疑えましたね
フェアが感心する。

「まあ、私は部外者だし。だいたい変だとは思つたのよ。だつて
安全なルドルフの城が近くにあるのに、なんでそこへ逃げないんだ
ろう?つて」

一步外へ出たら危険だつて事は私ですら分かつてゐる。
それなのに避難しないつて事は……逃げる必要が無いのか逃げれ
ないのかのどつちか。

そこでワルキュリア様がこの城への道のりを見せた事で分かつた。
この城の周りで怪しい人物はドルイドのオババだけだと。
「みんなは下がつて。こいつだけは……私一人の力で倒したい
の」

私はそう言つた。

そう……。

こいつだけは許せない……。

このクロウだけは……!!

私一人の力で……倒す!!

「出来るのか?」

クロウが凄むけど、私は受け流す。

「出来るわよ!…」の……妖魔キラーで!…

私は剣を出す!

あの洞窟に行つた時点で……。

戦う事はすでに決意していた。

当然……剣を出す準備も万全だつた。

私は剣を構える。

みんなは後ろで見守つてゐる。

手出ししてもらいたくないから……。

ありがたいわ。

「くつ・・・。だが・・・それは当たらなければいい！」

また！

手から攻撃魔法が！！

私は避ける。

あれは・・・。

かなりやっかいね。

こつちは剣だから、接近しないといけないのに・・・。
まずはあれをなんとかしないといけないわね。

次々と攻撃魔法を打つクロウ。

近づく手段がない・・・！

でも・・・。

一人の力で倒したいと言ったからにはなんとかしたい。

・・・そうだわ。

この指輪。

この指輪はアーティファクト。

まだまだ魔法の力が込められているはずだわ。
これを使えば・・・なんとかなるかも。
まだ詳しい使い方は分からないけど・・・。
剣と同じ要領でやつてみる！

避けながらも・・・。

精神を集中する！

第11章 5話

クロウの攻撃魔法が来る！

だけど・・・。

指輪の力が発動する！！

なんと！

風の楯が表れた！！

バシュイ！！

これで魔法も防げる。

「なっ・・・」

クロウも驚いている。

だけど・・・！！

この機会に・・・！

一気に近づく！！

これで一気に片を付ける！！

「くっ・・・」

クロウも慌てる。

だけど・・・。

こいつだけは・・・。

絶対に許さない！！

「はああああ！..」

だけど・・・。

クロウが攻撃魔法を地面にぶつける！

くっ・・・。

一旦下がる。

「俺はここで死ぬ訳にはいかないんだ！」

「何言つてゐるのよ。自分の事しか考えてない奴が・・・周りの人を巻き込んで！！」

別に自己中心的なだけなら相手にされないで済む。

だけど・・・。

こいつは周りの人達も巻き込んで・・・悲しい思いをさせている。

「あんだけは・・・絶対に許さない!!」

「何言つてるんだ。自らの欲望を満たすのは誰にでもある事だろ?」

「そうだとしても・・・そうだとしても!そのせいいでどれだけ周りを悲しませるの!!そんなのは間違ってる・・・目標に到達するつてのはそういう事じゃないよの!!」

「何言つてる。おまえだつて・・・”田人の田”にたどり着くまでに・・・どれだけ周りに迷惑をかけてる?その・・・おまえの仲間とやら」「冗談」

違う・・・!

確かに・・・。

フェアやユニークには迷惑をかけたかもしれない。

ウルちゃんにも知らない所で苦労をさせて来た。

そして口ボ・・・

でも・・・。

私の仲間は自分の意志でやつてくれた・・・。

大事な仲間・・・。

だから・・・。

「違う!!

第11章 5話（後書き）

次回更新は10月26日（月）予定です。

第11章 6話

私は気持ちを落ち着かせる。

「くつ・・・・。愚かな事を・・・」

クロウがあせつている。

あまり感情的になりすぎると、その隙を突かれる。

冷静に・・・精神を集中して・・・。

こっちのペースにしないと・・・。

そうよ。

こういう奴だつて分かつていた事じやない。

落ち着かなくちや。

私は剣を構える。

行くわよ・・・。

妖魔キラー。

「はあああああ！！」

クロウに向かつて突進する！！

「くつ・・・・！」

クロウはまたもや魔法攻撃を放つ。

だけど・・・。

私は怯まずにそのまま突き進む！！

痛みを感じるけど。

今はそれを気にしている場合じやない。

例え傷があつたとしても。

後でユーノに治してもらひ。

だから今は。

痛いなんて言つてられない！

「はあああああ！！」

クロウも下がるが・・・。

だけど・・・。

私は構わず・・・。

そのまま・・・。

行く！

下がつてなんていられない！

そして斬りつける！！

バシュ！

やつた！

クロウの体に完全に・・・当たった！！

うん、間違いないく。

当たった。

すると。

そのまま・・・。

クロウの体が消えていく・・・。

やつと・・・。

決着が付いた・・・。

私は・・・。

クロウを倒すためにここまで来た。

それが・・・。

ようやく実った・・・。

ふう・・・。

「ヨーロ様・・・」

私は剣を引っ込める。

ユニコやフェア、ウルちゃんと抱き合ひ。

やつた・・・。

私は・・・。

達成したんだわ・・・。

「危ない！！」

・・・え？

それは突然だつた。

ウルちゃんが・・・。

私がばつていた。

鋭い針のような武器が・・・。

ウルちゃんの体を貫いていた。

そのおかげで・・・。

私には到達していない。

ウルちゃんの体がゆっくりと倒れる。
まるで・・・。

スローモーションのように・・・。

「ウルちゃん！！」

どういう事！？

もう・・・クロウは倒したといつのこ・・・。

なんで・・・？

この武器は・・・何！？

「ちつ・・・。仕留めれなかつたか」

え・・・！？

そこには・・・。

クロウが立つていた。

そんな・・・！？

私の妖魔キラーで切つたのに！！

そして・・・。

消えていく姿も見ているのに！！

なんで・・・。

「なんで生きてるのよー！－！」

信じられない光景を見ていた。

「くつ・・・ユニコ！」

私はユニコを呼ぶ。

ユニコが治癒の力を使ってウルちゃんを治している。

「これは・・・かなりやばいですよ。急所を貫いたらしく・・・どんどん体力が弱まっている！」

そんな！！

ユニコが焦つてゐるなんて・・・。

でも・・・どんどん傷が治つていく・・・

「くつ・・・。つぐづぐ邪魔な奴らよ。お前らをえいなれば、その娘は死んでいるものを・・・」

こいつ・・・。

こいつのせいで・・・。

ウルちゃんが・・・。

こんな目に合つてしまつた。

「喋るんじゃないわよ・・・。私は・・・ここまで怒りを覚えた事は無い・・・！」

妖魔キラーで切つたはずなのに・・・！

なんか・・・。

怒りがこみ上げるわ！！

絶対・・・。

こいつだけは許す訳にはいかない！！
今までにないぐらいに・・・。

神経をクロウに集中する！

こいつだけは・・・。

何が何でも・・・倒す！！

おそらく・・・。

何か・・・能力を使つたに違いない。

私はこれまでいろんな常識外れの体験をしているから分かる。
そう考えると・・・。

手応えが無かつた感じもした。
くつ・・・。

そう思うと・・・。

私の油断もあつたんだわ・・・。

ごめんなさい、ウルちゃん。

だからこそ！

今度こそ・・・。

今度こそ・・・仕留める！！

必ず！

ピカーン！！

えつ・・・！？

指輪が光る！？

何つ・・・！？

その光が・・・。

私を包む・・・。

その光が消えると・・・。

私の体に鎧みたのが包まれていた。

だけど・・・まるでつけてないぐらいの軽い。

これは一体・・・？

「なつ・・・・！」

クロウも驚いているけど・・・。
これもアーティファクトの効果なんだわ。
ありがとう。

あなたも私を助けてくれるのね。

「はっ！」

一気に飛びかかる！

速い！！

スピードも増している！！

「ハの！！」

クロウは魔法攻撃をしかける！

だけど・・・。

私の前に楯が表れる！

それを左手に付け・・・。

それで防ぐ。

「な・・・。そんな・・・馬鹿な・・・」

「何言つてるのよ。あんたが生きてる事自体がありえないのに」

そう・・・。

こいつは・・・。

みんなの為に・・・仲間の為に・・・。

倒すべき存在！！

私は剣を構える。

今度こそ・・・。

妖魔キラーで・・・倒す！！

「はっ！！」

一気に斬りつける！！

また・・・姿が消えたけど・・・。

やはり・・・手応えはあつたみたいけどううん。

これも奴の手口なんだわ。

これをなんとかしないと・・・。

クロウを完全に倒す事は出来ない。
どうすれば・・・。

『田に頼るんやない！』

え！？

今・・・ロボの声が聞こえた気がしたけど・・・。

まさか・・・でも・・・

例え幻聴としても私は嬉しかった。

今の状態でのロボの声は百人力だわ。

うん、そういう事ね。

ドルイドのオババの姿をしていたから、あれが仮の姿かと思つたけど・・・。

こいつはおそらく・・・。

いくつかの姿に変身出来るのかもしれない。

そうなると・・・。

真の姿はまるで違う形なんだわ。

それを口ボは言いたいんだと思つ。

私は田を閉じる。

そして・・・。

気配を探る・・・。

・・・ん?

指輪から何やら力を感じる。

どうやら・・・。

手助けしてくれるみたいね

ありがとう・・・。

あなたも・・・いてくれたこそ私はここにいる。

色々助けてくれたわね。

あなたも大事な・・・私の仲間よ。

・・・?

・・・何か・・・。

ほんやりとだけど・・・。

邪悪な意志を感じる。

とても・・・。

憎たらしい気持ちを感じる。

これが・・・。

クロウの・・・真の姿。

これね・・・。

これに向かって・・・。

「はつ!!」

一気に・・・斬りつけた!!

「ギー やあああああ！」

凄まじい悲鳴が響いた。

つまり・・・。

真のクロウを・・・斬つた証拠。

妖魔キラーの力で・・・クロウが消えて行く・・・。

「そ・・・そんなん・・・」

どんどん・・・。

姿が崩れて行く・・・。

やつと。

邪悪なる者が消えていく。

「悪い奴の末路は・・・決まってるのよ

こいつのせいだ・・・。

妖魔界を混乱にさせてしまった。

そして・・・。

みんなを傷つけてしまった。

みんなを悲しませてしまった。

みんなを苦しめさせてしまった。

だけど。

もうこれで終わり。

一度と、こいつに苦しめられる事も無い。

そうだ・・・！

「ウルちゃん！－！」

大丈夫かしら・・・。

「大丈夫です。今は氣絶してるだけですから

そなんだ・・・。

良かった・・・。

「今度こそ・・・。終わつたんですね

「 セウジネ · · ·

そづ。

今度こそ · · ·

きちんと倒した。

クロウの形をしていたのは · · ·
今や完全に無くなっている。

邪悪な気配も消えている。

そう · · ·

今度こそ · · ·

終わつたんだわ · · ·

みんなありがとう。

そして · · ·

ロボ · · ·

私 · · · ついに倒したわよ。

最後の最後で · · · 私に力を貸してくれてありがとう。
やつぱりあなたは最高の仲間だわ。

例え遠くに離れていようとも。

例え今すぐに会えなくても。
私達の絆はずつと繋がつたまま。
うん。

私は一人で倒したんじゃない。

フェア。

ユニー。

ロボ。

ウルちゃん。

みんなの力で倒せた。

みんな · · · ありがとう。

第12章 城

私は・・・。

再びこのお城に戻つて來た。
やつと歸つて來た・・・。

まさにそんな感じね。

中に入り、ふと・・・。

私は肖像絵に目が止まる。

そう・・・。

初めてこの城に來た時にも、確かにこの絵を見たんだわね。

「・・・あつ！！」

私は気づいた。

フェアも・・・ユニアもウルちゃんも驚く。

そう・・・。

その絵の・・・鎧。

それは・・・。

指輪の力で、私が身に付けた鎧とまったく同じ。
そして・・・。

持つている剣も妖魔キラーそのもの。

まさか・・・。

「どうした？」

ふと・・・。

ルドルフが姿を現す。

「ルドルフ・・・。この絵は・・・」

「ああ・・・。これか・・・。俺の祖先が描いたと言われる『伝説の少女』という題名だ」

伝説の少女・・・。

「もし・・・。この妖魔界が混乱する時が来たら、この少女が現れて・

・・妖魔界を救うと言つていた」

「これは・・・まさに・・・。

「私・・・、クロウと戦つてゐる時に・・・この鎧を身につけてたわ・
・・。そして・・・この剣は妖魔キラー・・・。私がその『伝説の
少女』かどうかは知らないけど・・・、私の格好はまさにこの絵の
そのままだわ」

まさか・・・。

この城に来た時に見ていたのは・・・。

将来の自分の姿になつていようとは・・・。

「そうか・・・。でもクロウを倒し、この妖魔界を救つたんだろ?
それなら・・・まさに君は『伝説の少女』だ」
まさか・・・。

「でも! 私一人の力で救つた訳じゃない! フェアが・・・ヨニコが・
・・ウルちゃんがいてくれたからこそ!」

そして・・・。

今はもう眠つてゐるロボがいてくれたから。
みんながいてくれたからこそ。

私はこの妖魔界を救う事が出来た。

「謙遜するな。君のその人柄もある。その人柄だからこそ・・・み
んなは力を貸した訳だろ?」

ルドルフの言葉に・・・みんなは頷く。

「さあ! とにかく今は祝おうじゃないか! !」

第1-2章 城（後書き）

残り少々となりました。
あと少しだけお付き合いで下さい。

第12章 2話

そこには・・・。

かなりの大広間だった。

そこに数え切れないほどの、妖魔界の住人がいる。いろんな姿の・・・いろんな種類がいる。

みんな・・・ここへ避難して来たのね。

「みんな！聞いてくれ！！」

一気に周りが静かになる。

じつと・・・ルドルフを見ている。

「紹介しよう。この妖魔界を救ってくれた・・・救世主達だ！！！」

私達が出る。

実は私は純白のドレスに着替えさせてもらつた。

えへへ。

こういう時じゃないと、こいつの服は着れないと思つかう。すると・・・。

割れんばかりの凄い拍手の音が聞こえる。

「そこで・・・救世主を祝つ宴を開こうじゃないか！！！」

そうルドルフが言つと・・・。

うおーーーー！という歓声が聞こえた。

凄い・・・。

みんな喜んでいる。

良かつた・・・。

これで・・・安心出来る妖魔界になる・・・。

「おう。俺もその宴に参加してもいいかな？」

そう言つて窓の外に表れたのは・・・。

ドラゴンだった！

あの・・・途中で立ち寄った街のドラゴンだわ！！！

そして・・・。

もちろんその街の人達も城へと入つて来る。

無事に平和になつたからこそ来れたのね。

「よーし!今日はたつぷりと食べて、飲め!—」

ふふつ・・・。

どんどんと食事が運ばれて来る。

「・・・準備がいいわね」

思わず本音を言つ。

「なに。邪悪な気配が消えた時から慌てて準備しただけなんだがな」

「えー・・・。

ルドルフも分かつてたのね。

「そうだ!クロウの正体なんだけど・・・あのドルイドのオババだ

つたわ

「なに!?」

これは・・・。

さすがにルドルフでも驚いたみたいね。

「今回の事は・・・自分を殺すかもしれない妖魔キラーを持つた私を殺すために・・・わざと遠回りの旅をさせる計画だつたみたいね」妖魔界の住人なら、妖魔キラーの存在を無視する訳にはいかないものね。

放つておいても来るといつのなら、あえて呼んで危険な旅をさせる。そうすれば・・・。

その旅の途中で死ぬ事もありうる。

当然・・・。

私も仲間がいなければ、クロウの思つとおりだつたかもしれない。だけど・・・。

私は無事にたどり着いてしまった。

これはクロウも計算違いだつたみたいね。

「わざと?」

「そうよ。”巨人の目”がここから割と近くにあつたから・・・それで占つてたのよ。そりゃあ・・・あの力を使えば百発百中よね」

「まさか！！」

「嘘だと思うなら、”巨人の足”を目標に、反対側へまっすぐ行つてみなさい。よく探せば一人分の道もあるわよ。でも私だって”巨人の目”から眞実を教えてもらうまで分からなかつたけど……」
そう……。

まさかこの妖魔界も丸いという常識が通用するとは思つて無かつたけど……。

「そうか……俺もクロウに騙されていた……という訳か」「仕方ないわ。それこそ”巨人の目”に聞かないと分からぬもの」正体を明かさない限り……。
信用しても仕方無いわ。

あいつはずつと……ドルイドのオババを隠れ蓑にしていたんだから。

そして……”巨人の目”を悪用していた。

ただ唯一の誤算は、自分の待つ運命を知つていなかつた事。”巨人の目”的の唯一の欠点をあいつは知らなかつたんだわ。自分を利用していた物に裏切られるなんて、皮肉なものね。

一昼夜に続く宴も終わりを迎えるとしていた。
さすがに……あちこち食い潰れていたり飲み潰れているのが見えるしね。

「どうしても帰るのか？」

ルドルフが訪ねる。

「ええ。妖魔界は救つたし……私には元の生活もあるから」

そう……。

今はお姉ちゃんは旅行に行つてゐるけど、帰つて来た時にいなかつたら心配されると思つし。

「そうか……。残念だな……。君にはこの妖魔界の女王になつてもらおうと思つていたのに……」

・・・はい？

「じょ・・・女王・・・？」

「そうだ。俺が今の王だからな。君が女王」

え・・・と・・・。

「それって……どういう……意味？」

「だから。俺と君が結婚してだな……」

・・・はい？

えつと・・・。

え！？

「えええええ——！——！」

け・・・結婚！？

「何でそんなに驚く？」

「だつて……。なんで結婚しなきゃいけないの？？？」

そりやあ……。

確かにルドルフは格好いいわよ。

でも・・・。

それとこれとは違う。

だいたい・・・私はルドルフがどういう人なのか、ちゃんと分かってもいない。

好きだと嫌いだと・・・。

そういう感情すらまだない状態なのに・・・。

「だって・・・。俺はこの妖魔界を平和に保つ存在で・・・君はこの妖魔界を平和にした存在だろ?」

「あのねえ・・・。結婚つて・・・そんな単純なもんじゃないのよ・・・」

頭痛い・・・。

それは・・・さすがにその妖魔界の常識に合わせたく無いわ・・・。

「そうかな・・・。俺は君の事が好きだが?」

「はい?」

目が点になる。

「初めて見た時からかな・・・。今の君も十分魅力的だが・・・」

「だからって!!私の意志はどうなるのよ!!--」

勝手に決めないでよ!

「えー?いいじゃないですか、ヨーロ様」

「フュア!!--とにかく・・・、私は元の世界に帰る!!--」

もう・・・。

これ以上ここにいたら、つやむやのうちに結婚させられそうだわ。

「大丈夫だ。これからゆっくりと・・・俺の良さを教えてやる」

「いや――――――帰して!!--」

「冗談じゃない！」

「いくらなんでも結婚だなんてありえない！！」

「何をそんなに嫌がつているんですか？」

「あのねえ・・・フェア・・・」

どうもこの辺りの感覚はみんなとは違つてるらしい。
すでにこの妖魔界では、祝福ムードで漂つている。
あの発言の日からすでに3日。

これ以上いたら、本当に結婚させられそうだわ。

「ルドルフ！！」

私は王の間にに入る。

その大きな椅子に悠然と座つている。

そりやあ・・・確かに美形であるのは認めるけど・・・。
そういう問題じゃないわよ。

「どうした？」

「前にも言つたと思うけど。私、帰りたいんだけど」

そう。

このまま妖魔界に留まりたく無い理由はもう一つある。

「私は突然ここに来てしまった。家ではお母さんやお姉ちゃんが心配してるとと思う。クロウを倒すまでは帰る事は考えて無かつたけど・・・」
いつして平和になつたんだから、まずは帰して」
これが本当に私が帰りたい理由。

結婚とかは別に拒否し続けていればいいだけの話だけど。

お母さんやお姉ちゃんに心配をし続けてまで、ここに留まる事は出来ない。

「例え心配していなくても、理由を話して・・・また戻つてくれればいいだけの話でしょ？」

正直、私はここを気に入つていてる。

命がけで冒険をして救つた場所というのもあるし。
ここにはフェアやヨーロ、ウルちゃんもいる。

そして・・・。

またあそこにも行きたい。

たぶん、あのままにしておいた方がいいと思つけど。
もう安全になつたから、何度も行きたい。

「それがな・・・。そつは簡単にはいかない」
え？

「どういう事？」

「今回おまえを呼んだのは、このアーティファクトを使ってなんだ
が」

そう言ひて、小さなベルを取り出す。

「これはこの妖魔界と異世界とを繋ぐアイテムなんだが・・・。残
念ながら3回しか使えない」

3回・・・?

「だつたらいいじやない。もう一度戻してまた私を呼べば・・・」

「忘れたのか？これはすでに2度使つてる」

2度・・・?

私の他に誰が・・・。

あつ！

「口ボ！」

「そうだ。あいつを呼ぶのに、すでに一度使つてている」

と・・・。いう事は・・・。

私が戻つたが最後・・・。もう妖魔界には来れない事になる・・・。
それは・・・困る。

「なんだ。そういう事なら仕方ない。帰るのは諦めるわ
「やけにあつさりしてるな」

「当たり前じやない。私だってこの妖魔界が好きなんだもの。妖魔
界に戻れないなら帰るのを諦めるわ
「ヨーロ様！！」

フェアが抱きついて来る。

「そりゃあ、確かにお母さんやお姉ちゃんの事を考えると・・・困る話だけど、大丈夫。分かってくれるわよ」

私はみんなと・・・そしてこの妖魔界を離れたく無いし。

「すまない・・・」

「いいのよ。私はここに来れて良かったと心の底から思ってるんだから

お母さん・・・お姉ちゃん。

私はもう帰れないけれど。

この妖魔界で元気に楽しく過ごして思ってます。

それは、この妖魔界が好きだから。

そして・・・。

ここに住むみんなが好きだから。

「それなら、すぐにでも結婚の準備を・・・

「それは嫌――――!」

第1-2章 4話（後書き）

今回をもちまして「妖魔界」は最終回となりました。
読んでくださった全ての読者の方々に、感謝をいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1736f/>

妖魔界

2010年10月28日06時47分発行